

聖域・街道・地割 V

— 古代ローマと日本をつなぐ —

Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre V

Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine



BEPPU UNIVERSITY REPORT OF INTERNATIONAL JOINT RESERCH

Rédaction : IINUMA Kenji *directeur*

IISAKA Koji *rédacteur*

Publication : BEPPU UNIVERSITY

82 Kitaishigaki 874-8501 Peppu JAPAN

Impression : CREATES co., Ltd

20-4 Kamegawa-higashimachi 874-0022 Beppu JAPAN

2023

2022（令和4）年度 別府大学学長裁量経費事業

聖域・街道・地割 V

—— 古代ローマと日本をつなぐ ——

Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre V

Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine

まえがき

モンペリエ第三大学、ポールヴァレリー大学との交流が始まったのは1999年からです。今年度で交流は22年となりました。現在の「宇佐とローマをつなぐ」(Usa et Rome)をテーマに研究が始まったのは、2016年9月に中津市、別府大学の企画でシンポジウム「宇佐とローマをつなぐ」が開催されたときからです。

それ以降、この6年間、「聖域・街道・地割 宇佐とローマをつなぐ」をテーマに両大学の共同研究が進められ、双方の国で合わせて、7回の研究集会を開催し、5冊の報告書(別府大学4冊、ポールヴァレリー大学1冊)を発刊しました。昨年度は、コロナ禍で研究集会は開くことができませんでしたが、別府大学で前年のシンポジウムの成果『聖域・街道・地割 IV -古代ローマと日本をつなぐ-』(Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre IV. Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine)を刊行することができました。

この2年に及ぶコロナ禍の中で、世界との直接的な交流は分断されましたが、デジタルな手法でのコミュニケーションの方法をわれわれは獲得しました。今回は、オミクロン株の世界的蔓延の中でこの方法を使い、両校のシンポジウムを実現しました。

「宇佐とローマをつなぐ 古代の街道の比較研究」(Usa et Rome. Étude comparative des voies anciennes)をテーマに本学の卒業生で筑紫野市教育委員会に勤務している小鹿野亮氏、本学の教員の赤松秀亮氏・京都大学研究員の齋藤圭氏、本学の教員の飯坂晃治氏の4人の若手の研究者が報告を準備してくれました。また、モンペリエ第三大学のアントワヌ・ペレス氏、マルティヌ・アセナ氏、本学名誉教授の山本晴樹氏からコメントを頂くことになっています。

小鹿野氏には交通遺跡としての日本の古代官道、赤松・齋藤の両氏には日本中世の田染荘(宇佐神宮領)の資料のデータ化による研究の新展開、飯坂氏には古代ローマの街道と統治行政をテーマに発表していただきます。通訳は、廣岡恵美子氏(別府大学非常勤講師)、坂井利佐子氏(別府大学非常勤講師)にお願いしました。みな、次世代を担う研究者の新しい成果です。私は、この3月をもって学長を退任し研究・教育にしばらく専念することになりました。今後も研究には関わらせていただきますが、本シンポジウムを通じて、新たな世代が主体となり両校の研究の新たな展開を進められることを期待します。

2022(令和4)年1月21日
別府大学学長 飯沼 賢司

Préface

L'échange entre l'Université Paul Valéry Montpellier III et l'Université de Beppu a débuté en 1999. Cette année académique marque 22 ans d'échanges. La recherche sur le thème "Usa et Rome" a commencé en septembre 2016, lorsque le symposium "Usa et Rome" a été organisé par la ville de Nakatsu et l'Université de Beppu.

À partir de ce moment, au cours des six dernières années, les deux universités ont collaboré sur le thème "Le Sanctuaire, la Voie et Le Cadastre : Usa et Rome", organisant au total sept colloques dans les deux pays et publiant cinq rapports (quatre rédigés par l'université de Beppu, et un rédigé par l'université Paul Valéry). L'année dernière, il n'a pas été possible d'organiser de colloque à cause du Corona virus. Cependant, nous avons pu publier les résultats du symposium de l'année précédente à l'Université de Beppu, intitulé "Le Sanctuaire, la Voie et Le Cadastre IV. Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine".

Durant ces deux années à vivre avec le Corona virus, la communication directe avec le reste du monde a été interrompue, mais nous avons acquis des méthodes de communication digitale. Cette fois-ci, malgré la fulgurance de la contagion du variant Omicron, nous avons utilisé cette méthode pour réaliser un symposium entre nos deux universités.

Sur le thème "Usa et Rome : Étude comparative des voies anciennes", quatre jeunes chercheurs ont préparé des rapports : M. Akira OGANO, diplômé de notre université qui travaille pour le Conseil de l'éducation de la ville de Chikushino, M. Hideaki AKAMATSU, enseignant à l'Université de Beppu, M. Kei SAITOH, chercheur à l'Université de Kyoto, et M. Koji IISAKA, enseignant à l'Université de Beppu. Nous recevrons également les commentaires de M. Antoine PÉREZ et Mme Martine ASSÉNAT, professeurs à l'Université Paul Valéry Montpellier III, et de M. Haruki YAMAMOTO, professeur émérite de l'Université de Beppu.

M. OGANO traitera les anciennes voies impériales japonaises en tant que vestiges de la circulation. M. AKAMATSU et M. SAITOH traiteront du développement des recherches par la mise en données des documents sur Tashibu-no-shô (le territoire d'Usa Jingu) dans le Japon médiéval. M. IISAKA traitera des voies et de l'administration de l'Empire romain. L'interprétation sera assurée par Mme Emiko HIROOKA (enseignant à temps partiel de l'Université de Beppu) et Mme Risako SAKAI (également enseignant à temps partiel de l'Université de Beppu). Ce sont là nouveaux résultats de la prochaine génération de chercheurs. Je prendrai ma retraite en mars pour me consacrer à la recherche et l'éducation pendant un certain temps. Bien que je continue à m'impliquer dans la recherche, j'espère que ce symposium permettra à une nouvelle génération de prendre l'initiative de promouvoir les nouveaux développements de la recherche dans les deux universités.

Le 21 janvier en 2022 (Reiwa, 4)

Kenji IINUMA, Président de l'Université de Beppu

目次 — TABLE DES MATIÈRES

小鹿野亮「日本の古代官道 7～9世紀における日本古代交通遺跡の研究」	p. 1
Akira OGANO, traduit par Emiko HIROOKA et Risako SAKAI, Une étude des vestiges des voies de circulation dans le Japon du 7ème au 9ème siècles.....	p. 11
赤松秀亮、齋藤圭「豊後国田染荘資料のデータ化による研究基盤の整備と新たな研究に向けた試み」	p. 19
Hideaki AKAMATSU et Kei SAITOH, traduit par Emiko HIROOKA et Risako SAKAI, Le développement d'une base de recherche par la mise en données des documents sur Tashibu-no-shô dans la province de Bungo, et les tentatives de nouvelles recherches	p. 35
飯坂晃治「ローマ帝国における街道と統治行政——街道監督官（ <i>curator viarum</i> ）によるアリメンタ制度の管理を中心に——」	p. 49
Koji IISAKA, Voies et administration dans l'Empire romain — L'administration du système des <i>alimenta</i> par le <i>curator viarum</i> —	p. 59
Antoine PÉREZ, Rapport sur la communication de M. Ogano	p. 67
アントワーン・ペレス、廣岡恵美子・坂井利佐子訳「小鹿野報告へのコメント」	p. 69
Martine ASSÉNAT, Rapport sur la communication de M. Akamatsu et M. Saitoh	p. 71
マルティーン・アセナ、廣岡恵美子・坂井利佐子訳「赤松・齋藤報告へのコメント」 ..	p. 75
Antoine PÉREZ, Rapport sur la communication de M. Iisaka	p. 77
アントワーン・ペレス、飯坂晃治訳「飯坂報告へのコメント」	p. 79
山本晴樹「報告へのコメント」	p. 81
Haruki YAMAMOTO, À propos des communications	p. 87

日本の古代官道 7～9世紀における日本古代交通遺跡の研究

小鹿野 亮（筑紫野市歴史博物館長）

1. 日本の古代交通史

まず、はじめに古代日本の交通史研究についてお話しします。

日本の古代交通路は、都がある畿内を中心として、山陽道、西海道、東海道、東山道、北陸道、南海道、山陰道の7つの「道」があり、道の名前が古代の地方の「行政区画」ともなっていました。

都のほかには、防衛や外交の拠点でもあった大宰府がもう一つの中心地であり、放射状に古代官道がのびていました。日本の古代官道は、総延長距離が6,300kmあったと推測されています。

日本の古代交通研究の歴史は、10世紀の『延喜式』という史料に記載されている、全国の駅家の名前・馬の数などから、現代に残る地名との対比によって、駅家の所在地を推定し、交通路を復原する方法が研究の中心でした。

ただし、1970年以前の研究では、「道は、段階的に高規格なものに発展していく」はずだという考え方が基調でした。「近世の街道でも2間（幅員約3.6m）ほどしかないのだから、古代においては、自然発生的で屈曲した小道であろう」との予想が大方の認識だったのです。

養老厩牧令・公式令（古代法令の規定）によれば、

- 駅家に、馬（駅馬・伝馬）を配備すること。
- 公務での馬の利用数は、鈴・伝符に記された刻みの数によること。
- 道沿いの駅家は、30里（約16km）ごとに置くこと。
- 地勢によっては、駅家は、必ずしも30里（16km）間隔でなくてもよい。

との記載があって、駅路（都と国府を結ぶ道）には駅家が置かれ、伝路（国府と郡家（郡衙）を結ぶ道）と補完的な交通網をなしていた制度であったことが分かりますが、駅舎の形式や道の幅員・構造に関する規定は全くないため、その詳細は不明でした。

1970年代以降になると、歴史地理学的方法を用いた研究が盛んになり、古代官道（大和朝廷によって作道された道路の総称として用いる）が「直線的な大道」とであると認識されるようになりました。

地理学的に抽出された古代交通に関係すると考えられる地名については、

駅家には、

「うまや・まや」駅家・馬屋・厩、「まごめ」馬込・馬籠・間米・真米・孫女、

官道には、

「おおみち・だいどう」大道、「さくどう・つくりみち」作道・造道、「くるまじ」車路・車地、「たていし」立石

などがあることが分かってきました。

特に「車路・車地」は、九州北部に多く分布しており、天智朝（7世紀後半）に築造された古代山城の近くに多いことが特徴です。山陽道や畿内にも見られ、元々は古代山城を結ぶ軍用道として計画されたものが、その後に駅路になったのではないかと推定されています。

この他にも、

○古い地図や古い航空写真などに見える直線的な旧道・地割（地形）を探す。

○現代の行政区の境界線に線状・帯状の直線的な境界線を探す。

これは、1948年に撮影された航空写真から土地の区画を抽出し、古代官道を推定した図面です。また、市と市の境界が細長く飛び出しているという面白い事例もあります。これは、古代官道であった場所と考えられています。

○古代官道のあった幅が、10～20mの帯状の土地となって現代まで残っている事例もあります。こういった場所は、切り通し地形、堤状地形、細長い土地などの痕跡となっています。

○また、ソイルマーク（土壌痕）やクロープマーク（作物痕）として古代官道が確認されることもあります。

一方で、考古学においては古代官道の認識が少し遅れて一般化し、1980～1990年代に全国各地で平野を一直線に突き抜ける道が多く発掘されるようになり、全国をつなぐ古代交通網のイメージが定着していきました。

1992年には、東京で古代交通研究会が発足し、歴史学・考古学・民俗学・地理学・国文学・土木史学などの諸分野における共同研究が行われるようになりました。

2. 考古学的な古代官道の認定

次に、日本における古代交通に関する考古学の研究成果をお話しします。

古代官道は、基本的には側溝によってその帯状に伸びる空間が仕切られていますが、道路遺構を考古学的な遺構として認知することができたのは、その「溝」の連続性を複数の場所で証明し、道路の側溝と認識していったことに他なりません。

道の形態には、側溝を設けるものと設けないものが見られます。

基本的には、平地の安定地盤地形では、道幅を示すために側溝が設けられています。しかし、丘陵地形では、オープンカットまたは切り通し、軟弱地盤の沖積地では盛土によって路体が形成されています。なかには、敷粗朶・敷葉、版築によって土橋状になっていることもあります。直線的な道路を維持するために、その土木工法は地形によって選択的に用いられていることが分かります。

なお、古代官道の側溝内の堆積土には、水が流れた痕跡は認められず、区画のための溝としての機能が強かったものと考えられます。

次に、古代官道を考古学的に認定するための定義について、条件を述べます。

① まずは、「大規模」であることが前提です。日本の場合は、幅員6m以上の道が多く、自然発生的な道を基にしたものではありません。地方の古代官道では、幅9～12mのものが一般的です。これは、古代の長さの単位「丈」が、約3mであることに起因していると考えられています。

- ② また、「計画的・規格的」であることも重要です。道路空間の「連続性」と外部空間からの「遮蔽性」も考慮すべきであり、そのための区画施設が「側溝」ということとなります。
- ③ さらに、「直進的」であることは古代官道の意味にも直結する特徴です。この場合、必ずしも「直線」ではなく、あくまで「最短距離を指向している」ことが重要です。
- ④ 最後に、特定の官衙などを結ぶ広域交通路と考えられることは、その道の性格を考慮する上でも重要です。

一方で、近年では、平野だけではなく、山岳地形を通過する古代官道も発見されるようになってきました。山の道は、地形変化が著しいことから、調査でも認識することが難しいため、今日まではあまり理解されていませんでした。

しかし、日本の約 60%以上は山岳地形であることから、官衙などを結ぶために最短距離を指向して走っている古代官道がどのようにして山を通過しているのか、ということを追及する視点は極めて重要です。

近年では、島根県出雲市の杉沢遺跡（国指定史跡）では、『出雲国風土記』という史料にある山陰道・正西道と考えられる山越えの古代官道が発見されています。山の尾根の頂部を少しずつつらして互い違いに蛇行させた道となっていました。このため、道の断面形は、谷側に開けたオープンカットとなるのが典型です。

この点は、秦の始皇帝が咸陽~九原郡（内蒙古自治区）まで築いた「直道」について、「塹山堙谷」（山を掘り、谷を埋め）と記録していることにも通ずるものがあり（『史記』秦始皇本紀・蒙恬列伝）、中央集権国家による作道の思想には、時空を超えた共通性があったことを考えさせてくれます。

古代の日本に、このような交通思想がどのような経緯で受け入れられていたのかについては、明らかにはし難いですが、古代の交通路が山越えにおいても最短距離を指向している点には、注意を払っておく必要があるものと考えます。

3. 宮都（奈良盆地）と大宰府における交通

続いて、都と大宰府における交通網について論じます。

古代日本の宮都は、遷都を繰り返していることが特徴です。

大和・河内の古道については、『日本書紀』推古 21（613）年に「難波からのびる大道を造る（横大路か。）」、白雉 4（653）年に百済・新羅使節の来朝に際して「各地の大道を修理」したことが記されており、7世紀初め頃には宮都と一体となった広域交通路としての直線道が整備されていたと考えられます。

発掘された道路遺構も、下ツ道 23m、中ツ道 15m（後に 25m）、横大路 35m、難波大道 18m などと大規模なもので、都と一体となって整備されていました。

また、その変遷としては、放射状にのびる「斜方位道路」から、宮都の中軸線とも重なる「正方位道路」への推移が指摘されています。

奈良盆地の古代官道については、「斜方位道路」が7世紀初頭の飛鳥地域に集まるように走っていました。これが、7世紀中頃になると「正方位道路」が認められるようになり、特に唐

の長安城をモデルとした平城京（北闕型都城）では、南北中心を抜ける幅員約70mの朱雀大路を中心に、羅城門から南へのびる下ツ道と一直線となり、方格地割に基づく都城制・条里制の基準線として設定されていきました。

単に通行帯としての道だけではなく、測量計画線、または都城を中心とした儀礼空間としての道の機能が考えられます。

『続日本紀』に、靈龜元（715）年には、朱雀門前に騎兵が整列した記事がみられ、国家行事の舞台装置としての広場としての「道」としての機能も備えたものでした。

こういった道のあり方は、大宰府周辺でも共通する現象となっています。

大宰府は、天智天皇2（663）年の白村江の敗戦を経緯として、百済の最後の王都であった泗泚都城をモデルとして構築されたとされています。その最初の都市形態は、水城・小水城、大野城・基肄城などに囲まれた城塞都市でした。その閉ざされた空間に、宮都（平城京）に準ずるような大宰府政庁を北端に据えた、条坊都市が後に形成されていきました。

持統天皇3（689）年に「新しい城を監督する」とあるのは、中央南北に幅約35m・平城京の1/2サイズの朱雀大路が整備された大宰府の姿であったと推定することができます。

また、大宰府では、その軍事的な経緯とも相まって、2本の道が平行する「複線制交通網」を採用しており、この点も宮都と共通しています。大宰府からは、各地に6本の古代官道が派生していました。

さらに近年では、『万葉集』など文学研究の側面からのアプローチによって、大宰府の古代都市デザインと交通を読み解く総合研究も行われています。

古代の空間意識には、都市の中心領域が「里」、その外に「野」、さらにその外に「山」が周囲的に広がっているものと考えられます。「野」は「郊外」に存在し、「原」と「丘」は、里・野・山の地形とは無関係に存在しています。「原」は里に近い野の一部分で、「丘」は野にあって山と野をつなぐ地形表現と考えられます。

大宰府の景観については、条坊という中心領域を「都市（的なもの）」とし、外域を取り巻くように配置されている古代山城は「外郭」であり、その中間にある空間を「郊外」と考えています。

4. おわりに

最後に、古代官道の意義について述べたいと思います。

宮都と地方をつなぐ「直線的」で、「最短距離を指向」する「大規模な道」が作道された背景としては、628年に「唐」が誕生したことと無関係ではないと考えています。日本のみならず、統一新羅や渤海の建国など東アジア世界に、大いなる変化をもたらしました。

古代官道の成立は、①軍隊の移動、②高官の公務、③物資運搬、④情報伝達、⑤地方の支配拠点、⑥空間区分などの機能が考えられ、国土管理と広域交通網の整備がセットとなっている点が重要です。

古代国家における版図掌握の必要性が、山岳や河川などの地形を超越した「直線道路」を創り出しました。前代の道には全く見られなかった強烈な直進指向性は、このことを象徴しているものと考えています。

また、全国的な広域交通網として整備された古代官道は、公的な権力を明示するための儀礼空間であると同時に、条坊都市や条里（農地）などの測量基準軸にもなっていました。

いわば、通行帯としての「道路」の本質的な機能を超越した点に、その歴史的な意義があると考えられるのです。

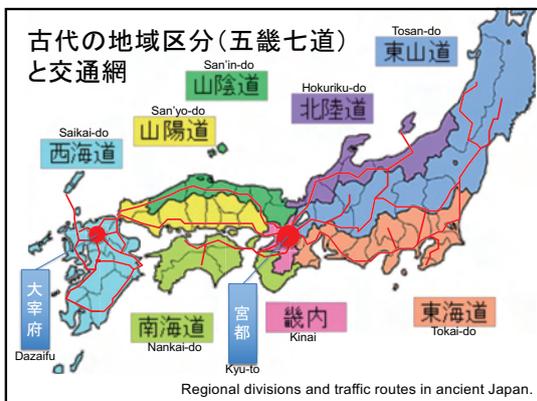
ご静聴、ありがとうございました。



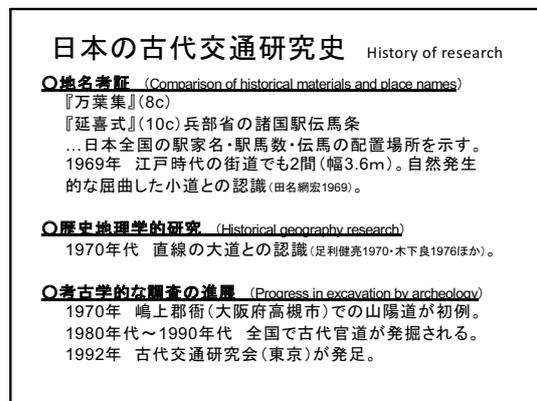
1



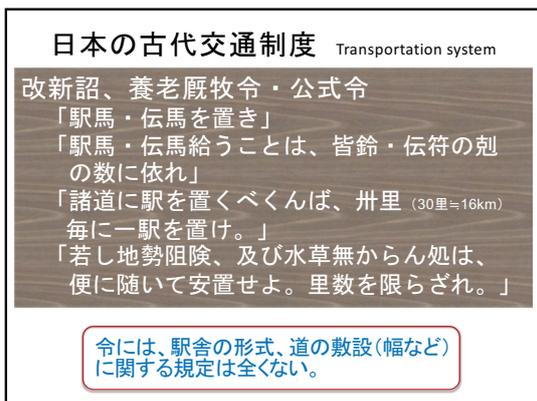
2



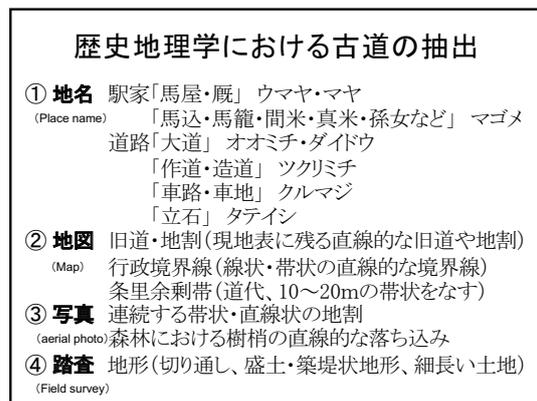
3



4



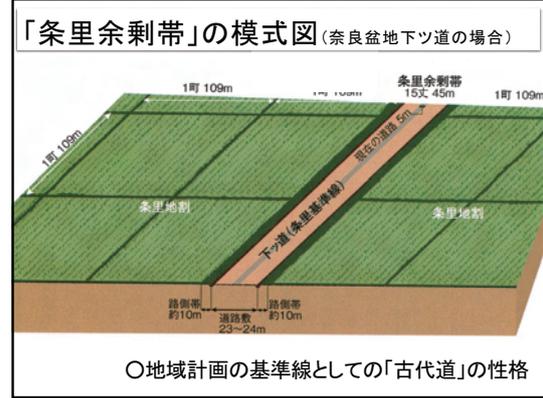
5



6



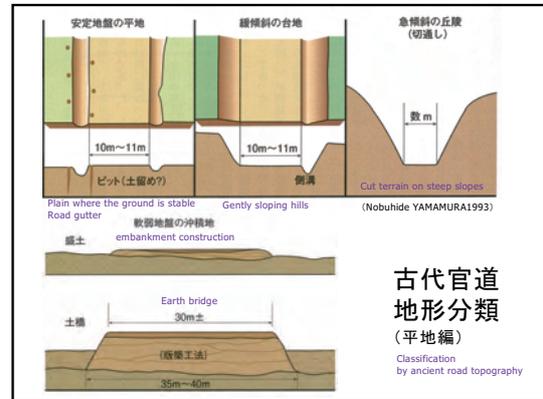
7



8

考古学的な古代官道の認定
 Reconnaissance archéologique des anciennes routes impériales

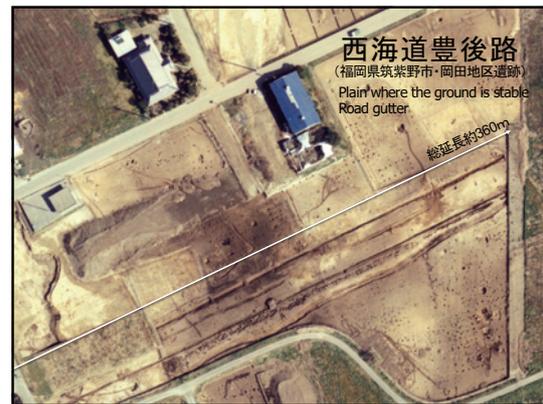
9



10



11



12



13



14



15

考古学的な「古代官道」の定義

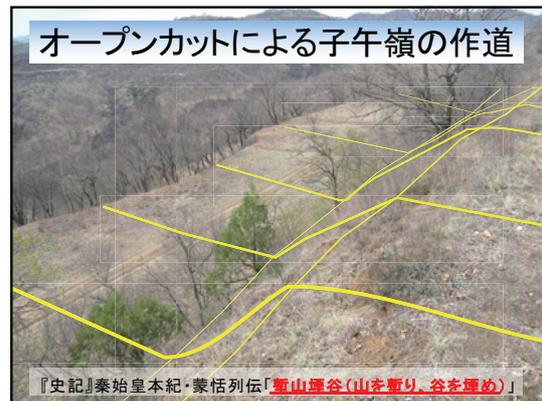
Archaeological definition of ancient government road "KODAI-KANDO"

- ① **大規模**であること。
幅6m以上。古墳時代以前の自然発生的な道を基にしたものではない。
Large in width. It has a width of 6m or more. It is not based on a naturally occurring road, but is carrying out large-scale civil engineering work.
- ② **規格的**であること。
道路空間の「連続性」および外部空間からの「遮蔽性」。
It is a high standard.
The road surface space is continuous and shielded from the external space.
- ③ **直進的**であること。
地形を考慮して「最短距離」を指向していること。必ずしも直線ではない。
The road is oriented to the shortest distance. It extends straight.
- ④ **特定官衙を結ぶ広域交通路**と想定できる。
A road that may have been connected to an ancient government office.
Not local, wide area road systems.
- ⑤ **帰属年代**
後世の継続利用があることから、12世紀前半頃までを含めて取り扱う。
Basically, it is an ancient road mainly used in the 7th - 10th centuries, but relics until the middle of the 12th century may be excavated.

16



17



18

宮都と大宰府における交通

Circulation routière dans la capitale (bassin de Nara) et la ville de *Dazaifu*

19

大和・河内・和泉の宮都と古代道の配置

『日本書紀』
推古21(613)年「難波より至る大道を置く(横大路か?)」
白雉4(653)年 百濟・新羅使節の來朝に「処々の大道を修治」

和泉国
河内国

20

斜行道路から正方位道路への推移

中村太一(1996), 大和国における計画道路体系の形成過程. 国史学155
中村太一(2000), 日本の古代道路を探る, 平凡社

6世紀末頃 7世紀初頭

21

斜行道路から正方位道路への推移

中村太一(1996), 大和国における計画道路体系の形成過程. 国史学155
中村太一(2000), 日本の古代道路を探る, 平凡社

奈良盆地の計画道路

- 斜方位が正方位に先行する。
- 斜方位道路は、飛鳥地域に収斂される(7世紀初頭)。目的地に最短距離で到達できる。
- 正方位道路は、方格地割に基づく都城制・条里制の基準線となる(7世紀中頃)。
...都城を中心とした儀礼の道。

7世紀中頃

22

藤原京・平城京と下ツ道の関係

(都城の中軸と道路の配置)

23

大宰府の南

—朱雀大路の求心性—

火ノ尾(燧) 城山道 基肄城

24

Une étude des vestiges des voies de circulation dans le Japon du 7ème au 9ème siècles

Akira OGANO (directeur du Musée d'histoire de la ville de Chikushino)

Traduit par Emiko HIROOKA (l'Université de Beppu)

et Risako SAKAI (l'Université de Beppu)

1. L'histoire des routes dans le Japon ancien

Tout d'abord, je voudrais parler de l'étude de l'histoire des routes dans le Japon ancien.

Les anciennes voies de circulation du Japon étaient constituées de sept "routes"⁽¹⁾ centrées sur Kinai⁽²⁾ où se trouvait la capitale. Elles se nommaient ainsi : San'yô-dô, Saikai-dô, Tôkai-dô, Tôsan-dô, Hokuiku-dô, Nankai-dô et San'in-dô. Les noms de ces routes servaient également pour "la division administrative" des provinces.

Outre la capitale, il y avait comme un autre centre diplomatique où se trouvait le *Dazaifu*⁽³⁾, d'où partaient d'anciennes routes impériales. On estime que la longueur totale de ces routes était de 6 300 km.

L'étude de l'histoire des routes dans le Japon ancien repose principalement sur une méthode consistant à estimer l'emplacement des *umaya*⁽⁴⁾ et à reconstituer les voies de transport en comparant les noms des *umaya* et le nombre estimé de chevaux stationnés dans ces *umaya* avec les noms des lieux qui subsistent aujourd'hui, tels qu'ils sont consignés dans *Engishiki*⁽⁵⁾ du 10ème siècle.

Cependant, les recherches menées avant 1970 étaient fondées sur l'idée que les routes devaient se développer par étapes conformément à une norme stricte. Ce qui se traduisait par l'idée dominante que lorsque les routes modernes ne faisaient qu'environ 2 *ken* (environ 3,6 m

* Les notes de bas de page ont été ajoutées par les traductrices à titre d'information uniquement.

⁽¹⁾ Le Gokishichidô consistait en une division en cinq provinces appelée Kinai (畿内) ayant une capitale et en la création de sept axes de communications (道, dô), (circuit ou voie). (Wikipédia [<https://fr.wikipedia.org/wiki/Gokishichidô>])

⁽²⁾ Kinai (畿内, région de la capitale) est un terme japonais désignant une ancienne division du pays. ([<https://fr.abcdef.wiki/wiki/Kinai>])

⁽³⁾ Gouvernement général de Kyûshû. Organe administratif établi à l'époque ancienne dans la région de Tsukushi pour gouverner l'île de Kyûshû, contrôler les relations avec les étrangers et organiser la défense. Le lieu où résidait cette administration correspond à la ville actuelle de Dazaifu dans le département de Fukuoka. (Dictionnaire historique du Japon [<https://www.persee.fr>])

⁽⁴⁾ Un *umaya* était un relais de poste disposé le long des sept axes de communications de l'ancien réseau routier au Japon.

⁽⁵⁾ L'*Engishiki* (延喜式) est un recueil japonais de lois et de règlements datant de 927. (Wikipédia [<https://fr.wikipedia.org/wiki/Engishiki>])

de large) alors, dans le temps ancien, il ne s'agissait probablement que de sentiers sinueux.

Dans les anciens règlements juridiques *Yôr-kumoku-ryô* et *Kushiki-ryô*, on trouve les mentions concernant le *umaya* comme suit :

- Des chevaux (appelés *ekiba* ou *denba*) doivent être stationnés aux *umaya*.
- Le nombre de chevaux à utiliser pour les affaires officielles doit être fonction du nombre de coches figurant sur la cloche ou le permis.
- Le *umaya* le long de la route doit être placé tous les 30 *ri* (environ 16 km).
- Toutefois, en fonction des caractéristiques géographiques de la région, le *umaya* ne doit pas être nécessairement placé tous les 30 *ri* (16 km).

Cela indique que le système avec les *umaya* sur *ekiro*, la route reliant la capitale et le gouvernement provincial, formait un réseau de circulation routière complémentaire avec *denro*, la route reliant le gouvernement provincial et le bureau du gouverneur du comté, mais comme il n'y a pas de réglementation sur la forme des bâtiments des stations ou la largeur et la structure des routes, les détails en restent inconnus.

À partir des années 1970, les recherches utilisant les méthodes de la géographie historique sont devenues populaires, et les anciennes routes impériales (utilisées ici comme terme général pour les routes construites par la Cour du Yamato) ont été reconnues comme des "routes droites et larges".

Les noms des lieux considérés comme liés au trafic ancien, sont extraits géographiquement grâce à la toponymie. Par exemple, comme *umaya*, on a constaté "Umaya", "Maya" ou "Magome" et comme route impériale, il y a "Ohmichi", "Daidô", "Sakudô", "Tsukurimichi", "Kurumaji" ou "Tatéishi".

Les routes appelées "Kurumaji" qui signifie "route de voiture" sont particulièrement courantes dans le nord de Kyûshû, elles passent souvent près de châteaux de montagne construits à l'époque Tenji, deuxième moitié du 7ème siècle. On les trouve également le long de la route San'yô-dô et dans la région de Kinai, et on suggère qu'elles étaient à l'origine prévues comme les routes militaires reliant les châteaux de montagne, et qu'elles sont ensuite devenues *ekiro*.

Des anciennes routes linéaires et le quadrillage du terrain, soit la topographie, sont déduits de l'utilisation d'anciennes cartes ou de photographies aériennes.

Les limites linéaires et zonales peuvent être cherchées dans les districts administratifs d'aujourd'hui.

Il s'agit du dessin d'une ancienne route impériale estimée par extraction d'une parcelle de terrain à partir d'une photographie aérienne prise en 1948. Il existe également un cas intéressant dans lequel la frontière entre les villes s'étend sur une ligne longue et étroite. Nous pensons qu'il s'agit de l'emplacement d'une ancienne route impériale.

Dans certains cas, la largeur d'une ancienne route impériale a été préservée sous la forme d'une bande de terrain de 10 à 20 mètres. Ce sont les traces de déblais, de remblais et de

terrains longs et étroits.

Les anciennes routes impériales peuvent également être identifiées par des indices pédographiques, *Soil Mark*, ou phytologiques, *Crop Mark*.

D'autre part, en archéologie, la reconnaissance des anciennes routes impériales s'est généralisée un peu plus tard. Dans les années 1980 et 1990, de nombreuses routes anciennes ont été fouillées à travers le pays, elles coupent directement à travers les plaines. Ainsi l'image d'un ancien réseau des voies de circulation reliant l'ensemble du pays s'est formée petit à petit.

En 1992, la *Société pour l'étude des voies de circulation anciennes* a été fondée à Tokyo, et des recherches conjointes dans divers domaines tels que l'histoire, l'archéologie, le folklore, la géographie, la littérature japonaise et l'histoire du génie civil ont commencé dans ce cadre.

2. Reconnaissance archéologique des anciennes routes impériales

Ensuite, je vais parler des résultats des recherches archéologiques sur le trafic antique au Japon.

Les anciennes routes impériales se repèrent essentiellement grâce aux fossés qui les bordent. La reconnaissance des vestiges routiers comme vestiges archéologiques n'a été possible que parce que la continuité du "fossé" a été prouvée à plusieurs endroits et qu'il a été reconnu comme un fossé routier.

Certaines routes ont des fossés et d'autres non.

En principe, sur un terrain plat et stable, des fossés sont prévus pour indiquer la largeur de la route. Cependant, dans les terrains vallonnés, la plate-forme de la route est formée par des coupes à ciel ouvert ou des déblais, et dans les zones alluviales au sol mou, par des remblais. Dans certains cas, la route est formée comme un pont en terre⁽⁶⁾ au moyen de "Shikisota"⁽⁷⁾, "Shikiha"⁽⁸⁾ et "Hanchiku"⁽⁹⁾. On constate que les méthodes de génie civil utilisées pour entretenir les routes droites sont sélectives, en fonction du terrain.

Il n'y a pas de traces d'écoulement d'eau dans le sol au fond des fossés de l'ancienne route impériale, ce qui suggère qu'ils fonctionnaient plutôt comme des fossés de compartimentation.

Ensuite, je décris les conditions de la définition de la reconnaissance archéologique des anciennes routes impériales.

⁽⁶⁾ Un pont en terre est une digue construite comme un passage à travers un fossé.

⁽⁷⁾ Il s'agit d'une méthode consistant à recouvrir le sol mou sous le monticule des feuilles et des branches d'arbres pour améliorer la perméabilité à l'eau et empêcher les fondations de glisser. (Traduction française du site web suivant, 九州国立博物館 [https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/d-map/kaisetu07.html])

⁽⁸⁾ La méthode du pavage de feuilles est une technique qui consiste à placer des feuilles et des branches d'arbres sous le tas de terre afin de rendre le sol moins glissant et de libérer l'eau du sol. (Traduction française du site web suivant, 奈良文化財研究所 [https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2016/06/tanken139.html])

⁽⁹⁾ L'argile et le sable sont déposés progressivement, en alternance, et poussés vers le bas à l'aide d'un outil de battage en forme de bâton pour créer un talus solide capable de résister à des pentes raides. (Traduction française du site web suivant, 九州国立博物館 [https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/d-map/kaisetu07.html])

(1) Tout d'abord, il faut qu'elle soit "à grande échelle". Dans le cas du Japon, la plupart des routes font plus de 6 mètres de large et ne sont pas basées sur des sentiers. Les anciennes routes impériales dans les zones rurales ont généralement une largeur de 9 à 12 mètres. Nous pensons que cela est dû au fait que l'ancienne unité de longueur, *jō*, était d'environ 3 mètres.

(2) Il est également important qu'elles soient "planifiées et standardisées". La "continuité" de l'espace routier et son "blindage" par rapport à l'espace extérieur doivent également être pris en compte, et le "fossé" est un moyen de démarcation à cet effet.

(3) En outre, la rectitude de l'itinéraire est une caractéristique qui permet d'identifier les anciennes routes impériales. Dans ce cas, le parcours n'est pas nécessairement "rectiligne", mais ce qui est important, c'est qu'il soit "le plus court possible".

(4) Enfin, il est important de tenir compte de la fonctionnalité de la route, car elle est considérée comme une voie de circulation à grande échelle reliant certains bureaux gouvernementaux et d'autres.

D'autre part, ces dernières années, on a découvert d'anciennes routes impériales qui traversaient non seulement des plaines mais aussi des terrains montagneux. Les routes de montagne n'ont pas été bien comprises jusqu'à aujourd'hui, car elles sont difficiles à reconnaître dans les recherches en raison des changements topographiques remarquables.

Cependant, comme environ 60% du territoire du Japon est montagneux, il est extrêmement important d'examiner comment les anciennes routes impériales, reliant les bureaux gouvernementaux et d'autres, traversaient les montagnes sur la distance la plus courte possible.

Ces dernières années, une ancienne route impériale traversant les montagnes a été découverte sur le site de Sugisawa (site historique national) qui se trouve à Izumo, une ville de la préfecture de Shimane. Nous pensons qu'il s'agissait de la route San'in-dō ou Manishi-nomichi mentionnée dans le document historique *Izumo no kuni Fudoki*⁽¹⁰⁾. La route serpentait en passant par des crêtes montagne. Dans cet environnement, la route est construite sur le côté de la vallée en coupant la terre en talus.

Cela correspond à la description dans *Shiji*⁽¹¹⁾ sur la "route droite" construite par le premier empereur de la dynastie Qin de Xianyang au comté de Jiuyuan, région autonome de Mongolie intérieure, où il a fait creuser les montagnes et combler les vallées. Nous remarquons par cette description qu'à travers le temps et l'espace, il y a des points communs entre les conceptions des États centralisés sur la construction de routes.

Il est difficile de dire comment cette conception des voies de circulation était acceptée dans le Japon ancien, mais il est important de noter qu'à l'époque, on a essayé de faire des routes

⁽¹⁰⁾ Les *fudoki* (風土記) sont des rapports commandés par l'impératrice Gemmei en 713 qui rapportent les coutumes, l'histoire, les traditions orales et les notes géographiques de chacune des provinces du Japon. (Wikipédia [<https://fr.wikipedia.org/wiki/Fudoki>])

⁽¹¹⁾ Le *Shiji* (史記), parfois mémoires du Grand Historien ou Mémoires historiques ont été écrits de -109 à -91 par l'historien chinois Sima Qian. (Wikipédia [<https://fr.wikipedia.org/wiki/Shiji>])

les plus courtes, même à travers les montagnes.

3. Circulation routière dans la capitale (bassin de Nara) et la ville de *Dazaifu*

Ensuite, je voudrais aborder le réseau routier dans la capitale et la ville de *Dazaifu*.

La capitale du Japon ancien change souvent de lieu suivant les déménagements de la famille impériale.

Les anciennes routes de Yamato et de Kawachi sont mentionnées dans *Nihon-shoki*, Chroniques du Japon, comme ceci : « à partir de Naniwa, une route large, *daidô* (Yoko-ôji) fut construite en 613 (21ème année de l'ère de Suiko) » et « les *daidô* des autres endroits furent réparées à l'occasion de l'arrivée des envoyés de Baekje et Silla en 653 (4ème année de l'ère de Hakuchi) ». Nous pensons qu'au début du 7ème siècle des routes droites étaient déjà construites sur une vaste zone reliée à la capitale.

Les vestiges des routes mises au jour, comme Shimotsu-dô de 23m de large, Nakatsu-dô de 15m de même (plus tard 25m), Yoko-ôji de 35m de même et Naniwa-daidô de 18m de même montrent qu'elles sont à grande échelle construites en liaison la capitale.

On souligne qu'il y a eu une transition d'une "route azimutale oblique" radiale à une "voie de l'axe", qui coïncide également avec l'axe central de la capitale.

Partant du bassin de Nara, les "routes azimutales obliques" s'étendaient de telle sorte qu'elles se rassemblent dans la région d'Asuka au début du 7ème siècle. Les "voies de l'axe" apparurent au milieu du 7ème siècle. En particulier, dans la capitale Heijô-kyô⁽¹²⁾, conçue sur le modèle du château de Chang'an de la dynastie Tang, Suzaku-ôji⁽¹³⁾, une grande route de 70 mètres de large, qui traversait le centre de la ville du nord au sud, était aligné sur la route Shimotsu-dô partant de Rajô-mon⁽¹⁴⁾ vers le sud. Cette route a été établie comme ligne de

⁽¹²⁾ Heijô-kyô (平城京), fut la capitale impériale du Japon entre 710 et 740, puis entre 745 et 784 ; c'est-à-dire durant la plus grande partie de la période Nara. La cité fut planifiée d'après la ville de Chang'an, capitale de la dynastie Tang en Chine, bien qu'elle manquât des murailles qui protégeaient la ville chinoise et qu'elle fût de moindres dimensions. De la porte Rajômon (羅城門), au sud, part la rue principale, vers le nord. Cette rue principale, l'avenue Suzaku, est large de 70 m et bordée de saules. Elle divise la ville en deux secteurs, le secteur oriental et le secteur occidental. À l'intérieur de ces secteurs, des quartiers vont être dessinés par les rues, qui se coupent à angles droits. (Wikipédia [<https://fr.wikipedia.org/wiki/Heijô-kyô>])

⁽¹³⁾ Avenue Suzaku ou boulevard Suzaku (朱雀大路, Suzaku ôji) est le nom donné à l'avenue centrale qui, en provenance du sud, mène au palais impérial dans les capitales japonaises. Traditionnellement, le complexe du palais impérial fait face au sud, tandis que l'avenue Suzaku mène directement à l'opposé de l'entrée principale. Les villes étaient souvent basées sur un modèle de grille traditionnelle chinoise. L'avenue Suzaku était généralement la route centrale dans la grille de la ville, et, par conséquent, la plus large. Fujiwara-kyô, Heijô-kyô et Heian-kyô possédaient leur propre avenue Suzaku. Le mot « *suzaku* » fait référence au dieu gardien du Sud qui passe pour apparaître sous la forme d'un oiseau. (Wikipédia [https://fr.wikipedia.org/wiki/Avenue_Suzaku])

⁽¹⁴⁾ Le Rajômon (羅城門), ou Rashômon (羅生門), est la porte construite à l'extrémité sud de la monumentale avenue Suzaku dans les anciennes villes japonaises d'Heijô-kyô (Nara) et Heian-kyô (Kyoto), conformément à la disposition des villes selon le motif en grille chinois. À l'autre extrémité nord de l'avenue Suzaku se trouve la porte Suzakumon, entrée principale de la zone du palais. (Wikipédia [[https://fr.wikipedia.org/wiki/Rajômon_\(porte\)](https://fr.wikipedia.org/wiki/Rajômon_(porte))])

référence pour le système *tojô*⁽¹⁵⁾ et le système *jôri* basé sur le cadastre en quadrillage (*hōkaku chiwari*).

La fonction de la route n'était pas seulement celle de circulation, mais aussi celle d'une ligne de planification topographique, ou d'un espace rituel autour de la ville construite sous le système de *tojô*.

Dans le chronique du Japon ancien *Shoku Nihongi*⁽¹⁶⁾, un article parle d'une cavalcade alignée devant la porte Suzaku lors d'un événement de 715 (la première année de l'ère Reiki), ce qui indique que la route officielle servait également de scène pour les événements d'État.

On retrouve une telle exploitation de la route aux alentours de la ville de *Dazaifu*.

On dit que la ville de *Dazaifu* avait été construite sur le modèle de Sabi, la dernière capitale royale de Baekje, après la défaite de la bataille de Hakusukinoe en 663 (2ème année du règne de l'empereur Tenji). Elle avait d'abord une forme de ville fortifiée, entourée des châteaux forts comme Mizuki et Shō-mizuki, Ohno-jō et Kii-jō. Et plus tard dans cet espace clos, il s'est formé une ville sous le système *jōbō*⁽¹⁷⁾, avec l'installation du bureau du gouvernement de *Dazaifu* à l'extrémité nord, semblable à la capitale Heijō-kyō.

On trouve dans les chroniques la mention « la supervision de la construction d'un nouveau château en 689 (3ème année du règne de l'impératrice Jitō) », et par cela on peut supposer que ce nouveau château représente la ville de *Dazaifu*, munie d'une route centrale nord-sud d'environ 35 m de large, soit la moitié en largeur de Suzaku-ōji de Heijō-kyō.

En raison de son passé militaire, le gouvernement de *Dazaifu* a adopté un "réseau de circulation à double voie" avec deux routes parallèles, qui est également similaire à celui de la capitale. Depuis la ville de *Dazaifu*, six routes impériales menaient à divers endroits.

Ces dernières années, une recherche synthétique a été entreprise pour décrypter la conception urbaine et les circulations routières de la ville de *Dazaifu* de l'époque ancienne par une approche littéraire en tenant compte de certains ouvrages comme *Man'yōshū*⁽¹⁸⁾.

A l'époque, on percevait dans l'espace de la ville, la zone centrale comme "village" (*sato*) avec le "champ" (*no*) à son extérieur, et la "montagne" (*yama*) la plus extérieure. Les

⁽¹⁵⁾ Le terme "*tojōsei*" fait référence au design urbain des cultures d'Asie de l'Est, qui a été influencé par le système de la capitale chinoise. (Traduction française du site web suivant, Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/都城制])

⁽¹⁶⁾ Le *Shoku Nihongi* (続日本紀, Suite des chroniques du Japon) est un texte d'histoire du Japon commandé officiellement. Achevé en 797, c'est le deuxième de la série des Six histoires nationales, directement précédé du *Nihon Shoki* et suivi des *Nihon Kōki*. Fujiwara no Tsuginawa et Sugano no Mamichi en sont les principaux auteurs. C'est une des plus importantes sources d'information première sur l'époque de Nara du Japon. L'ouvrage couvre la période de soixante-quinze ans s'étendant du début du règne de l'empereur Mommu en 697 jusqu'à la dixième année du règne de l'empereur Kōnin en 771, couvrant neuf règnes impériaux. (Wikipédia [https://fr.wikipedia.org/wiki/Shoku_Nihongi])

⁽¹⁷⁾ Le système *Jōbō* est un système de planification urbaine influencé par la Chine. Le plan de la ville est symétrique et carré, avec Suzaku-ōji au centre et une grille de rues nord-sud "*bō*" et est-ouest "*jō*". (Traduction française du site web suivant, Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/条坊制])

⁽¹⁸⁾ Le *Man'yōshū* est la première anthologie de waka, poésie japonaise, et date des environs de 760. (Wikipédia [https://fr.wikipedia.org/wiki/Man%27yōshū])

“champs” existent dans les “banlieues”, les “plaines” (*hara*) et les “collines” (*oka*) existent indépendamment de la topographie que font des villages, des champs et des montagnes. La plaine (*hara*) est une partie du champ (*no*) proche du village (*sato*), et la colline (*oka*) est une expression topographique pour la zone reliant le champ (*no*) à la montagne (*yama*).

En ce qui concerne le paysage de la ville de *Dazaifu*, la zone centrale appelée *jôbô* est considérée comme “ville”, et les châteaux forts de montagne, construits sur le pourtour de la ville comme “mur extérieur”, et l’espace entre les deux comme “banlieue”.

Si le bureau du gouvernement de *Dazaifu*, Suzaku-ôji et *jôbô* forment dans l’ensemble un centre dans l’espace urbain, les banlieues environnantes sont constituées des terres agricoles *jôri* de la plaine et des champs. Si la périphérie est définie comme la limite, une structure spatiale quadruple est possible : un espace parsemé d’un réseau de routes impériales et de nœuds routiers tels que *chimata*, *umaya* et *kan-sen*, et au delà de la limite, une “zone extérieure” entourée de châteaux de montagne tels que Ohno-jô, Kii-jô ou Ashikisan-jô.

4. Conclusion

Pour finir, je voudrais parler de la signification des anciennes routes impériales.

Je pense que la création de la “grande route”, une route “droite” et “à plus courte distance” reliant la capitale impériale aux provinces, n’est pas sans rapport avec la naissance de la dynastie Tang en 628. Cette naissance a apporté de grands changements non seulement au Japon, mais aussi au monde de l’Asie de l’Est comme par exemple la fondation du Silla unifié et du Balhae.

On estime que les anciennes routes impériales ont été construites pour assurer les fonctions suivantes : 1) déplacement des troupes, 2) fonctions officielles des hauts fonctionnaires, 3) transport des marchandises, 4) communication des informations, 5) bases du contrôle local, 6) division de l’espace, etc. Il est important de noter que la gestion des terres est combinée avec le développement d’un réseau des voies de circulation à grande échelle.

Dans l’époque ancienne, la nécessité de contrôler son territoire a conduit l’État à créer la “route droite”, malgré la difficulté topographique avec des montagnes et des rivières. La rectitude de la route, jamais vue à l’époque antécédente, est assez impressionnante. Elle montre combien l’État s’attachait au contrôle territorial.

En plus, les anciennes routes impériales, arrangées comme un grand réseau de circulation routière dans le pays, servaient d’espace rituel pour la manifestation du pouvoir officiel, et aussi d’axe de repère pour l’arpentage des villes arrangées par le système *jôbô* et des terres agricoles *jôri*.

L’importance historique de ces routes impériales réside dans le fait qu’elles servaient au-delà de leur fonction essentielle de voies de circulation.

Merci pour votre attention.

豊後国田染荘資料のデータ化による研究基盤の整備と

新たな研究に向けた試み

赤松 秀亮（別府大学）、齋藤 圭（京都大学）

はじめに

日本における荘園は、古代から中世（奈良～戦国期）にかけて存在した大土地所有の形態で、貴族や寺院、神社といった権門（荘園領主）の財源として各地に成立した⁽¹⁾。ひと口に荘園と言っても、その規模やあり方は時代や地域などによって様々だが、多くの中世荘園に共通する一つの特徴として、人々が暮らしを営む集落や周辺に広がる耕地、山野河海といった一定の領域を擁する点があげられる（領域型荘園）⁽²⁾。この領域性により、荘園は単なる権門の財源としてだけでなく、行政単位としても中世社会に位置づけられていた⁽³⁾。荘園領主は、複数の荘園を所有するのが一般的であり、荘園領主に代わり、地頭や下司として現地で徴税や治安維持を主に担ったのが、この時期新たに台頭してくる武士（在地領主）たちであった。以上をふまえ、ごく大まかに中世の社会関係を述べるならば、貴族や寺社はオーナーとして、武士は現地の管理人として、一般民衆は住人として、荘園との関係を有していた。すなわち、日本中世の社会関係は、荘園を媒介に構築されていたと捉えることが可能であり（荘園制）、荘園はこの時代を特徴づける重要なファクターの一つとして歴史的に位置づけられている⁽⁴⁾。

荘園の研究は、荘園領主による伝領過程や領有関係を解明する上位権力に注目したものから、全国に点在した荘園現地の実態を個別に追究するものまで、様々な視角から蓄積されてきた。とくに後者は、戦後、歴史学へのマルクス主義の影響が顕著となるなか、中世の生産関係が展開した場として荘園への注目が集まるなかで進められた。後年、その影響が衰退したのちも、研究視角や分析手法を多様化させながら現在に至っている。その際、かつて荘園だった土地での現地調査は、荘園現地の実態解明に多くの実りをもたらした⁽⁵⁾。

⁽¹⁾ 荘園についての概説は、永原慶二『荘園』（吉川弘文館、1998年）、荘園史研究会編『荘園史研究ハンドブック』（東京堂出版、2013年）、伊藤俊一『荘園』（中公新書、2021年）を参照。

⁽²⁾ 小山靖憲「古代荘園から中世荘園へ」（同『中世寺社と荘園制』塙書房、1998年、初出は1981年）。

⁽³⁾ 土地制度としての荘園制については、工藤敬一「荘園制の展開」（同『荘園制社会の基本構造』校倉書房、2002年、初出は1975年）、網野善彦『日本中世土地制度史の研究』（塙書房、1991年）を参照。

⁽⁴⁾ 黒田俊雄『荘園制社会』（日本評論社、1967年）、石井進「中世社会論」（『岩波講座日本歴史第8巻 中世4』岩波書店、1976年）、桜井英治「中世史への招待」（『岩波講座日本歴史第6巻 中世1』岩波書店、2013年）。

⁽⁵⁾ 荘園故地での現地調査の研究史は、渡辺澄夫「荘園史研究における田染荘の位置一文獻派の立場から見て一」（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』4、1987年）、海老澤衷『荘園公領制と中世村

日本中世史の研究者が、荘園の故地へと足を運び、現地に残された荘園の痕跡を探すいわゆる荘園調査が始まったのは、戦後まもなくのことであった。当初は、史料上に見られる地名や寺社の確認といった文献史料のより精緻な理解を目的として始められたが、次第に調査のレベルも高度化し、1980年代から90年代には地域の歴史を総合的に記録・保存する方向へと姿を転じ、調査の手法が確立されていく。その端緒となったのが、高度経済成長期（1950年代半ば～1970年代初頭）における都市化やモータリゼーション、そして農業の機械化を目指して全国的に進められた圃場整備事業による農村景観の改変であった。前近代から続く農村景観の改変は、地域に残された歴史情報の喪失という危機感を研究者に抱かせ、景観の記録・保存を目的とする荘園調査が全国的かつ緊急的に進められた。

その先駆けとなったのが本稿で取り扱う宇佐神宮領豊後国田染荘（現大分県豊後高田市田染地区）である。1970年代末、田染荘が位置する大分県では、折しも県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現在の県立歴史博物館）の開館を予定し、宇佐神宮とともに歩んだ国東半島の文化を知る素材として荘園遺跡の活用が模索されていた⁽⁶⁾。こうした構想と景観改変への危機感とが相まって、文献史学を中心に、地理学・考古学・民俗学・美術史学の研究者による学際的な共同調査・研究が1981年度から6年間にわたって進められた⁽⁷⁾。これにより、荘園故地にはどのような歴史情報が残されているかが浮き彫りにされると同時に、それらの情報をどのように記録・保存するかの特典が確立されたのである。このとき確立された調査方法は、荘園調査の理想的モデルとなり、また荘園調査自体も有効なアプローチとして研究史上に位置づけられることとなった⁽⁸⁾。その一方で、調査の開始から40年余りが経ち、新たな課題も浮上しつつあると考えられる。

一点目の課題は、調査数の減少である。繰り返しになるが、荘園調査は、圃場整備によって耕地景観が大幅に改変されるという状況のなか、緊急で実施された側面が強い。そのため、圃場整備がある程度実施され尽くした現在では、ピーク時に比べて調査数は減少しており、荘園調査を行う意義や切実さがかつてほど学界のなかで共有されていないように見受けられる。二点目は、調査成果の活用が必ずしも十分ではなく、ともすれば埋没した状況にある点である⁽⁹⁾。一般的に調査の成果は、報告書や論集として公開される。しかしながら、調査が行われたあと、当該荘園の研究が進むとは限らず、調査によって研究され尽くしてしまったと

落』（校倉書房、2000年）、高木徳郎『日本中世地域環境史の研究』（校倉書房、2008年）に詳しい。以下、現地調査の研究史については、上記の文献を参考にまとめた。

⁽⁶⁾ 詳しい経緯は、後藤宗俊「広域村落遺跡の調査—その意義と展望—」（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』5、1988年）を参照。

⁽⁷⁾ 調査の過程や内容は、『豊後国田染荘の調査Ⅰ』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1986年）を参照。

⁽⁸⁾ 荘園調査の有効性が様々なフィールドで横断的に実証された到達点として、石井進編『中世のムラ』（東京大学出版会、1995年）がある。

⁽⁹⁾ 拙稿「中世災害研究の現代的意義と活用の可能性—東大寺領播磨国大部荘の水害と旱魃—」（『歴史評論』831、2019年）。

いうイメージを持たれがちな傾向にある。一点目の課題とも関わるが、荘園調査を通じて記録・解明された事実を活かした分析・考察がなされてこそ、調査の意義が共有されることに繋がると考える。そして三点目は、社会構造の変化により、現地が持つ歴史情報が減少しつつある点である⁽¹⁰⁾。戦後、第一次産業への従事者が減少し続けてきた結果、各産業で代々受け継がれてきた地域での慣行や通称地名の継承が、十分にはなされていない現状がある。また、高齢化と出生減による地方での過疎化は深刻なものがあり、ともすれば集落自体が消滅している事態も散見される。これまでの荘園調査において、地名や習俗の聞き取りが大きな位置を占めていたことに鑑みれば、危機的な状況にあることは間違いない。

ここまで三点に渡って課題を並べ立ててきたが、今後どのような荘園調査を行うべきか、そもそも調査を継続していくことにどのような意義があるのか、客観的な説明が求められていよう。こうした点について、かつて荘園調査のモデルとなった田染荘に立ち戻って方向性を探ることは有益と考えられる。先述したように、田染荘では文献史学を中心とする学際的な調査・研究により、荘園調査の有効性を示す先駆けとして1980～90年代に一世を風靡した⁽¹¹⁾。田染荘の調査として一般に知られるのは、このとき作成された報告書『豊後国田染荘の調査』であるが⁽¹²⁾、その後も重要文化的景観の選定や名勝指定に向けて豊後高田市教育委員会の主導による文理の垣根を越えた多角的な調査・研究がなされている⁽¹³⁾。しかしながら、調査関係者を除いて、その後田染荘の研究に取り組んでいる研究者はほとんど居らず、近年の調査成果も中世史学界に共有されているとは言いがたい。また80年代当時と比べ、IT環境は各段の進歩を遂げ、荘園研究でもGIS（地理情報システム）の利用が徐々に浸透しつつある⁽¹⁴⁾。但し、現時点ではあくまで作図やデータの作成に留まる場合が多く、こうした道具を使って何を解明できるかが、次のステップとして求められていよう。地名や慣行、習俗といった人間ベースで集めることができる歴史情報の残存状況は、調査が行われた1980年代と比べるべくもないが、IT技術の活用や理系分野との協業など、人間が持つ歴史情報に必ずしも依存しない新たな分析技法の確立も選択肢の一つとして模索していく必要がある。

以下では、田染荘をめぐる諸資料について現在進めているデータ化作業の状況について報告したうえで、その成果を用いた一つの試みを紹介したい。これにより、今後の荘園調査が

⁽¹⁰⁾ この点については、井上聡「荘園絵図調査の実践から」（『民衆史研究』84、2013年）、土山祐之「2021年段階における現地調査の方法と実践」（『民衆史研究』101、2021年）でも課題として指摘されている。

⁽¹¹⁾ 「特集 荘園村落遺跡の調査と保存 1」（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』4、1987年）、前掲注8石井氏編著他。

⁽¹²⁾ 前掲注7『豊後国田染荘の調査I』。

⁽¹³⁾ 『田染荘小崎文化的景観保存計画』（豊後高田市教育委員会、2010年）、『田染荘小崎景観計画―「中世のムラ」の保存に向けて』（豊後高田市教育委員会、2010年）、『重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」保存計画』（豊後高田市教育委員会、2018年）、『国東半島「田染」名勝調査報告書』（豊後高田市教育委員会、2019年）など。

⁽¹⁴⁾ 海老澤衷『中世荘園村落の環境歴史学』（吉川弘文館、2018年）、高木徳郎編『伊賀国鞆田荘地域調査』（早稲田大学教育・総合科学学術院高木徳郎研究室、2020年）など。

向かう方向性を探る一つのよすがとなれば幸いである。

第1章 田染荘資料のデータ化による研究基盤整備の推進

本章では、誰もが田染荘の資料にアクセスし得る研究環境を整備すべく進めているデータ化作業の状況を報告する。現在、進めているのは文献史料の刊本および調査報告書に記載の地理情報のデータ化である。

1 渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』のデータ化

田染荘に関する文献史料は、永弘家をはじめとする宇佐神宮社家に伝来した史料が過半を占める。「永弘文書」の翻刻は、すでに『大分県史料』に収めるところであったが、複数の荘園に関する史料が混在し、一つの荘園に注目して研究をするうえで便宜があるとは言い難かった。そうした状況を打開したのが、渡辺澄夫編『豊後国荘園史料集成』（1巻～8巻下、全12巻、別府大学附属図書館、1984～1995年）である。

渡辺澄夫氏（1912～1997）は、昭和14年（1939）に広島文理大学を卒業、同18年から大分師範学校、のち大分大学に勤務し、同50年に定年で退官後、別府大学文学部史学科（当時）で教育・研究に当たった⁽¹⁵⁾。別府大への転任後まもなく『豊後国荘園公領史料集成』の編纂を開始し、昭和59年～平成7年（1995）にかけて全12巻を刊行した。

『豊後国荘園公領史料集成』の刊行により、大分県内の荘園・公領史料の多くが網羅され、研究環境は格段の改善をみた。しかしながら、第1巻の刊行から40年近くが、最後に刊行された8巻下からも四半世紀が経ち、そもそもの刊行部数が多くなかったこともあり、その重要性に比して必ずしも認知度が高いとは言えない憾みがあった。近年、自治体史や報告書の電子公開が全国的に進んでいる現状を踏まえ、全巻を電子化のうえ、図書館のリポジトリに登録、HPなどで積極的に発信していくことで、本史料集のさらなる活用、ひいては豊後の荘園・公領研究の更なる進展が期待できる。そこで、筆者（赤松）は別府大学より資金の交付を受け、先人の遺産をオープンリソースとして活用できる環境の整備を進めることとした（令和3年度学長裁量経費「別府大学オープンエデュケーションルームによる学知発信モデルの基盤構築—渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』のデジタル化を中心に—」）。その際、利用者の便宜を考え、簡単な語句の検索ができるよう、PCで自動認識したテキストをPDFデータに埋め込むこととした⁽¹⁶⁾。

加えて、本史料集刊行後に発見された未収文書の存在も見逃すことはできない。田染荘では、史料集には601点が収録されているものの、未収録文書の存在が明らかになっている⁽¹⁷⁾。現在、PDF化と並行して史料集所収文書の目録データ作りも進めており、将来的には未収

⁽¹⁵⁾ 「渡辺澄夫先生略歴」（『大分県地方史研究』166、1997年）

⁽¹⁶⁾ テキストの自動読み取り=OCRは一定の割合で誤認識が生じるため、全幅の信頼を置くことはできないことには注意を要する。

⁽¹⁷⁾ 海老澤衷「古代・中世の田染」（前掲注7『豊後国田染荘の調査I』）、前掲注5渡辺氏論文、村井章介「『永弘文書』の未紹介史料」（『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要』6、1989年）他。

分を増補した文書目録を公開、新出史料発見の都度アップデートしていく体制の構築を目指している。

以上のように、活字史料のオープンリソース化が現在進行形で進められている。インターネットに接続できれば、全国どこにいても田染荘をはじめとする豊後国内の荘園・公領の史料を閲覧できる日は間近である。

2 『豊後国田染荘の調査』所収地理情報のベクターデータ化

「はじめに」でも述べたように、1981年度から6年間に渡って行われた調査は、『豊後国田染荘の調査』I・IIとして結実し、現地調査を通じて集められた膨大な地理情報が記録されている。その象徴的存在と言えるのが計13枚に渡る附図であり、記録された地理情報が寺社や石造文化財の分布、小字界と通称地名、水利・灌漑状況といったテーマごとに視角化されている⁽¹⁸⁾。他方、A0サイズを超える大規模な紙の図面を見比べながら、各図に取められた情報を関連づけて考察するのは少なからず困難があり、そこには自ずと限界があったと言わねばならない。

こうした課題は、現在ではGIS (Geographic Information System) ソフトによって容易に解決できる。GISとは、コンピューターを用いて、地理空間情報(地図上に表現可能な人間および自然環境に関する情報)をデータとして表現、作成、編集、検索、分析といった様々な処理を行うソフトである⁽¹⁹⁾。このGISを用いて荘園調査で集められた地理情報をデータ化することで、紙地図の時代にはテーマごとで分けられていた地理情報の集約や取捨選択が容易になり、またオープンリソースとして提供されている地形データと組み合わせることで、多角的な分析が可能になる。現時点で田染荘の現地調査で集められた地理情報をデータ化・公開している試みはなく、将来的に公開していくことでGISを用いた地理的分析が一層容易になっていくことが見込まれる。

さて、別府大学文学部史学・文化財学科では、2021年度後期から「日本史実習」なる科目が新たに開講され、筆者(赤松)が担当している。同科目では、荘園故地でのフィールドワークを行い、調査の手法を学ぶと同時に、現在の景観から近代、近世と歴史を遡りつつ中世の痕跡を体感することを目標としている。その際、GISを使って調査報告書に記載の地理情報をデータ化し、Google MapやGoogle Earthを使って、スマートフォンやタブレットを手に現地を歩くことは、単にフィールドワークの質を高めるだけでなく、学生がGISに触れる機会としても有益と考えられた。そこで2021年度は、附図1「田染地域小字境界図」および附図2「田染地域の寺社・城館と中世石造文化財」のデータ化を課題として掲げた。

作業の方針として、まず報告書の附図をスキャンして画像データ化し、位置情報を与えることでGIS上に表示(ジオリファレンス)、記載情報をそのままGIS上でデータ化していくこととした。附図1には、旧田染荘域内の各小字の範囲と通称地名が記載されており、前

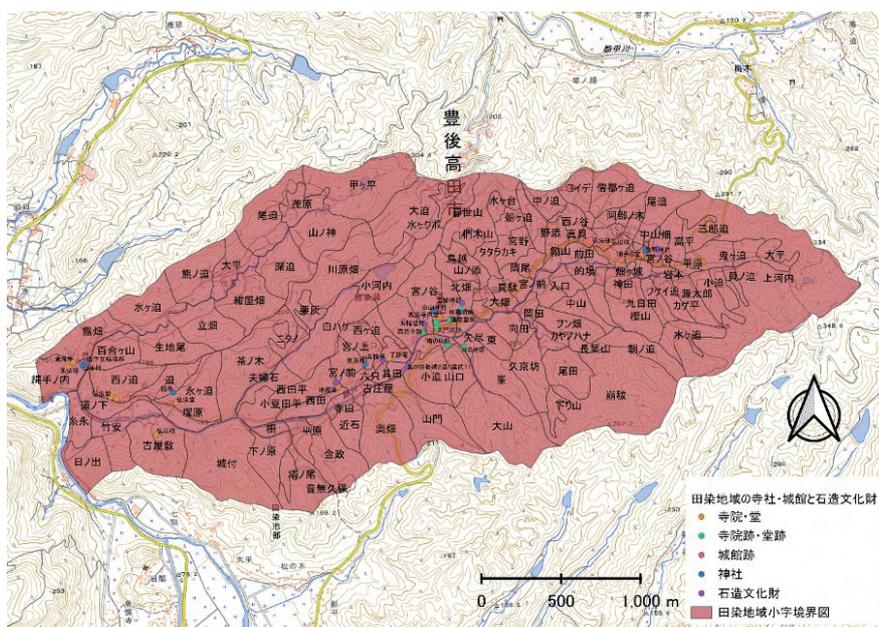
⁽¹⁸⁾ 『豊後国田染荘の調査II 附図』(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、1987年)。

⁽¹⁹⁾ 橋本雄一「GISの概念」(橋本雄一編『五訂版 GISと地理空間情報—ArcGIS 10.7とArcGIS Pro 2.3の活用—』古今書院、2019年)

者はポリゴン(面)、後者はポイント(点)でデータ化をしていくこととした。その際、作成したデータの属性情報として小字の名称、所属する大字の名称、近世における村の名称を入力することとした。附図2には、堂・寺院、堂跡・寺院跡、神社、城館跡、石造文化財といった文化財の分布が記載されているため、文化財の名称および種別、どの小字・大字・近世村に属しているかを入力することとした。

【地図1】は、データ化の例として荘内路地区における附図1の情報(小字界)と附図2の情報を総合したものである。ポリゴンを透過させるなど表現上の工夫をすることで、文化財の分布状況を地名や地形とともに検討することができ、これだけでもより多角的な分析の可能性を予感させる。今後、作成を予定している水利・灌漑の情報などを追加していくことで地名と寺社・石造文化財分布、水利・灌漑、そして地形という情報間の関連性の抽出が一層容易になることが期待される。

以上、ここまで田染荘報告書のデータ化作業についての現時点での報告を行ってきた。次章では、本章2節で紹介した地理データを使って簡単な考察を行い、GISを用いたデータ化および分析の有効性の一端を提示したい。



【地図1】 田染路地区における小字界と寺社・城館・石造文化財の分布状況

本図は、国土地理院が提供する標準地図をベースマップに『豊後国田染荘の調査II 附図』1・2に記載の地理情報をもとに作成した。

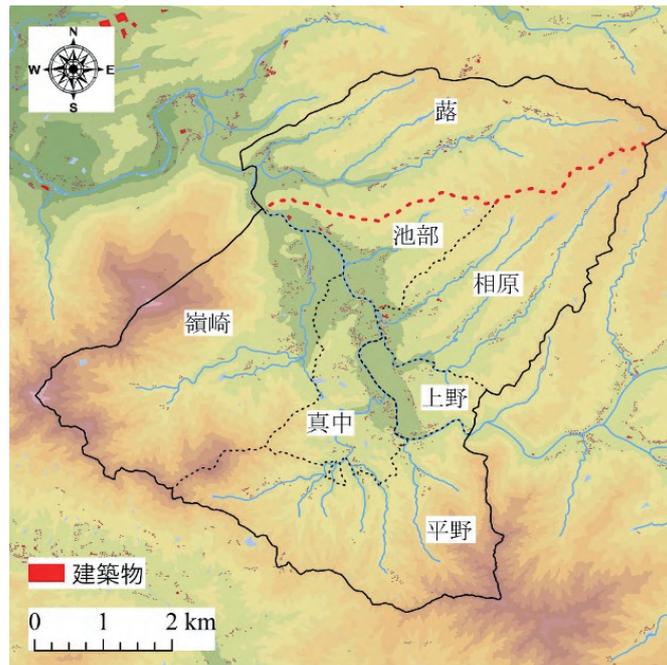
第2章 文化財分布と地名から中世開発の足跡をたどる

本章では、前章の第2節で述べた電子データを活用しつつ、田染荘内の別名、糸永名の開発過程を捉えなおし、その有用性の一端を示すこととしたい。

1 糸永名の所在

糸永名の開発過程を考察する前に、田染荘の地理的概観について述べる。【地図2】は田染

盆地全体と現代の建築物の分布状況を示す。黒線は田染荘の領域を表し、赤の点線は後述する田染盆地と落路を隔てている尾根を表す。田染荘を空から見て最初に気づくのは、田染盆地を中心として、それを取りまく山々が開析された谷間にも集落が点在し、一続きの空間が形づくられている点であろう。建築物においても、盆地中心部である田染真中から各河川に沿って分布していることがよくわかる。次に北東部へ目を転じると、そうした連続性を持たない谷間の空間が目につく。このエリアこそ、国宝富貴寺大堂がある現田染落地区（近世落村）であり、本章で考察する糸永名の中心部である。



【地図2】田染地区における地形概略および建築物の分布状況

本図は、河川水系を国土数値情報、標高および建築物は基盤地図情報をもとに作成（いずれも国土地理院提供）。大字は『豊後国田染荘の調査』附図1を参考にした。赤点線は田染盆地と落の境界を示す。田染荘の基盤となる田染盆地は池辺、嶺崎、相原、上野、真中、平野に該当し、落は田染盆地と地形的に分断されている。

旧田染荘域における落地区の独自性は、地図上から読み取ることができる立地面だけではない。たとえば、近世において旧田染荘域は領主を同じくし、正保郷帳では田染荘内とされ、旧田染荘域の多くが大庄屋を同じくする田染組を構成するのに対し、落村は加入していない。また、旧田染荘域の各集落が荘鎮守である元宮・二宮・三宮いずれかの八幡宮を氏子圏とするのに対し、落地区のみは含まれない⁽²⁰⁾。このように、旧田染荘域において落地区は独自のポジションを占めている。こうした独自性の淵源には、田染荘や糸永名の開発まで遡る歴史的な経緯があると推定される。以下、先行研究に導かれながら、田染荘および糸永名の成立過程を確認したい。

⁽²⁰⁾ 段上達雄「村落と信仰」（前掲注7『豊後国田染荘の調査I』）。

そもそも田染荘は、平安中期に成立の辞書『倭名類聚抄』に記載の田染郷を前身とする。田染郷の実態を知る文献史料は確認できないが、考古学の成果によれば、田染盆地には縄文・弥生・古墳と人々の生活の痕跡が残され、郷形成期と推定される8世紀には、現池部・上野地区において、同一プラン上の条里地割が確認され、古代の時点で二つの井堰を用いた灌漑体系が整備されていたと考えられている⁽²¹⁾。その後、11世紀前半までに宇佐神宮領田染荘が成立し、桂川上流域には田原別符が成立していくが⁽²²⁾、先述の条里地割や荘鎮守 元宮八幡宮の存在からして、この辺りこそ中世田染荘の中心地であったと推定される。こうした点を踏まえ、弘安八年「豊後国大田文」を見ると、「田染郷 九十余町」のなかに「本郷 四十二町」「吉丸名 二十一町」「糸永名 三十町」があるとされ⁽²³⁾、当時の田染荘が本郷・吉丸名・糸永名という三つの所領単位から構成されていたことがわかる。このうち本郷は、古代以来の中心部分を想定するのが自然であり、吉丸名の所在は必ずしも明確ではないものの、糸永名については現存地名から現露地区にあたりとされている⁽²⁴⁾。

田染盆地から桂川に沿って露地区へ向かうと、西叡山系と二子山系の尾根が迫り出した狭窄部を抜けた先に、小さな平野が広がっている。この平野こそ、露地区の小字糸永である。また露谷を通貫して流れる露川にはイトナガ井堰が設けられ、この井堰の灌漑範囲（約三町九反）が糸永名の中心と考えられている【地図3】。

さて、文献史料上に見られる糸永名は、長寛3年(1165)5月日「関白藤原基実家政所下文」が初見であり、この時点で田染荘に属しているのを確認できる⁽²⁵⁾。また、寛元3年(1245)「大宮司宇佐公高切符案」には「糸永保司」の記載がある⁽²⁶⁾。中世土地制度における保は、国守が自らの意志、ないし権門・官司からの開発申請・立保の要求を承認することで成立するものとされ⁽²⁷⁾、国衙系官人によって12世紀前後に開発された開発単位（別名）が田染荘に組み入れられたとみられている⁽²⁸⁾。出田和久氏によれば、近世露村の耕地面積が二四町であり、康永3年(1344)「田染荘糸永名惣帳案」には、糸永名関連地名が大字横嶺 平野 池部などに見られることから⁽²⁹⁾、「糸永名三十町」が他地域の耕地を含んだ面積であったことを指摘

(21) 『上野遺跡 豊後高田市文化財調査報告書第1集』（豊後高田市教育委員会、1990年）。

(22) 海老澤衷「豊後国田染荘の復原―開発と名の変遷―」（前掲注5海老澤氏著書、初出は1991年）。

(23) 弘安8年「豊後国図田帳」（『鎌倉遺文』15701号）。なお、豊後国大田文については諸本が複数存在し、相互の関係について整理・検討がなされており、最も脱漏の少ないものが『鎌倉遺文』15701号の大和文華館本とされる（海老澤衷「豊後国大田文の伝写過程と現存写本―「豊後国図田帳考証」の再検討―」（前掲注5海老澤氏著書、初出は1981年））。

(24) 前掲注22海老澤氏論文。

(25) 「到津文書」『豊後国荘園公領史料集成』第1巻、田染荘史料3号、以下『集成』田染 号と略記。

(26) 「永弘文書」『集成』田染17号。

(27) 網野善彦「荘園・公領の存在形態」（前掲注3網野氏著書、初出は1973年）。

(28) 前掲注22海老澤氏論文。

(29) 「永弘文書」『集成』田染140号

している⁽³⁰⁾。さらに井上聡氏は、宇佐宮政所惣検校の益永一族の所領として糸永名を想定し、豊前国の築城郡、上毛郡、下毛郡、宇佐郡、そして田染荘に分布していたことを指摘し、国・郡を越えた存在であったとする⁽³¹⁾。

以上を踏まえるならば、田染荘内落谷での糸永名の規模は30町よりは限定的であり、先述した小字糸永も谷の入口・桂川至近という便利な立地にあつて、領主が広域・散在的な土地の管理をするうえで適した位置にあると考えられる。他方、15世紀には落谷の中心は富貴寺に隣接した谷の中央部（小字政所）に移動する。中世前期から後期にかけて中心が移動した点をどのように捉え、評価するかについては必ずしも研究がなされていない。以下、節を改めて糸永名の開発プロセスを探っていきたい。



【地図3】落川における氾濫原の範囲および現代の建築物の分布

青線は落川の氾濫原の範囲を示す。氾濫原の内側には史跡や寺社はみられず、民家もほとんど確認できない。

2 糸永名の開発過程

中世の村落形態は、前期は人々の住まいが点在した散村、後期は人々の住まいが集中した集村で、現代の集落は多くが14～15世紀に形成されたものと一般的には説明される⁽³²⁾。最新の研究成果によれば、10世紀半ばに高温少雨の早魃が列島を襲った結果、全国的に耕地が荒廃し、11～12世紀は再開発の時代であったという⁽³³⁾。土地利用の自由な新開地に散村が営

⁽³⁰⁾ 出田和久「豊後国田染荘の景観変遷—中世荘園村落景観への接近にむけて—」（『歴史地理学紀要』31、1989年）。

⁽³¹⁾ 井上聡「神領興行法と在地構造の転換」（佐藤信・五味文彦編『土地と在地の世界をさぐる』山川出版社、1996年）。

⁽³²⁾ 水野章二『日本中世の村落と荘園制』（校倉書房、2000年）他。

⁽³³⁾ 中塚武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二編『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』（臨川書店、2020年）

まれやすいことに鑑みれば⁽³⁴⁾、中世前期の村落形態は時代の状況に即したものであったと言えよう。対する中世後期には、開発可能地が飽和状態となるなか、効率よい耕地経営をするために住まいを集中させたことが指摘されており⁽³⁵⁾、また南北朝内乱下でのセキュリティ面でも集村化が進んだものと考えられる。

他方、田染荘では小崎地区にある台藪集落のような集村はむしろ少なく、現在まで大字内に民家が点在する散村形態をとる傾向にある。本章の考察対象である落地区も同様であり、圃場整備以前の落地区を撮影した航空写真を眺めると、無数の旧河道に規定されながら耕地が営まれていた様子を確認できる。【地図3】は落谷における現代の建築物と史跡の分布を示した地形図である（以下、本図を参照）。青線は氾濫原を示し、現在でも水田として利用されている。建築物や史跡は氾濫原を避けるように分布し、小字糸永から富貴寺のある小字佛生田にかけて河川右岸側沿いに史跡の分布が集中していることがわかる。これは、河川の右岸と左岸で地形の侵食具合が異なることから、比較的侵食が進んでいる右岸側の方がなだらかで広い土地を確保できたのだと考えられる。このことから、落川の氾濫や河道変更が少なからずあったことを物語ると同時に、同地区における人間の可住エリアが限定されていたことがうかがえる。すなわち落谷では、水害に遭わず集村を形成できるまとまった平地は少なく、また水田に利用可能な限られた土地を有効利用するためにも、人々は氾濫原と山麓の間に点々と屋敷を構えざるを得なかったのである。

こうした居住環境を踏まえたうえで、糸永名の開発過程を検討したい。すでに述べたように、糸永名の中心は、落谷入口の平野部で桂川と接する小字糸永であった。しかしながら、糸永は紛れもなく氾濫原に位置し、当時の「開発領主」が開発の拠点を構えるには不適當と言わざるを得ない。ここで想起したいのが、田染荘内における「ヤシキ」地名および中世石造文化財の分布を地図上にプロットし、その分布の濃淡によって中世集落のおよその位置を推定した出田氏の研究である⁽³⁶⁾。出田氏の研究を踏まえるならば、ヤシキ地名がある、もしくは中世石造文化財が集中する場所は、糸永名開発の拠点を比定する候補地として注目すべきポイントであると言えよう。

小字糸永周辺でヤシキ地名がある or 中世石造文化財が集中する場所は二箇所ある。一箇所目は、小字縄手之内の山下集落周辺である。同地には、六郷山寺院の一つ清滝寺があり、中世の五輪塔群が存在する。縄手=自然堤防の内という地名だけあって、人間が住むのに適した立地にあり、この地の開発以来、人々が居住していたとみて間違いないだろう。また、同地を流下する河川は氾濫原を形成している落川と比べて小規模であり、人々の生活利用に適した流量であった考えられる。他方、その北にある茂原谷にため池が作られ、開発が進められたのは近世以降のことであり、中世の時点で多くの人口を抱える大規模な集落への成長可能性は低いと考えられる。二つ目が小字古屋敷周辺である。小字糸永から小字城付へと平野部が徐々に狭まっていくなかで、小字古屋敷は最狭窄部の直前に位置する。小字城付は落川の狭窄部

⁽³⁴⁾ 「散村」（日本地誌研究所編『地理学辞典 改訂版』二宮書店、1989年）。

⁽³⁵⁾ 前掲注 32 水野氏著書。

⁽³⁶⁾ 前掲注 30 出田氏論文。

であること、狭窄部を越えてすぐに再び平地が広がっていくことから、15世紀に政所が構えられることになる落谷中央部への開発を進めるうえでも拠点となる立地にある。

ここで、糸永名中心部を灌漑する用水の取入口であるイトナガ井堰に注目したい。このイトナガ井堰が所在する小字が古屋敷であることは、あまり知られていない。2021年現在、古屋敷には民家が二軒あるのみで、1970年代の航空写真⁽³⁷⁾で確認できる谷間の耕地もすでに耕作放棄され、往時の面影は失われている。そこで、豊後高田市法務局所蔵の明治22年調製とされる小字図を確認すると⁽³⁸⁾、田や畑、山林が並ぶなかで現在も民家が立つ山麓の河岸段丘上の平地、通称地名フルヤシキに「社地」1筆、「宅地」6筆が記載されている。このことから、同地点にかつて小村が営まれており、人間の可住地であったことがうかがえる。近世末・近代初頭の時点で小村があるにもかかわらず、小字の名称が古屋敷と呼ばれていることに鑑みれば、それ以前に遡る何かがあったと考えるのが自然ではないだろうか。この小村から段丘を降りたすぐ真下がイトナガ井堰である。こうしたことから、小字古屋敷は、中世の開発者が用水を確保しつつ拠点を構えるうえで適した位置にあったと言え、河口部から谷の奥へと開発を進める橋頭保としても適した立地にあり、糸永名開発時の拠点があった場所と想定することが十分に可能である。

ここまで、中世前期における糸永名開発の拠点の位置を探り、イトナガ井堰至近の距離に位置する山裾の平地フルヤシキが中世のある時点での拠点として該当する場所であることを考察してきた。最後に、糸永名の中心部がいかんして落谷中央部へと移っていくのかについて考察しておきたい。現在、イトナガ井堰が灌漑する用水の水源は、小字小河内にある小河内池となっている。小河内池は、明治37年に落村の有力者田辺孝市が、用水の不足を解決するために築堤した⁽³⁹⁾。築造の結果、下流部の田12町6反の用水供給が安定し、新たに2町の水田が開かれたとされる。田染荘が少雨で水不足に苦しみ、ため池の造成が盛んであったことはつとに知られるが⁽⁴⁰⁾、明治期における溜池造成のエピソードからは、落川の流末であった糸永周辺部も慢性的な水不足に悩まされていたことがうかがえる。また、新規で水田を開墾していることから、中世期と比べて人口が増加しており、より多くの食糧や水を必要としていたこの時期特有の事情も垣間見える。

こうした流末における用水不足を踏まえるならば、中世前期に下流の平野部に糸永名が開かれ、落谷を遡って開発を進めた結果、当初の開発地は上流の新規開発地に水を奪われたことで、用水の確保が容易な中央部へと谷の中心部も移動していったと考えられる。また、中世の技術では堤防の造成をはじめとした治水技術が十分ではないなか、桂川が氾濫するような降雨が頻発した場合、耕地の再開発に取り組むよりも、水のつかない上流へと開発を進めた方が合理的であり、それに合わせて中心部も移動していったという仮説も成り立つ。いずれにせよ、中世前期と近代以降とで、水に関する人々の対応策が異なることは明らかであり、

⁽³⁷⁾ 国土地理院「国土画像情報 第一期」(1974~1978年撮影)。

⁽³⁸⁾ 2021年11月8日に赤松・齋藤で調査・撮影。

⁽³⁹⁾ 前掲注22海老澤氏論文。

⁽⁴⁰⁾ 前掲注7『豊後国田染荘の調査I』他。

人々の生活環境の変化と地球環境の変化（例えば、温暖化や寒冷化など）、双方の視点からさらに考察を続けていく必要がある。

おわりに

本稿では、現在継続されている荘園調査の原点ともいべき田染荘に立ち戻って、今後の調査・研究の進路を模索すべきことを提起したうえで、研究環境の整備を目的に進めている資料のデータ化および、その活用によるケーススタディを提示した。あくまで作業の進捗状況をまとめた中間報告の意味合いが強い内容となっており、今後、論考として体系化していきたいと考えている。

従来の荘園調査に依拠した個別研究では、調査のなかで積み重ねた経験に左右される点も多いなか、自然地理学の研究者（共著者齋藤）が参画し、地形データを活用した分析や図化を行うことで、一步踏み込んだ説得力ある考察ができたと考えている。そもそも荘園調査は、かつてそこが荘園だったことが動機で行われるものであるため、中世史研究者が主導する場合が大半である。全国にある荘園遺跡は膨大な数に上るが、このうち文献史料に恵まれる荘園はほんの一握りでしかない⁽⁴¹⁾。文献史料の制約を前に、中世史研究者は文献史料から明らかにし得る限界を提示したうえで、他分野の研究者との協業により、史料からだけでは明らかにしえない歴史像に迫っていくことが必要であり、近年の気候変動に関する地球研の共同研究はその好例である⁽⁴²⁾。荘園調査についていえば、GISの操作に熟達し、幅広い解析手法の蓄積を持つ自然地理学との協業により、過去の調査成果を活かしながら、新たな方法論を確立していく必要がある。今後は、田染荘の調査成果をいかに活かすかの模索を続けると同時に、新たなフィールドの開拓を課題として掲げ、本稿を擱筆したい。

[付記] 本稿は、シンポジウム実施にあたって用意した予稿である。その後、研究成果の一部は赤松秀亮「荘園調査の到達点と地理情報の分析に向けた試み」（鎌倉佐保・木村茂光・高木徳郎編『荘園研究の論点と展望』吉川弘文館、2022年）として刊行されたほか、糸永名の開発過程に関する別稿の準備を進めている。

⁽⁴¹⁾ 『条里制の諸問題Ⅲ』（奈良国立文化財研究所、1983年）。

⁽⁴²⁾ 前掲注33 中塚氏監修、伊藤・田村・水野氏編著。



1

日本における荘園とは何か/Qu'est-ce qu'un shôen au Japon ?

- 荘園とは/shôen
 - 古代から中世（奈良～戦国期）にかけて存在した大土地所有の形態
 - A form of large land ownership that existed about from AD 700 to AD 1600.
 - 貴族や寺院、神社といった権門（荘園領主）の財源として各地に成立
 - Established in various regions as a source of revenue for nobles, temples, shrines (shôen lords).
 - その規模や特徴は時代や地域によって様々
 - Its scale and characteristics vary according to time and region.
- 中世荘園の特徴/Caractéristiques des shôen médiévaux
 - 集落や耕地、山野河海といった一定の領域を擁する（領域型荘園）
 - It has certain areas such as settlements, arable land, mountains, fields, rivers and seas (territorial shôen).
- 領域性があることにより・・・/En vertu de sa territorialité...
 - 単なる権門の財源のみならず、行政単位としての機能も持つ
 - Not just a source of revenue for the shôen lords, but also an administrative unit.

2

日本における荘園とは何か/Qu'est-ce qu'un shôen au Japon ?

- 荘園領主と武士/Seigneurs du shôen et samourais
 - 権門は複数の荘園を所有
 - The shôen lords own several shôen.
 - 権門（荘園領主）の代わりに現地での徴税、治安維持を担ったのが武士（在地領主）
 - The samurai (local supervisors) were responsible for collecting taxes and maintaining public order on behalf of the shôen lords.

つまり/En d'autres termes

- 日本中世の社会は荘園を媒介として構築されてきた
- Il est possible de considérer les relations sociales du Moyen Âge japonais comme ayant été établies par le biais du shôen.

3

荘園調査の歴史について/L'histoire de l'enquête shôen

- 荘園調査は戦後もなく
- The shôen survey was conducted after 1945.
 - 当初は地名や遺跡の確認が目的
 - The initial purpose was to identify place names and ruins.
- 1980年代～1990年代
 - 1980's and 1990's
 - 地域史としての記録・保存
 - Recording and Preservation as Local History
 - 調査手法が確立
 - Survey methodology established.
 - 経済成長による地域景観の改変
- Modification of local landscape by economic growth
 - 緊急性が求められた
 - Urgency was required.



1985年九州横断道路（別府・由布）の建築風景 大分県HP

4

宇佐神宮領 豊後国 田染荘/Tashibu-no-shô dans la province de Bungo sous la juridiction d'Usa-jingû

- 国東半島/Péninsule de Kunisaki
 - 両子火山山群を中心として放射状に形成
 - Radial formation around the Futago volcano group
- 年間を通じて降水量が少ない (1457.4mm/yr)
 - Less precipitation than in Japan (1457.4mm/yr)
- 安山岩・凝灰角礫岩で占められ、地下水は得にくい
 - The site is dominated by andesite and tuff, making it difficult to obtain groundwater.
 - (これらの岩石は水を通しにくい)
 - (These rocks are not easily permeable to water.)



5

宇佐神宮領 豊後国 田染荘の調査背景

上：1980年 国立歴史民俗博物館
下：1976年 高貴寺 ともに大分県HP

- 国東半島文化と荘園遺跡の活用
 - Kunisaki Peninsula Culture and the Use of Shôen Sites
- 学際的な共同調査・研究
 - Interdisciplinary joint research and study
 - 歴史学・地理学・考古学・民俗学
 - History, Geography, Archaeology, Ethnography
- 荘園調査の理想モデルとなった
- Ideal model for manorial survey



6

荘園調査研究の課題/ Les défis de la recherche shôen

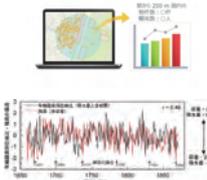
1. 調査数の減少/ Decrease in the number of surveys
 - 圃場整備によって荘園調査ピーク時と比べて調査可能数が激減した
 - The number of possible surveys has been drastically reduced compared to the peak of the shôen survey due to field development.
2. 調査成果の活用・分析が不十分/ Insufficient analysis of survey results
 - 緊急性をもって調査は行われたが、その後のデータ解析に停滞感がある
 - The survey was conducted with urgency, but subsequent data analysis has been stagnant.
3. 現地が持つ歴史情報の減少/ Decrease in local historical information
 - 時代を経るにつれて、少子高齢化となり地方の過疎化が加速している
 - As time goes by, the birthrate is declining and the population is aging, and the depopulation of rural areas is accelerating.

7

荘園調査研究の課題/ Les défis de la recherche shôen

- 新たな調査・研究方法への試みが必要
- Need to experiment with new research methods

- 地理情報システム (GIS) の活用
 - ⇒ 地理学的手法との融合
- Utilization of geographic information systems (GIS)
 - ⇒ Integration with geographic methods



- その他：環境化学同位体を用いた古環境復元
 - ⇒ 地球化学的手法との融合
- Other: Reconstruction of paleoenvironment using isotopes of environmental chemical components
 - ⇒ Integration with geochemical methods

下：年輪酸素同位体比と米収量の関係
佐野雅規 (2020) 早稲田オンライン・オビニオン

8

資料のデジタルデータ化/ Numérisation des matériaux

- 渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』
- "Bungo-no-kuni shôen kôryô shiryô shûsei" (Collection of documents historiques sur les shôen et les kôryô de la province de Bungo), éditée par WATANABE Sumio
 - 大分県内の荘園・公領史料を整理
 - Organize historical materials of shôen and kôryô in Oita Prefecture.



- 更なる進展のためにはデジタルデータ化が急務
- The urgent need to convert to digital data for further progress

- デジタルデータのOCR化/OCR of digital data
- 未収文書の収録/Recording of uncollected documents
- オープンリソース/open resource

9

GISを用いた空間解析/ Analyse spatiale à l'aide des SIG

- 地理情報システム/Geographic Information System (GIS)
 - 地理空間情報をデジタルデータとして表現、作成、編集、検索、分析といった様々な処理を行うソフトウェア
 - Software that represents, creates, edits, searches, and analyzes geospatial information as digital data.
- 過去の調査資料・歴史史料のみならず、あらゆるデータを組み合わせることで荘園の空間解析を目指す
- Aiming at spatial analysis of the manor by combining all kinds of data, not only past research materials and historical documents.



- 例：荘園の面積計算、洪水時の氾濫域推定など
- e.g., calculating the area of a manor, estimating the inundation area during a flood, etc.

10

こうした解析からわかること/ Ce que ces analyses nous apprennent

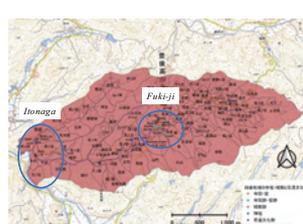
- 事例：系永名の開発プロセスについて/ About Itonagana's development process
- 落地区について/About Fuki district
 - 田染盆地の北部に位置・他の地区とは独立した立地
 - Located in the northern part of the Tashibu Basin / Location independent from other districts
 - 領主は同じだが、大庄屋 (管理人) が違う
 - The shôen lord is the same, but Ohshoya (administrator) is different.
- 系永名とは/About Itonaga-myo
 - 鎌倉時代 (1285年頃) 時の田染荘を構成する3つの所領単位の内1つ
 - One of the three territorial units that made up Tashibu-no-sho in around AD 1285.
 - 国衙系官人によって12世紀前後に開発された水田が田染荘に組み入れられた
 - Paddy fields developed by government officials around the 12th century were incorporated into Tashibu-no-sho.
 - 所領の面積や開発経緯について不明な点が多い
 - There are many unknowns about the area of the territory and how it was developed.

11

田染盆地区における小字界と寺社・城館・石造文化財の分布状況

Les limites des fauces et la répartition des temples, sanctuaires, châteaux et biens culturels en pierre dans le quartier de Tashibu-fuki

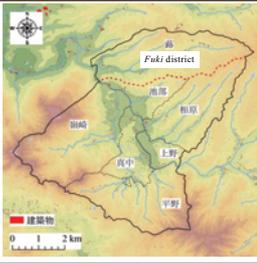
- 赤で示した領域が小字
- The area shown in red is Koaza.
- 点は文化財等の分布を表す
- The points represent the distribution of cultural properties, etc.
- 富貴寺周辺に寺院跡が分布
- Temple ruins are distributed around Fuki-ji.
- 系永周辺の平野には現存した寺院や神社が分布
- Temples and shrines that have survived are distributed in the plains around Itonaga.



12

田染地区における地形概略および建築物の分布状況
Schéma de la topographie et de la distribution des constructions dans la région de Tashiba

- 赤い破線は大字の境界を示し、山の尾根に沿って引かれている
- The red dashed line indicates the boundary of Oaza, which is drawn along the mountain ridge.
- 落地区は他の地区と地形的な分断がある
- Fuki district is topographically divided from other districts.
- 盆地平野部（中心部）を共有していない
- Fuki district does not share the basin plain (center).



13

鹿川における氾濫原の範囲および現代の建築物の分布
Étendue de la plaine inondable et répartition des constructions modernes le long de la rivière Fuki-gawa.

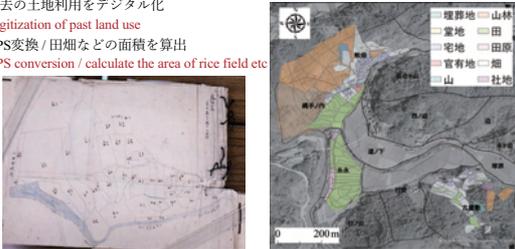
- 青線は氾濫原の範囲を示す
- The blue line indicates the extent of the floodplain.
- 洪水時の危険性もあり氾濫原には民家が建っていない
- No houses have been built on the floodplain due to the danger of flooding.
- ⇒水の少ない地域なのに？
- ⇒ Even though the area has little water?
- 時代によっては洪水が発生？
- Was there a lot of flooding in some long-term ages?



14

明治初期地籍図の解析 / Analysis of cadastral maps in about AD 1868

- 過去の土地利用をデジタル化
- Digitization of past land use
- GPS変換 / 田畑などの面積を算出
- GPS conversion / calculate the area of rice field etc



15

おわりに / Conclusion

- ・ 荘園研究の課題と新たな試み
- Issues and New Approaches to Shoen research
- ・ 課題 / Issues
 - ・ 現地の改変とデータの損失 / Local modifications and data loss
 - ・ 研究方法の限界 / Limitations of the research method
- ・ 新たな試み / New Approaches
 - ・ デジタル解析の利用 / Use of digital analysis
 - ・ 地理学・地球科学的手法との融合
 - ・ Integration with geography and earth science methods
 - ・ 別々の調査ではない点に注意！
 - Note that this is not a separate investigation!

16

Le développement d'une base de recherche par la mise en données des documents sur Tashibu-no-shô dans la province de Bungo, et les tentatives de nouvelles recherches

Hideaki AKAMATSU (Université de Beppu), Kei SAITOH (Université de Kyoto)

Traduit par Emiko HIROOKA (l'Université de Beppu)

et Risako SAKAI (l'Université de Beppu)

Introduction

Au Japon, le *shôen* était une forme de grande propriété foncière qui existait de l'Antiquité au Moyen Âge (de l'époque Nara à l'époque Sengoku). Ils ont été établis dans divers endroits comme source de revenus pour le seigneur du *shôen* (*Kenmon*), comme les nobles, les temples et les sanctuaires. La taille et la forme d'un *shôen* variaient en fonction de l'époque et de la région, mais une caractéristique commune à de nombreux *shôen* médiévaux était qu'ils contenaient une certaine zone, comme le village où les gens vivaient, les terres arables environnantes, et les montagnes, les champs, les rivières et les mers (*shôen* territoriaux). Cette territorialité signifie que cet ensemble de terres n'est pas seulement une source de revenus pour le seigneur, mais aussi une unité administrative dans la société médiévale. Le seigneur possédait généralement plus d'un *shôen*, et c'étaient les samouraïs nouvellement apparus qui prenaient la relève du seigneur et se chargeaient de collecter les impôts et de maintenir la sécurité dans la région. À la lumière de ce qui précède, les relations sociales du Moyen Âge peuvent être décrites grossièrement comme suit : la noblesse et les temples et sanctuaires étaient impliqués dans le *shôen* en tant que propriétaires, les samouraïs en tant qu'administrateurs locaux et le peuple en tant que résidents. En d'autres termes, il est possible de considérer les relations sociales du Moyen Âge japonais comme ayant été établies par le biais du *shôen* (le système féodal des terres), et il est historiquement considéré comme l'un des facteurs les plus importants qui caractérisent cette période.

On a accumulé des recherches sur les *shôen* effectuées suivant différentes perspectives, allant de celles qui se concentrent sur l'autorité supérieure en clarifiant le processus de transmission du territoire par le seigneur et la structure de propriété du territoire, à celles qui étudient individuellement les conditions réelles des *shôen* dispersés dans le pays. Ces dernières approches, en particulier, ont été entreprises dans une situation où le *shôen* attirait l'attention en tant que site de développement des structures de production médiévales, alors que

l'influence du marxisme sur l'historiographie devenait plus prononcée dans la période d'après-guerre. Après la diminution de cette influence, elles ont continué à se diversifier dans ses perspectives de recherche et ses méthodes d'analyse jusqu'à aujourd'hui. Les recherches sur le terrain dans les anciens *shôen* ont été très fructueuses pour clarifier les réalités des sites.

C'est peu après la fin de la guerre que les chercheurs en histoire médiévale japonaise ont commencé à mener des enquêtes sur les *shôen* afin de trouver des traces de ces terres qui avaient survécu dans la région. Au départ, l'objectif de l'enquête était d'acquérir une compréhension plus précise des sources documentaires, comme l'identification des noms de lieux, des temples et des sanctuaires, mais progressivement, l'enquête est devenue plus sophistiquée. Dans les années 1980 et 1990, elle s'est orientée vers l'enregistrement complet et la préservation de l'histoire locale, et des méthodes d'enquête ont été établies. Ce phénomène a été déclenché par l'urbanisation et la motorisation des campagnes au cours de la période de croissance économique rapide (du milieu des années 1950 au début des années 1970), ainsi que par les changements apportés au paysage rural dans les projets de développement des champs à l'échelle nationale visant à mécaniser l'agriculture. L'altération du paysage rural depuis l'époque pré-moderne a donné aux chercheurs un sentiment de crise en termes de perte d'informations historiques jusqu'alors laissées dans la région. En conséquence, les investigations nationales autour des *shôen* ont été entreprises avec urgence pour enregistrer et préserver le paysage.

Le *shôen* qui a été le précurseur de cette recherche est Tashibu-no-shô dans la province de Bungo sous la juridiction d'Usa-jingû (aujourd'hui Tashibu, ville de Bungo-Takada, préfecture d'Oita). À la fin des années 1970, la préfecture d'Oita prévoyait d'ouvrir le musée préfectoral d'histoire et de folklore *Usa Fudoki no Oka* (aujourd'hui le musée préfectoral d'histoire), et envisageait l'utilisation des ruines du *shôen* comme source d'informations sur la culture de la péninsule de Kunisaki, qui avait marché de pair avec le sanctuaire Usa. Ce projet, accompagné d'un sentiment d'urgence face à l'évolution du paysage, a conduit principalement des chercheurs en histoire documentaire et aussi ceux en géographie, archéologie, ethnographie et histoire de l'art à une collaboration interdisciplinaire de six ans à partir de 1981. Cela a mis en évidence le type d'informations historiques que l'on pouvait trouver dans les *shôen* et a établi une théorie sur la façon dont ces informations pouvaient être enregistrées et préservées. La méthode d'enquête établie à cette époque est devenue un modèle idéal pour les enquêtes sur les *shôen*, et celles-ci ont été inscrites dans l'histoire de la recherche comme une approche valable. D'autre part, plus de 40 ans après le début de l'enquête, de nouvelles questions sont susceptibles d'apparaître.

Le premier problème est la diminution du nombre d'investigations sur les lieux. Il convient de répéter que l'enquête sur les *shôen* a été menée de toute urgence dans une situation où le paysage arable était considérablement modifié par le développement des champs. Par conséquent, maintenant que l'aménagement du territoire s'est fait dans une large mesure, le

nombre d'enquêtes a diminué par rapport à la période de pointe, et il semble que l'importance et l'urgence de mener la recherche sur les *shôen* ne soient plus partagées du milieu universitaire comme elles l'étaient auparavant. Deuxièmement, les résultats de l'enquête ne sont pas toujours pleinement exploités et sont parfois enterrés. En général, ils sont publiés sous la forme d'un rapport ou d'un recueil d'articles. Cependant, les recherches sur le *shôen* en question ne sont pas toujours effectuées après l'investigation sur le terrain, et elles tendent à être perçues comme exhaustives. Ceci est lié au premier point, mais nous pensons que l'importance de l'enquête ne sera partagée que si les faits enregistrés et clarifiés par le travail sur les lieux sont utilisés pour l'analyse et la réflexion. Troisièmement, en raison des changements dans la structure sociale, la quantité d'informations historiques détenues par les communautés locales diminue. Après la guerre, le nombre de personnes travaillant dans le secteur primaire a diminué, et les coutumes locales et les noms communs des lieux qui avaient été transmis de génération en génération dans chaque secteur n'ont pas été suffisamment conservés. Le dépeuplement des zones rurales dû au vieillissement de la population et à la baisse du nombre de naissances est devenu si important que, dans certains cas, les villages eux-mêmes ont disparu. La situation est sans doute critique dans la mesure où les entretiens avec les habitants sur les noms de lieux et les coutumes ont occupé jusqu'à présent une grande partie de l'enquête sur les *shôen*.

Après avoir exposé les trois problèmes ci-dessus, nous avons maintenant besoin d'une explication objective sur le type d'enquête qui devrait être menée à l'avenir, et sur l'importance de poursuivre l'enquête en premier lieu. À cet égard, il est utile de revenir à Tashibu-no-shô, qui servait autrefois de modèle pour l'enquête sur les *shôen*. Comme mentionné plus haut, Tashibu-no-shô a fait figure de pionnier dans les années 1980 et 1990 en démontrant l'efficacité de la recherche des *shôen* par le biais d'enquêtes et d'études interdisciplinaires, notamment en matière d'historiographie documentaire. L'étude la plus connue de Tashibu-no-shô est le rapport "Enquête sur le Tashibu-no-shô dans la province de Bungo", mais le Conseil de l'éducation de la ville de Bungo-Takada a continué à prendre l'initiative d'étudier et de faire des recherches sur le site en vue de sa sélection comme paysage culturel important et de sa désignation comme lieu de beauté pittoresque. Cette analyse multiforme, qui franchit les frontières des arts et des sciences, est remarquable. Depuis lors, cependant, peu de chercheurs, hormis ceux qui ont participé à l'enquête, se sont engagés dans l'étude de Tashibu-no-shô, et les résultats des recherches récentes n'ont pas été partagés avec la communauté de chercheurs en histoire médiévale. L'environnement informatique ayant considérablement progressé depuis les années 1980, et l'utilisation des SIG (Système d'Information Géographique) se répand progressivement dans l'étude des *shôen*. Pour l'instant, elle se limite souvent au dessin et à la mise en données des informations, et l'étape suivante consiste à déterminer ce qui peut être clarifié à l'aide de ce système. La quantité d'informations historiques qui peuvent être collectées sur la vie humaine, comme les noms de lieux, les coutumes et les manières, n'est pas aussi importante qu'elle l'était dans les années 1980, mais nous devons chercher à établir de nouvelles

méthodes d'analyse comme l'utilisation des technologies informatiques et la collaboration avec le domaine scientifique. Cela nous permettra de ne pas nous reposer seulement sur des informations historiques détenues par les hommes.

Dans ce qui suit, je voudrais faire le point sur l'état actuel du travail de mise en données sur des documents autour de Tashibu-no-shô, et présenter une tentative d'utilisation des résultats de ce travail. Nous espérons que cela constituera un guide pour l'orientation de la recherche sur les *shôen*.

1. Promouvoir le développement des infrastructures de recherche par la mise en données des documents sur Tashibu-no-shô dans la province de Bungo

Dans ce chapitre, nous ferons le point sur l'avancement des travaux visant à créer un environnement de recherche dans lequel tout le monde peut accéder aux documents de Tashibu-no-shô. Nous sommes actuellement en train de mettre en données les informations géographiques contenues dans les documents historiques publiés et les rapports d'enquête.

1.1. Mise en données des documents de “*Bungo-no-kuni shôen kôryô*⁽¹⁾ *shiryô shûsei* (Collection de documents historiques sur les *shôen* et les *kôryô* dans la province de Bungo)” édité par WATANABE Sumio

La majorité des documents relatifs à Tashibu-no-shô proviennent de la famille Nagahiro et d'autres familles chargées des rituels du sanctuaire Usa-Jingu. La réimpression du “*Document Nagahiro*” a été déjà incluse dans les “Archives historiques de la préfecture d'Oita”, mais le mélange de documents concernant plusieurs *shôen* a rendu difficile la focalisation de la recherche sur un seul *shôen*. Cette situation a été surmontée par la publication de “*Bungo-no-kuni shôen kôryô shiryô shûsei*” (Collection de documents historiques sur les *shôen* et les *kôryô* de la province de Bungo), édité par WATANABE Sumio (8 tomes en 12 volumes, Bibliothèque de l'Université de Beppu, 1984-1995).

WATANABE Sumio (1912-1997) a obtenu son diplôme de l'Université de Hiroshima Bunri en 1939 et a travaillé à l'école normale d'Oita à partir de 1939, puis à l'Université d'Oita. Après avoir pris sa retraite en 1975, il a rejoint le département d'histoire de la faculté des lettres de l'Université de Beppu, où il s'est engagé dans l'enseignement et la recherche. Peu après son transfert à l'Université de Beppu, il a commencé à compiler “*Bungo-no-kuni shôen kôryô shiryô shûsei*”, et en a publié un total de douze volumes entre 1984 et 1995.

Grâce à la publication de la collection, de nombreux documents historiques sur les *shôen* et les *kôryô* de la préfecture d'Oita y sont recueillis, et l'environnement de recherche a été considérablement amélioré. Cependant, près de quarante ans se sont écoulés depuis la publication du premier, et un quart de siècle depuis celle du dernier, l'œuvre n'était toujours

⁽¹⁾ *Kôryô*: Territoire sous le contrôle des autorités publiques, par opposition aux terres privées sous le contrôle d'un seigneur domanial (*shôen*). (Dictionnaire historique du Japon [<https://www.persee.fr>])

pas assez reconnue malgré son importance, avec ses peu d'exemplaires tirés. Compte tenu des progrès actuels de la publication électronique des histoires et des rapports des collectivités locales dans tout le Japon, nous pensons que la numérisation de tous les volumes, leur enregistrement dans les archives de la bibliothèque et leur diffusion active sur notre site Web permettront d'utiliser davantage cette collection et, par conséquent, de progresser dans l'étude des *shôen* et des *kôryô* de Bungo. C'est pourquoi j'ai reçu un financement de l'Université de Beppu pour développer un environnement où l'on peut utiliser le patrimoine de nos ancêtres comme une ressource ouverte ("Fondation d'un modèle de diffusion des connaissances académiques par l'Université de Beppu : Numérisation de "*Bungo-no-kuni shôen kôryô shiryô shûsei*" édité par WATANABE Sumio"). Pour la commodité de l'utilisateur, le texte reconnu automatiquement par le PC est incorporé dans les données au format PDF, ce qui lui permet de rechercher des mots simples.

En outre, il ne faut pas oublier l'existence de documents non collectés découverts après la publication de cette collection. Sur Tashibu-no-shô, 601 documents y sont déjà inclus, mais on sait qu'il y en a non collectés. Parallèlement à la conversion des fichiers en format PDF, nous travaillons également à l'élaboration d'un catalogue des documents présents dans les archives. A l'avenir, nous espérons publier un catalogue des documents en le suppléant avec les informations qui n'ont pas encore été collectées, et le mettre à jour au fur et à mesure de la découverte de documents.

Comme mentionné ci-dessus, la mise en ressources ouvertes des documents historiques imprimés est en cours. Si vous avez accès à l'internet, vous pourrez bientôt accéder aux documents historiques des *shôen* et des *kôryô* de la province de Bungo, y compris Tashibu-no-shô.

1.2. Vectorisation de l'information géographique dans la "Recherche sur Tashibu-no-shô de la province de Bungo"

Comme je l'ai mentionné dans l'Introduction, la recherche sur Tashibu-no-shô effectuée de 1981 à 1987 a abouti à la publication de la "*Recherche sur Tashibu-no-shô de la province de Bungo*" qui contient dans ses deux tomes une énorme quantité d'informations géographiques recueillies sur le terrain. Ce travail s'illustre par 13 cartes, montrant thématiquement des informations géographiques enregistrées telles que la distribution des temples, des sanctuaires et des biens culturels en pierre, les limites des *koaza* (petits *aza*⁽²⁾), les noms communs des lieux, et l'état de l'utilisation d'eau et de l'irrigation. En revanche, il est difficile d'examiner les plans sur une grande feuille de papier au format supérieur à A0 et de mettre en relation les informations contenues dans chaque plan.

⁽²⁾ *Aza* (字) : A l'origine, petite division de territoire, le *aza* est devenu actuellement une unité de division administrative. On distingue deux sortes de *aza*, les *ôaza* 大字 (les grands *aza*) et les *koaza* 小字 (les petits *aza*), ceux-ci groupés dans un *ôaza*. (Dictionnaire historique du Japon [https://www.persee.fr])

Aujourd'hui, ces problèmes peuvent être facilement résolus par les logiciels du SIG (système d'information géographique). Un SIG est un logiciel informatique permettant de représenter, créer, éditer, rechercher et analyser des informations géospatiales (informations sur l'environnement humain et naturel susceptibles d'être représentées sur une carte) sous forme de données. En utilisant ce SIG pour mettre en données les informations géographiques recueillies lors des enquêtes sur les *shôen*, il devient plus facile de rassembler et de sélectionner les informations géographiques qui étaient séparées par thème au moyen des cartes en papier. En les combinant avec des données topographiques disponibles en tant que ressource ouverte, il est possible de faire une analyse multidimensionnelle. Pour l'instant, il n'y a aucune tentative de mise à la disposition du public les informations géographiques collectées lors de l'enquête sur le terrain de Tashibu-no-shô. En la réalisant à l'avenir, nous espérons que l'analyse géographique sera facilitée à l'aide du SIG.

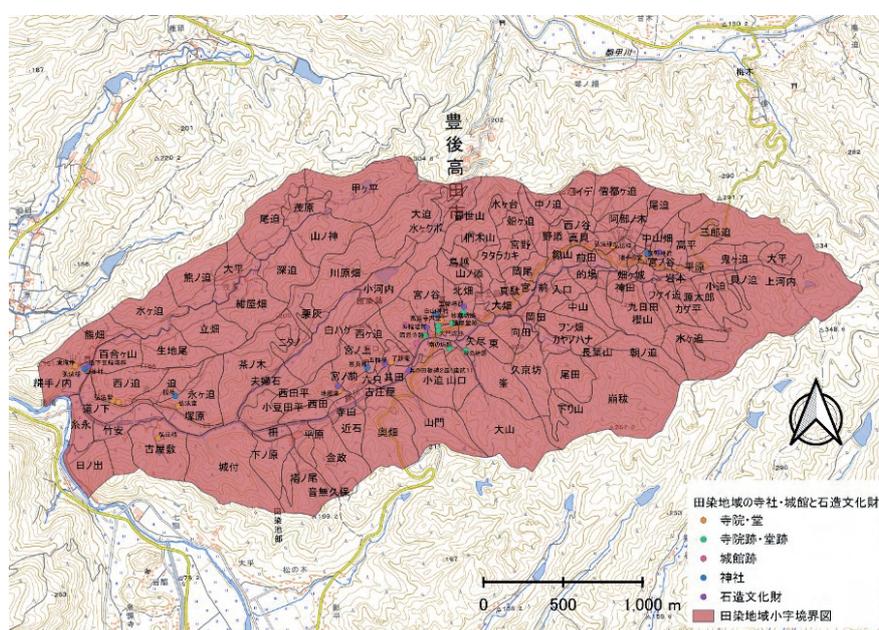
Au second semestre 2009, le département d'histoire et des biens culturels de la faculté des lettres de l'Université de Beppu a introduit un nouveau cours intitulé "Travaux pratiques en l'histoire japonaise", dont je suis le responsable. L'objectif de ce cours est d'effectuer un travail sur le terrain d'un *shôen*, d'apprendre les méthodes de recherche et d'expérimenter les traces du Moyen Âge repérables dans le paysage actuel, en remontant dans l'histoire. Pour ce faire, nous utilisons le SIG afin de mettre les informations géographiques du rapport de recherche en données utilisables dans les GoogleMap et GoogleEarth. Nous pensons que visiter les sites et utiliser ces applications sur un smartphone ou une tablette permettront aux étudiants non seulement d'améliorer la qualité du travail sur le terrain, mais aussi de leur donner l'occasion de s'initier au SIG avec la création de données. Cette année, nous avons pris pour tâche de mettre en données la carte annexe 1 : "Carte des limites des *koaza* (petits *aza*) du secteur de Tashibu" et la même 2 : "Temples, sanctuaires, châteaux et biens culturels en pierre médiévale du secteur de Tashibu".

La première étape du processus consiste à scanner les cartes annexes du rapport, à les mettre en données d'image, à les afficher dans le SIG en donnant leurs informations de localisation (géoréférencement) et à mettre les informations en données dans le SIG telles quelles. La carte annexe 1 montre l'étendue et le nom commun de chaque *koaza* dans l'ancien Tashibu-no-shô. Nous avons décidé de convertir la première en polygones et le second en points. Ce faisant, les noms des *koaza*, ceux des *ôaza* (grands *aza*) auxquels les *koaza* appartenaient, et ceux des villages du début de l'époque moderne ont été saisis comme informations d'attribut pour les données produites. Comme la carte annexe 2 montre la répartition des biens culturels tels que les temples, les ruines de temples, les sanctuaires, les ruines de châteaux et les biens culturels en pierre, nous avons décidé d'entrer le nom et le type de chaque bien et de préciser à quel *koaza*, *ôaza* ou village du début de l'époque moderne il appartient.

Comme exemple de mise en données, la Carte 1 représente une synthèse des informations de la carte annexe 1 (les limites des *koaza*) et de la 2 concernant le quartier de

Tashibu-Fuki. Grâce aux polygones transparents et d'autres dispositifs expressifs, il est possible d'étudier la distribution des biens culturels en même temps que les noms des lieux et la topographie. Cet effet laisse présager la possibilité d'une analyse plus multiforme. En ajoutant à la Carte les informations sur l'utilisation d'eau et l'irrigation, que nous comptons mettre en données, nous espérons saisir plus facilement les relations entre les noms de lieux, la répartition des biens culturels, l'utilisation d'eau et l'irrigation et la topographie.

Dans ce premier chapitre, j'ai parlé de l'état actuel des travaux de mise en données du rapport de Tashibu-no-shô. Dans le prochain, je voudrais faire quelques brèves réflexions sur les données géographiques présentées dans la section 2 de ce chapitre, pour montrer certains aspects de l'efficacité de la mise en données et des analyses d'informations par le moyen du SIG.



[Carte 1] Les limites des *koaza* et la répartition des temples, sanctuaires, châteaux et biens culturels en pierre dans le quartier de Tashibu-fuki

Cette carte est basée sur la carte standard fournie par l'Autorité japonaise d'information géospatiale et sur les informations géographiques décrites sur les cartes annexes 1 et 2 dans le deuxième tome de la "Recherche sur Tashibu-no-shô de la province de Bungo".

2. Suivre les traces du développement médiéval à travers la répartition des biens culturels et les noms des lieux

Dans ce chapitre, tout en utilisant les données électroniques mentionnées dans la deuxième section du chapitre précédent, nous voudrions reprendre le processus de développement de Itonaga-myô⁽³⁾, un *betsu-myô*⁽⁴⁾ de Tashibu-no-shô, afin de montrer une

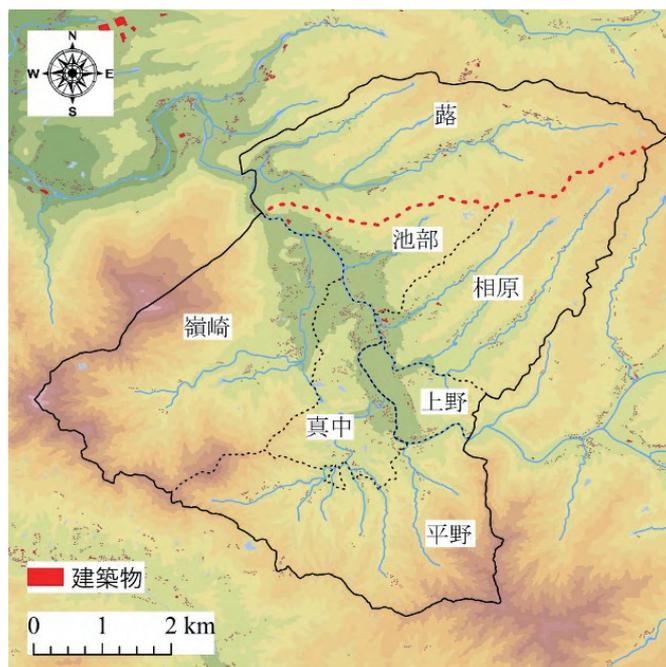
⁽³⁾ Le *Myô* était une unité de perception des impôts dans les territoires des bureaux politiques de provinces et les *shôen* des périodes Heian et médiévale.

⁽⁴⁾ Le *Betsu-myô* est une forme de système foncier établi à la fin de la période Heian.

partie de son utilité.

2.1. Localisation de Itonaga-myô

Avant d'aborder le processus de développement de Itonaga-myô, nous donnons un aperçu géographique de Tashibu-no-shô. La Carte 2 montre l'ensemble du bassin de Tashibu et la répartition des constructions modernes. La ligne noire représente la zone de Tashibu-no-shô et la ligne pointillée rouge représente la crête qui sépare Fuki-ji du bassin de Tashibu, comme décrit ci-dessous. La première chose qui frappe quand on regarde Tashibu-no-shô depuis le ciel, c'est que le bassin de Tashibu et les villages dispersés dans les vallées formées par l'érosion des montagnes environnantes font un espace continu. En ce qui concerne l'architecture, on voit bien que les constructions sont réparties le long des différentes rivières à partir de Tashibu-manaka, le centre du bassin. Si on regarde vers le nord-est, on trouve des espaces dans la vallée qui n'ont pas une telle continuité. C'est cette zone-là qui est l'actuel Tashibu-Fuki (le village de Fuki du début de l'époque moderne) où se trouve le trésor national du temple Fukiji, et c'est le cœur de la zone de Itonaga-myô en question dans ce chapitre.



[Carte 2] Schéma de la topographie et de la distribution des constructions dans la région de Tashibu

Cette carte a été établie en utilisant des données foncières nationales pour les réseaux fluviaux et des informations de la carte de base en ce qui concerne les altitudes et les constructions (ces données et des informations sont fournies par l'Autorité japonaise d'information géospatiale). Les *ôaza* (les grands *aza*) sont basés sur la carte annexe 1 de la "Recherche sur Tashibu-no-shô de la province de Bungo". La ligne pointillée rouge marque la limite entre le bassin de Tashibu et Fuki. Le bassin de Tashibu qui est la base de Tashibu-no-shô comprend Ikebe, Minesaki, Aihara, Ueno, Manaka et Hirano, tandis que Fuki est topographiquement séparé du bassin.

La spécificité du village de Fuki dans l'ancien Tashibu-no-shô ne réside pas seulement dans son emplacement que l'on peut lire sur la carte. Par exemple, au début de l'époque moderne, tous les villages de l'ancien Tashibu-no-shô appartenaient à un même seigneur, et d'après un rapport statistique *Shôhō Gôchō*⁽⁵⁾, le village de Fuki faisait partie de Tashibu-no-shô, mais pas du groupe de villages "Tashibu-*gumi* (ou *-kumi*⁽⁶⁾)" contrôlé par un chef d'administrateur *Ôshôya*, tandis que la plupart des villages de l'ancien Tashibu-no-shô s'affiliaient à ce groupe. En outre, chaque village sauf Fuki possède son propre sanctuaire shintô consacré à la divinité Hachiman, soit le sanctuaire Motomiya Hachimangu, le Ninomiya Hachimangu ou le Sannomiya Hachimangu, dans lesquels les divinités tutélaires des terres sont vénérées. Ainsi, le village de Fuki occupe une position particulière dans l'ancien Tashibu-no-shô. On estime que l'origine de ce caractère unique remonte au développement historique du Tashibu-no-shô et de Itonaga-*myô*. Dans ce qui suit, en nous appuyant sur les recherches précédentes, nous voudrions confirmer le processus de formation de ces terres.

Tashibu-no-shô était à l'origine Tashibu-no-*gô* mentionné dans le dictionnaire du milieu de l'ère Heian, "*Wamyô ruijushō*". Il n'existe aucun document historique parlant de ce qu'était Tashibu-no-*gô*. Cependant, les découvertes archéologiques montrent qu'il existe des traces de la vie des peuples Jomon, Yayoi et Kofun dans le bassin, et au 8ème siècle où le *gô* (subdivision administrative de l'époque ancienne) semble être formé, la division des terres *jôri* fut effectué sur le même plan dans les zones actuelles de Ikebe et de Ueno, ce qui suggère qu'un système d'irrigation utilisant deux déversoirs était déjà établi dans les temps anciens. Plus tard, dans la première moitié du 11ème siècle, Tashibu-no-shô fut établi sur le territoire de Usa Jingu, et Tahara-*beppu*⁽⁷⁾ en amont de la rivière Katsura-gawa. Il est à présumer que cette zone était le centre de Tashibu-no-shô du moyen âge, au vu de la division des terres mentionnée plus haut et de la présence de son propre sanctuaire Motomiya Hachimangu. À la lumière de ce qui précède, "*Bungo no kuni Ôtabumi*", un registre foncier de la province de Bungo en 1285 (la 8ème année de l'ère Koan), indique qu'il y avait, parmi les "quelque 90 *chô*⁽⁸⁾ de Tashibu-no-*gô*", "42 *chô* de Hongô", "21 *chô* de Yoshimaru-*myô*" et "30 *chô* de Itonaga-*myô*". C'est-à-dire que Tashibu-no-shô se composait de trois unités territoriales, Hongô, Yoshimaru-*myô* et Itonaga-*myô*. Parmi celles-ci, Hongô est naturellement considéré comme la partie centrale depuis les temps anciens. La localisation de Yoshimaru-*myô* n'est pas toujours claire, et Itonaga-*myô* est considéré comme l'actuel district de Fuki d'après les noms de lieux existants.

Si vous partez du bassin de Tashibu pour aller à Fuki en suivant la Katsura-gawa, vous voyez sur les deux côtés les crêtes surplombantes des chaînes de Mt. Saïei et de Mt. Futago.

⁽⁵⁾ Le *Shôhō Gôchō* est un rapport statistique sur les noms et la capacité de production des villages pendant l'ère Shôhō, au milieu du 17e siècle.

⁽⁶⁾ Le *kumi* est un groupe fonctionnel dans les plus petites zones des villages japonais.

⁽⁷⁾ Le *beppu* est un nom régional selon le système foncier en vigueur à la fin des périodes Heian et Kamakura.

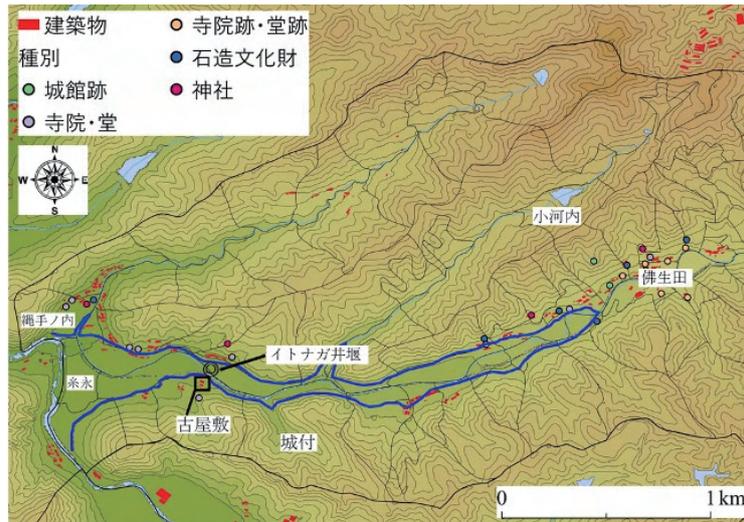
⁽⁸⁾ Le *chô* (町) est à la fois mesure de longueur et de surface. (Dictionnaire historique du Japon [https://www.persee.fr])

Après avoir passé cette zone rétrécissante, vous êtes à Fuki, vous avez là une petite plaine de *Koaza-Itonaga* dans le district de Fuki. Sur la rivière Fuki-gawa, qui traverse Fuki-tani, le déversoir de Itonaga est construit et la zone d'irrigation de ce déversoir est considérée comme le centre de *Itonaga-myô*. [Carte 3]

Itonaga-myô apparaît pour la première fois dans le document historique “*Kanpaku Fujiwara Motosane ke mandokoro-kudashi-bumi*” daté de mai, en 1165, la troisième année de Chokan, et on peut confirmer qu’il appartenait alors à Tashibu-no-shô. De plus, dans le document “*Daigûji Usa Kimitaka kippu-an*” en 1245, le nom de “*Itonaga hôji* (administrateur d’un *ho*)” est mentionné. Dans le système foncier médiéval, l’unité administrative territoriale, le *ho*, était établi par le gouverneur de la province (*kokushu*) de sa propre initiative, ou en acceptant les demandes et les requêtes des fonctionnaires. Quant à l’unité de développement, le *betsu-myô*, on estime qu’elle a été mise au point par les fonctionnaires locaux autour du 12^{ème} siècle et incorporée dans Tashibu-no-shô. Selon IDETA Kazuhisa, la superficie des terres arables dans le village de Fuki du début de l’époque moderne était de 24 *chô*, alors que celle de *Itonaga-myô* était de 30 *chô*, ce qui suggère qu’elle comprenait des terres arables d’autres régions. De fait, dans le document historique “*Tashibu-no-shô Itonaga-myô sô-chôan*” en 1344, on trouve les noms de lieux liés à *Itonaga-myô* à *ôaza-Yokominé*, à Hirano, à Ikebe, etc. En outre, INOUE Satoshi suppose que *Itonaga-myô* était dans le domaine du clan Masunaga de *Usa-no-miya mandokoro so-kengyô* (chef d’administration), et remarque que ce domaine *Itonaga-myô* se trouvait non seulement dans Tashibu-no-shô mais aussi dans les districts de la province de Buzen tels que *Tsuiki-gun*⁽⁹⁾, *Koügé-gun*, *Shimogé-gun* et *Usa-gun*. Il existait au-delà des frontières des provinces et districts.

À la lumière de ce qui précède, la grandeur de *Itonaga-myô* à Fuki-tani dans le Tashibu-no-shô ne dépasse pas de 30 *chô*, et *Koaza-Itonaga* est commodément situé à l’entrée de la vallée et près de la Katsura-gawa, ce qui est considéré comme une position appropriée pour le seigneur afin de gérer une terre large et dispersée. D’autre part, au 15^{ème} siècle, le centre de Fuki-tani s’est déplacé vers la partie centrale de la vallée (*Koaza-Mandokoro*) adjacente au temple Fukiji. Jusqu’à présent, il n’y a pas eu de recherches pour ce déplacement du centre du début à la fin de la période médiévale et pour en évaluer ses conséquences. Dans la section suivante, nous allons explorer le processus de développement de *Itonaga-myô*.

⁽⁹⁾ *Gun* (郡) : District, subdivision administrative de l’époque ancienne, intermédiaire entre la province (*kuni* 国) et le canton (*ri* 里). (Dictionnaire historique du Japon [https://www.persee.fr])



Carte 3 : Étendue de la plaine inondable et répartition des constructions modernes le long de la rivière Fuki-gawa.

La ligne bleue montre l'étendue de la plaine inondable de la Fuki-gawa. Dans cette zone, il n'y a ni sites historiques ni temples ni sanctuaires, et on trouve peu de maisons.

2.2. Processus de développement de Itonaga-myô

Généralement, on explique que dans les villages médiévaux, les habitations étaient dispersées au début de la période et concentrées à la fin, et que la plupart des villages modernes ont été formés aux 14^{ème} et 15^{ème} siècles. D'après les derniers résultats des recherches, une sécheresse avec haute température et faible pluie au milieu du 10^{ème} siècle a dévasté les terres arables dans tout le pays, et les 11^{ème} et 12^{ème} siècles ont été une période de redéfrichement des terres. Étant donné que l'utilisation plus libre des terres dans des zones nouvellement repeuplées favorisait un habitat dispersé, nous pouvons dire que la forme du village au début du Moyen Âge était en accord avec la situation de l'époque. En revanche, on remarque qu'à la fin de la période médiévale où les terres disponibles pour le développement étaient saturées, les habitations étaient concentrées sur certaines zones du village pour l'efficacité de la gestion des terres arables, et aussi pour assurer la sécurité pendant la guerre civile entre les dynasties du Nord et du Sud.

D'autre part, il y a peu de villages avec habitations concentrées comme le cas de Daïson dans Osaki à Tashibu-no-shô, et les villages ont jusqu'à aujourd'hui tendance à avoir des maisons dispersées à l'intérieur du *ôaza*. Il en est de même pour Fuki, qui fait l'objet de ce chapitre. Les innombrables traces de canaux fluviaux sur les photographies aériennes de Fuki prises avant le développement des champs modernes montrent que les terres étaient cultivées de façon très réglementée. La Carte 3 est une topographique montrant la distribution des constructions modernes et des sites historiques à Fuki-tani (voir cette carte ci-dessous). La ligne bleue indique la plaine inondable, qui est toujours utilisée comme rizière. Les constructions et les sites historiques sont répartis de manière à éviter la plaine inondable, et la répartition des

sites historiques est concentrée le long de la rive droite de la rivière, de *Koaza-Itonaga* à *Koaza-Futsuikuta* où se trouve le temple Fukiji. Ce phénomène s'explique probablement par le fait que l'état de l'érosion du terrain sur la rive droite du fleuve diffère de celle de la rive gauche, et que la rive droite, relativement plus érodée, est en pente plus douce et plus large. Cela signifie que la Fuki-gawa a été souvent inondée et a modifié son cours, et que la zone d'habitation humaine dans la région était limitée. À Fuki-tani, il y avait peu de terrains plats utilisables pour former des villages sans risque d'inondation, et les habitants ont été obligés d'installer leurs maisons de manière dispersée entre les plaines inondables et le pied des montagnes afin d'utiliser au mieux le peu de terres disponibles pour les rizières.

À la lumière de cet environnement résidentiel, nous voudrions examiner le processus de développement de *Itonaga-myô*. Comme nous l'avons déjà mentionné, le centre de *Itonaga-myô* était *Koaza-Itonaga* sur la plaine à l'entrée de Fuki-tani, en bordure de la *Katsura-gawa*. Cependant, *Itonaga* est incontestablement situé sur une plaine inondable, et donc cette terre ne pouvait convenir aux "seigneurs" de l'époque pour en faire leur base de développement. Nous voulons rappeler le travail de M. IDETA, qui a montré sur une carte la répartition des noms de lieux "Yashiki" et des biens culturels en pierre médiévaux à *Tashibu-no-shô*, et a estimé l'emplacement approximatif des villages médiévaux en fonction de la densité des habitations. Si nous prenons en compte les recherches de M. IDETA, nous pouvons dire que les endroits où apparaît le nom de Yashiki ou qui ont une concentration de biens culturels médiévaux en pierre méritent d'être considérés comme des candidats pour identifier la base du développement de *Itonaga-myô*.

Aux alentours de *Koaza-Itonaga* il y a deux endroits qui ont le toponyme de Yashiki ou une concentration de biens culturels médiévaux en pierre. L'un se trouve à proximité du village de *Yamashita*, dans *Koaza-Nawate-no-uchi*. Ce site abrite également le temple *Kiyotakiji*, l'un des temples *Rokugozan*, et un groupe de pagodes médiévales à cinq anneaux, *Gorintô*. Par le nom de *Nawate-no-uchi* qui signifie "à l'intérieur du digue naturelle", on peut penser que l'endroit est approprié pour l'habitation humaine, et dire avec certitude qu'il a été habité depuis son développement. Les rivières qui traversaient cette zone étaient plus petites que la *Fuki-gawa*, et leur débit était probablement bon à l'usage quotidien des habitants. Par contre, ce n'est qu'au début de la période moderne qu'un réservoir a été construit et développé dans la vallée de *Mobara-dani*, au nord de la rivière, et on considère qu'à l'époque médiévale cet endroit n'avait pas de grand potentiel de développement en tant que village devant supporter une population croissante. L'autre site candidat est la zone autour de *Koaza-Furuyashiki*. La plaine se rétrécit progressivement de *Koaza-Itonaga* à *Koaza-Shirotsuki*. *Koaza-Furuyashiki* se situe juste avant la partie la plus étroite. *Koaza-Shirotsuki* est située dans la partie étroite de la *Fuki-gawa*, là où la plaine s'étend à nouveau peu après le rétrécissement. C'est donc une bonne base pour le développement de la partie centrale de Fuki-tani, qui accueillera le siège du gouvernement au 15^{ème} siècle.

Ici, nous voudrions porter notre attention sur le déversoir de Itonaga, qui sert de prise d'eau pour l'irrigation du centre de Itonaga-*myô*. La localisation à *Koaza-Furuyashiki* de ce déversoir est peu connue. En 2021, il n'y a plus que deux maisons à Furuyashiki, et les terres arables de la vallée, que l'on peut voir sur les photographies aériennes prises dans les années 1970, ont été abandonnées et ne rappellent plus rien de leur histoire. Sur une carte des *koaza*, établie en 1889 et détenue par le Bureau des affaires juridiques de la ville de Bungo-Takada, on peut remarquer qu'une parcelle de "terrain de sanctuaire" et six parcelles de "terrain résidentiel" sont inscrites dans une zone plate appelée Furuyashiki. Cette terre est sur une terrasse fluviale au pied de la montagne où aujourd'hui encore on peut voir des maisons au milieu des rizières, des champs et des forêts. Cela suggère que ce lieu constituait autrefois un hameau. Compte tenu du fait que le nom de *koaza* est Furuyashiki, malgré l'existence d'un hameau à l'époque moderne, il est naturel de supposer qu'il y avait quelque chose de plus ancien. Le déversoir de Itonaga se trouve juste en bas de la terrasse de ce hameau. Il est donc possible de dire que *Koaza-Furuyashiki* était le lieu approprié pour que les aménageurs fonciers médiévaux puissent établir leur base tout en assurant l'approvisionnement en eau. Cet endroit convenait aussi comme tête de pont afin de promouvoir le développement de l'embouchure vers l'intérieur de la vallée, ce qui permet donc de supposer que *Koaza-Furuyashiki* était la base lors du développement de Itonaga-*myô*.

Nous avons exploré l'emplacement du développement de Itonaga-*myô* au début de l'époque médiévale et considéré que le terrain plat au pied de la montagne, Furuyashiki, à proximité du déversoir de Itonaga, en était la base appropriée à un certain moment de l'époque médiévale. En outre, il est important d'examiner les raisons pour lesquelles le centre de Itonaga-*myô* s'est déplacé vers le cœur de Fuki-tani. Actuellement, les eaux d'irrigation du déversoir de Itonaga proviennent de l'étang de Ogawaüchi, à *Koaza-Ogawaüchi*. C'est TANABE Koichi, haute personnalité du village de Fuki, qui a fait construire l'étang en 1905, la 37ème année de l'ère Meiji, pour résoudre le problème du manque d'eau. Grâce à cette construction, l'approvisionnement en eau pour des rizières situées en aval a été stabilisé et de nouvelles rizières ont été créées. Il est bien connu que Tashibu-no-shô a souffert d'un manque d'eau à cause de faibles pluies et que des réservoirs ont été fréquemment aménagés. L'épisode de la construction de réservoirs pendant la période Meiji suggère que la région autour de Itonaga, qui était l'extrémité de la Fuki-gawa, a également souffert d'un manque d'eau chronique. De plus, la culture de nouvelles rizières montre que la population a augmenté par rapport à l'époque médiévale, et on peut entrevoir les circonstances particulières de cette période où l'on avait besoin de plus de nourriture et d'eau.

Avec le manque d'eau à l'extrémité du cours de la Fuki-gawa, Itonaga-*myô*, installé dans la plaine en aval au début de l'époque médiévale, s'est développé en direction du Fuki-tani, mais ce nouveau développement en amont a eu pour conséquence de priver les terres en aval d'eau. Compte tenu de cette situation, on peut bien supposer que le centre de Itonaga-*myô* s'est

déplacé vers la zone centrale de Fuki-tani où l'approvisionnement en eau était plus facile. En outre, on peut émettre une autre hypothèse pour ce déplacement ainsi : étant donné la technologie médiévale inadaptée à la lutte contre les inondations, notamment la construction de digues, s'il y a fréquemment le risque de débordement de la Katsura-gawa, il est plus rationnel d'aller développer la terre en amont qui ne serait pas touchée par l'eau, plutôt que de réaménager des terres arables. Quoi qu'il en soit, il est clair que les mesures pour les problèmes d'eau diffèrent entre le haut moyen-âge et la période post-moderne, et qu'il faudrait continuer à examiner la question en tenant compte à la fois des changements dans les conditions de vie humaine et ceux de l'environnement mondial, tels que le réchauffement de la planète et le refroidissement de la planète.

Conclusion

Dans cet article, nous avons suggéré qu'il faudrait retourner au cas de Tashibu-no-shô, le point de départ des recherches en cours sur le *shôen*, afin d'explorer les pistes de recherche et d'étude à venir. Nous avons aussi présenté une étude de cas sur la mise en données des documents et leur utilisation, actuellement promue dans le but d'améliorer l'environnement de recherche. Cet article est juste un rapport intermédiaire sur l'avancement des travaux, et nous espérons systématiser les résultats dans un autre à l'avenir.

Les études individuelles basées sur les recherches traditionnelles sur les *shôen* s'appuient souvent sur l'expérience acquise au cours de la recherche. Cependant, avec la participation d'un chercheur en géographie naturelle, SAITOH coauteur, nous pensons avoir pu réaliser une étude approfondie et convaincante en appliquant sur les analyses historico-géographiques traditionnelles de nouvelles méthodes d'analyse à l'aide des données topographiques et de la cartographie. Ce qui motive la recherche de *shôen* est en général la présence de ses sites historiques, et ce sont les chercheurs en histoire médiévale qui prennent initiative de faire la recherche dans la majorité des cas. Il existe un nombre considérable de sites de *shôen* dans le pays, mais seule une poignée d'entre eux sont documentés. Il est nécessaire pour les chercheurs en histoire médiévale de montrer tout ce qui peut être révélé par les sources documentaires, et de recourir à la coopération de chercheurs dans d'autres domaines afin de saisir les aspects de l'histoire qui ne peuvent pas être découverts uniquement dans les sources historiques. La recherche conjointe de l'Institut de la Terre sur le changement climatique de ces derniers temps en est un bon exemple. En ce qui concerne l'étude des *shôen* à travers des recherches, il est nécessaire, en collaboration avec des géographes naturels qui maîtrisent le fonctionnement des SIG et ont déjà un large éventail de méthodes d'analyse, d'utiliser les résultats des recherches passées, d'affiner les techniques d'extraction des mémoires du passé inscrites sur les terres, et d'établir de nouvelles méthodologies. Nous continuerons à chercher à exploiter les résultats de notre travail à Tashibu-no-shô et essaierons aussi d'ouvrir de nouveaux terrains de recherche.

ローマ帝国における街道と統治行政

——街道監督官 (curator viarum) によるアリメンタ制度の管理を中心に——

飯坂 晃治 (別府大学)

はじめに

ローマ帝国の統治構造は、一般的に次のように説明される。ローマ帝国は地中海沿岸一帯を支配する巨大な帝国を築いたが、元首政期にはその広大な領土を統治するための官僚機構は発達しなかった。元老院議員身分と騎士身分から選任された帝国官僚は 300 名におよばず、各属州にも数名が派遣されたのみであった。こうした官僚機構に代わり、ローマ帝国の統治業務を担ったのは都市であった。都市では都市参事会を中心に自治がおこなわれ、都市参事会員 (decuriones) に徴税などの統治業務が委ねられたのである。

したがって、ローマ帝国の統治行政を考える際、皇帝と都市とがいかにしてコミュニケーションを取り合ったのが問題となってくるが、そこで重要な役割を果たしたのがローマ帝国に張りめぐらされた街道網である。ローマの街道は共和政期には軍隊の移動のために建設されたが、アウグストゥスが帝政を打ち立ててからは、街道は中央と地方を結ぶ役割を果たすようになった。そのため帝政前期の諸皇帝は、既存の街道の維持管理や新たな街道の建設に力を入れた。またローマ帝国では、属州からの情報伝達や官僚の旅行、軍隊への補給物資の輸送などのために、公共輸送制度 (vehiculatio / cursus publicus) が整備されたが、この制度も帝国の街道網を前提としたものであった。

本稿の目的は、ローマ帝国の統治行政が街道を通じてどのようにおこなわれたのかを分析し、街道の歴史的意義について考察することにある。その際に注目されるのは、街道の維持管理や建設にあたった街道監督官 (curator viarum) である。この帝国官僚が任地においてどのような活動をおこなったのかを分析することで、ローマ帝国の統治行政における街道の役割がより一層明確になるであろう。本稿ではとくに、街道監督官によるアリメンタ制度の管理に注目してゆくが、その際、考察の対象は同制度が大規模に実施されたイタリアに限定する。

I. 街道監督官による統治業務

前 20 年、アウグストゥスは元老院決議により街道の監督を引き受け、街道監督官 (curator viarum) を任命した。この創設当初の街道監督官は同僚団 (collegium) を形成し (何名で構成されたのかは不明だが、エックは 2～8 名と考える)、その同僚団でイタリアの街道全体を管理していたと考えられている。しかし、この同僚制はおそらくクラウディウス帝治世に廃止され、それぞれの街道監督官に担当の街道が割り当てられる方式がとられた。遅くともネロ帝ないしウェスパシヤヌス帝治世以降は、7～8 名の監督官が各街道に任命された。その

際、任命権者は皇帝であった [Eck (1992/1995)]。

カッシウス・ディオによれば、すでにアウグストゥスのときから、街道監督官は法務官級の元老院議員から任命されていたという (Cass. Dio, 54, 8, 4)。街道監督官に関する碑文史料はその大部分がフラウィウス朝期以降のものであるが、そこから街道監督官就任者の昇進階梯を分析すると、カッシウス・ディオのこの記述のとおり、街道監督官の大部分は法務官級の元老院議員であることがわかる [Eck (1979/1999), p. 50]。

では、街道監督官の任務を関連史料から確認してゆきたい。第一に挙げられるのは、街道の維持管理である。洪水などの自然災害が起こったり、橋が崩壊したりした時に、街道監督官は自らの担当する街道が通行可能な状態にあるかどうかの情報をいち早く入手しなければならなかった。その際、公共輸送制度の運用に責任をもつ公共輸送長官 (praefectus vehiculorum) などとの協力関係があったとも考えられている [Eck (1979/1999), 57f.]。維持管理のための費用は、皇帝やサトゥルヌス金庫 (aerarium Saturni) だけではなく、街道沿いの諸都市も負担していた。街道の修繕費用を都市が負担する場合、その担当区間の決定に街道監督官が関与していたと推測されている [Eck (1979/1999), p. 62]。

次に挙げられるのは、新たな街道の建設に関わる業務である。新たな街道の建設に際しては、皇帝がおおよそその建設区間を決め、街道監督官が詳細部分の決定や都市および土地所有者との交渉などを担当した。街道が都市の公有地や個人の私有地に建設されることになった場合、街道監督官にはそれらの土地を収用する権限があったとも考えられている [Eck (1979/1999), p. 59]。

このように、街道監督官は街道の維持管理や建設などの業務に当たっていた。しかし、街道監督官はこうした業務以外の活動もおこなっていた。

『ローマ皇帝群像』(ヒストリア・アウグスタ)の「マルクス伝」は、街道監督官が職務遂行の範囲内で一定の司法権・警察権を持っていたことに言及している。

「(マルクスは——筆者補足) これらとならんで、首都の街区と街道の監督官に対して、規定の額を越えて金 (vectigal) を取り立てる者を処罰したり、あるいはそのために首都長官のもとへ送致したりする権限を与えた。」

(アエリウス・スパルティアヌス他、南川高志訳『ローマ皇帝群像1』京都大学学術出版会、2004年、162頁、一部飯坂改訳)

街道監督官に一定の司法権が与えられていたことは、水道監督官 (curator aquarum) との比較からも十分に考えられることである。なおエックによれば、ここで処罰の対象となっている「金を取り立てる者」は地方都市のアリメンタ担当官であった可能性があるという。というのも、ここで「金」と訳した vectigal という語句は、小プリニウスの書簡においてはアリメンタ制度において徴収される利子の意味で用いられているからである (Plin. Ep. 7, 18, 3) [Eck (1979/1999), p. 64]。

また、街道監督官が徴兵に携わった事例が知られている。ウァレリウス・ティブル街道監督官であったウォコニウス・サクサは、担当地域において徴兵にあたった (AE 1986, 686. “qui

et per eundem tractum dilectu[m e]git”）。この徴兵は、第2次ユダヤ戦争（132～136年）を背景としておこなわれたと考えられる [Eck (1979/1999), p. 67]。またカラカッラ帝治世の碑文も、ラビクム街道監督官による徴兵を示唆している (CIL X, 1259)。

街道監督官は、都市監督官 (curator rei publicae) を兼務することもあった。[---] クス・モデストゥス・パウリヌスは、ティブル・ウアレリウス街道およびアリメンタ監督官 (後述) を務めながら、同時にマルス・マッルウィウムの都市監督官にも就任している (CIL IX, 3667)。都市監督官は地方都市の財政を監督する帝国官僚で、その数は2世紀以降に増加した。都市監督官は、任地の都市からしばしばパトロンに任命され、都市の自治に貢献していた [飯坂 (2014), pp. 43-89]。

マルクス・アウレリウス帝治世末期の176年に出された「剣闘士競技開催費用減免に関する元老院決議」には、剣闘士競技の開催費用の監督者として街道監督官が挙げられている (FIRA I, No. 49 = CIL II, 6278)。ローマ帝国の地方都市では、祝祭などの際に地方エリートが剣闘士競技の開催を自費で引き受けていたが、当時、剣闘士を養成して競技に提供する興行師 (lanista) に支払う費用が高額になっていた。この元老院決議は、全帝国において剣闘士競技の開催費用の上限を定め、競技を催す地方エリートの負担を軽減するために出されたものである。

この元老院決議の42行目から44行目には、次のように述べられている。

「しかし、ポー川の向こう側とイタリアの全地域 (omnes Italiae regiones) では、(剣闘士競技の興行師 (lanista) が価格制限を守るように監督する) 権限は、もし駐在しているなら、アリメンタ長官 (praefectus alimentorum) か街道監督官 (curator viarum) に付与されるべきであり、あるいは街道監督官がいなければ、地方裁判官 (iuridicus) かさらには艦隊司令官 (praefectus classis) に付与されるべきである。」

この史料では、イタリアで剣闘士競技の価格制限を監督する官僚として、アリメンタ長官とともに街道監督官が挙げられている。なおここでは、地方裁判官や艦隊司令官も監督者とされているが、アリメンタ長官と街道監督官が先に指名されていることから、これらの官僚に優先的に監督権が付与されていたと考えられる [飯坂 (2014), pp. 110-111]。

以上みてきたように、街道監督官は街道の維持・管理以外にも、帝国の統治行政に関するさまざまな業務に関与していた。少なくとも2世紀前半までは、イタリアで地方行政に関わることができた帝国官僚は街道監督官のみであった。したがってイタリアでは、街道を基軸とした統治行政がおこなわれたことになる。ここに、ローマ帝国の統治行政における街道と街道監督官の重要性がみてとれる。そして、街道監督官による統治業務のなかでも最も重要であったと考えられるのは、アリメンタ制度 (子弟養育制度) に関するものである。そこで次に、アリメンタ制度について考察してゆきたい。

II. 街道監督官とアリメンタ制度

アリメンタ制度とは子供の養育のために義捐金を給付する制度である。皇帝や地方エリー

トなどの富裕者がイタリアの地方都市において基金を設定すると、そこからその都市の土地所有者に資金が貸与された。そして、彼らが毎年支払う利子が、その都市に住む少年・少女に手当（義捐金）として支給された。

本稿で取り上げるのは、皇帝の出資によるアリメンタ制度である。アリメンタ制度の実施はネルウァ帝治世から確認できるが [Pagé, (2012), pp. 11-49]、それが普及したのはトラヤヌス帝治世のことである（したがって、同帝によるアリメンタ制度の実施に関する研究が多い）。また文献史料や碑文史料から、トラヤヌス帝に続く2世紀の諸皇帝のもとでアリメンタ制度が拡充されたことも知られている。碑文史料から50以上のイタリア都市でアリメンタ制度が実施されていたことが確認できるが、どの程度諸皇帝がこの制度を普及させようとしていたのか、またどのような基準で同制度を実施する都市が選別されたのかなどに関しては不明である。

おそらくアリメンタ制度の開始当初から、同制度が各都市において適正に運用されているかどうかを監督するために、アリメンタ長官 (praefectus alimentorum) が元老院議員のなかから任命された。また碑文史料から、騎士身分のアリメンタ担当プロクラトル (procurator alimentorum) の存在も確認できる。このプロクラトルは、すでに元老院議員のアリメンタ長官がいる地域ではその職務遂行のサポートをおこない、ポー川以北などアリメンタ長官の存在が史料上確認されない地域では、アリメンタ長官と同様の職務を遂行していたと思われる [Eck (1979/1999), pp. 176-180]。

このアリメンタ長官（およびアリメンタ担当プロクラトル）の任務として、まずアリメンタ基金の設定があった。次に、基金設定後の通常業務として、アリメンタ制度の運用の監督があった。すなわちアリメンタ長官は、アリメンタ担当の都市公職者 (quaestor alimentorum) が、基金から貸し付けをうけた土地所有者から利子を徴収し、それを受給資格のある子供たちに支給するのを監督していたのである。またそうした監督業務のために、アリメンタ長官は街道監督官などと同様に、一定範囲内の司法権を持っていたと推測されている [Eck (1979/1999), pp. 180-185]。

注目すべきは、前節で取り上げた街道監督官がアリメンタ長官を兼務する事例が多かったという事実である。例えばT・カエセルニウス・スタティウス・クインクティウス・マケド・クインクティアヌス（138年頃）はふたつの碑文において、「アッピア街道監督官、[アリメンタ長官]」（curator viae Appiae, p[raefectus alimentorum]）および「アッピア街道およびアリメンタ監督官」（curator viae Appiae et alimentorum）と記されている (ILS, 1069; AE 1957, 135)。このように街道監督官がアリメンタ長官を兼務する事例は3世紀半ばまでみられる。ここから街道監督官職はしばしばアリメンタ長官職と結びつけられており、アリメンタ制度の管轄区域が街道網と対応関係にあることが見て取れる [Eck (1979/1999), pp. 169-176]。

このように、地方都市で実施されたアリメンタ制度の運用は、その地域を担当区域とする街道監督官によって監督されることが多かった。その理由として、（少なくとも2世紀前半までは）イタリアで地方行政に関わる帝国官僚が街道監督官のみであったことが挙げられる [Faoro, D. (a cura di) (2018), p. 122]。街道監督官は、その任務を遂行する際に、土地（公有地および私有地）に関わる業務が多かったと思われるが、アリメンタ制度が土地を担保と

した貸付により運営されていたことに鑑みれば、同制度の監督者として適任であっただろう。

ところで、アリメンタ制度に関する研究において問題とされてきたのは、同制度の目的である。従来の研究では、アリメンタ制度の目的は、第一に子供たちの保護育成をとおしてイタリアの人口減少に歯止めをかけることにあったと考えられてきた。また、このアリメンタ基金から土地を担保に低利率で資金が貸与されたことから、農民に対する財政的な援助という目的があったとする研究者もいる〔研究史に関しては、Duncan-Jones (1974/1982), pp. 294-300〕。

しかし、1989年のBossuの研究は、アリメンタ制度を人口政策とする見解や農業振興策とする見解を再検討し、この制度に何らかの合理性や実利性を求めようとする研究者の姿勢を批判した。そして、アリメンタ制度とは皇帝の「寛大さ」が示される舞台であったと指摘した〔Bossu (1989)〕。そして、1990年のWoolfの研究は、(1)アリメンタ制度の受給者は貧困家庭の子弟ではなかったということと、(2)アリメンタ制度は皇帝にとってその富と気前の良さをアピールする場であり、アリメンタ制度は皇帝の善行として宣伝されたのだということの2点を指摘した〔Woolf (1990)〕。

Woolfが示した2つの論点のうち、前者に関してはWierschowskiが再反論を試みた。彼は、アリメンタ制度において基金からの借入者は受給者となることはなく、受給者はやはり経済的弱者であったと主張した。ただし、受給者が経済的な弱者であったとしても、少なくとも市民権保有者であったことは一般に認められるところであり、彼もこの点はアリメンタ制度の限界として認めている〔Wierschowski (1998)〕。

Woolfの2つ目の論点に関しては、JongmanとSeelentagがさらに詳しく論じた。Jongmanは、とくにトラヤヌス帝がアリメンタ制度をつうじて寛大で慈悲深い市民の「父」という自己イメージをアピールしたのだという点を協調した〔Jongman (2002)〕。Seelentagはトラヤヌス帝の権力のさまざまな表象とアリメンタ制度との関係を論じ、とくに「イタリアへの配慮」(cura Italiae)という表現の重要性に注目した〔Seelentag (2008)〕。これら一連の論考に代表される近年の研究では、アリメンタ制度を皇帝のイデオロギーの側面から理解しようとする傾向が強いように思われる。

アリメンタ制度が皇帝のイデオロギーの発露であったということは、確かに事実であろう。ここで重要なのは、街道を基軸とした統治システムのもと、アリメンタ制度が運用され、皇帝の自己アピールが可能になったということである。

おわりに

帝政前期のイタリアには街道網が張りめぐらされ、街道監督官がその街道の維持管理にあっていた。しかし街道監督官は、そうした本来の任務に加え、様々な行政活動に従事していた。このようにイタリアでは、街道を基軸として統治行政がおこなわれた。街道監督官の副次的な活動のなかでも最も重要だったのは、アリメンタ制度の管理であった。アリメンタ制度は、皇帝の出資により子供たちに手当を支給するものであったが、この事業をつうじて皇帝は寛大で慈悲深い市民の「父」という自己アピールをおこなった。皇帝によるこのようなイメージの発信は、街道を基軸とした統治システムを前提としたものであったといえよう。

参考文献

- Bossu, C. (1989), L'objectif de l'institution alimentaire: essai d'évaluation, *Latomus* 48, 372–382.
- Cao, I. (2010), *Alimenta, Il racconto delle fonti*, Padova.
- Duncan-Jones R. (1974/1982), *The Economy of the Roman Empire. Quantitative Studies*, Cambridge (2nd ed. 1982).
- Eck, W. (1979/1999), *L'Italia nell'impero romano: Stato e amministrazione in epoca imperiale*, Bari 1999 (=id., *Die staatliche Organisation Italiens in der Hohen Kaiserzeit*, München 1979).
- Eck, W. (1992/1995), Cura viarum und cura operum publicorum als collegiale Ämter im frühen Prinzipat, *Klio* 74, 1992, 237–245 (= id., *Die Verwaltung des Römischen Reiches in der Hohen Kaiserzeit*, Bd. 1, Basel / Berlin 1995, 281–293).
- Faoro, D. (a cura di) (2018), *L'amministrazione dell'Italia romana. Dal I secolo a. C. al III secolo D. C. Fondamenti*, Milano.
- Jongman, W. (2002), Beneficial Symbols. Alimenta and the Infantilization of Roman Citizen, in: W. Jongman / M. Kleijwegt (eds.), *After the Past. Essays in Ancient History in Honour of H. W. Pleket*, Leiden, 47–80.
- Lo Cascio, E. (1980/2000), *Curatores viarum, praefecti e procuratores alimentorum: a proposito dei distretti alimentari*, *Studi di Antichità. Quaderni dell'Ist. di Archeologia e Storia antica dell'Univ. di Lecce* 1, 1980, 237–245 (= id., *Il princeps e il suo impero. Studi di storia amministrativa e finanziaria romana*, Bari 2000, 285–291).
- Pagé, M.-M. (2012), *Empereurs et aristocrates bienfaiteurs. Autour de l'inauguration des alimenta dans le monde municipal italien. Fin I^{er} siècle – début IV^e siècle*, Laval.
- Seelentag, G. (2008), Der Kaiser als Fürsorger — die italische Alimentarinstitution, *Historia* 57, 208–241.
- Wierschowski, L. (1998), Die Alimentarinstitution Nervas und Trajans. Ein Programm für die Armen?, in: Kneißl, P. / Losemann, V. (hrsg.), *Imperium Romanum. Studien zu Geschichte und Rezeption — Festschrift für Karl Christ zum 75. Geburtstag*, Stuttgart, 756–783.
- Woolf, G. (1990), Food, Poverty and Patronage. The Significance of the Epigraphy of the Roman Alimentary Schemes in Early Imperial Italy, *PBSR* 58, 197–228.

飯坂晃治 (2014) 『ローマ帝国の統治構造 皇帝権力とイタリア都市』北海道大学出版会

坂口明 (1979) 「ローマのアリメンタ制度に関する諸問題」『西洋史研究』新輯 8、32–56 頁

島田誠 (2010) 「ローマ帝国における皇帝権力と地方都市 帝政前期のイタリアを事例として」『歴史学研究』872、149–157 頁

* 本稿は令和 2 年度科学研究費 (基盤研究(C)、課題番号 20K01050) による研究成果の一部である。

* 本稿のフランス語訳に際し、モンペリエ第三大学（ポール・ヴァレリー大学）のアントワヌ・ペレス准教授のご協力を賜った。深く感謝申し上げたい。



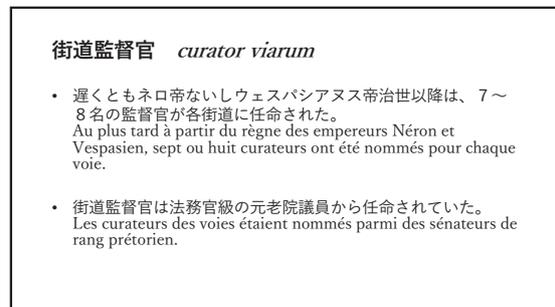
1



2



3



4

街道監督官の任務

Devoirs des *curatores viarum*

1. 街道の維持管理
Entretien des voies
2. 新たな街道の建設
Construction de nouvelles voies

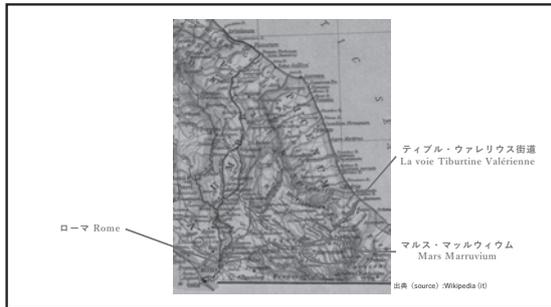
5

街道監督官の様々な活動

Différentes tâches des *curatores viarum*

1. 司法・警察活動 Activités judiciaires et policières
2. 徴兵 Conscriptio
3. 都市監督官の兼任 Cumul de la fonction de curateur de cité
4. 剣闘士競技の価格制限の監督
Supervision des limites des prix des jeux de gladiateurs
5. アリメンタ制度の監督 Supervision du système des *alimenta*

6



7

アリメンタ制度 Le système des *alimenta*

1. 皇帝や地方エリートなどの富裕者が基金を設定する
L'empereur ou les élites locales créaient des fonds.
2. 基金から土地所有者に資金が貸与される (地価の8%)
Les fonds étaient prêtés à des propriétaires fonciers (8% de la valeur du terrain)
3. 彼らが毎年支払う利息 (年5%) が、その都市に住む少年・少女に手当として支給される (毎月、男児16SH/女児12SH)
Les intérêts (5% par an) qu'ils versaient chaque année étaient ensuite utilisés pour fournir des prestations aux garçons et aux filles (Mensuel, 16SH pour les garçons / 12SH pour les filles)

8

アリメンタ制度が実施された イタリア都市

Les cités italiennes où les *alimenta* ont été mis en œuvre

碑文史料から50以上のイタリア都市でアリメンタ制度が実施されていたことが確認できる。

Les épitaphes confirment que plus de 50 cités italiennes disposaient d'*alimenta*.

特選出典: リチャード・J・A・ギルバート編 『古事類考』小田謙徳訳 『イタリア・ローマの歴史』 岩波書店、1996年 (原書1994年)、119頁



9

アリメンタ制度を担当する役人

Fonctionnaires en charge du système des *alimenta*

1. **アリメンタ長官 (*praefectus alimentorum*)**
アリメンタ制度が適正に運用されているかどうかを監督
Superviser le bon fonctionnement du système des *alimenta*
2. **アリメンタ担当プロクラトル (*procurator alimentorum*)**
アリメンタ長官と同様の職務を遂行
Exercer les mêmes fonctions que le *praefectus alimentorum*
3. **アリメンタ担当クアエトル (*quaestor alimentorum*)**
各都市で制度運用の実務を担当
Responsable de la mise en œuvre du système des *alimenta* dans chaque cité

10

アリメンタ長官の任務
Devoirs des *praefectus alimentorum*

1. アリメンタ基金の設定
Créer le fonds des *alimenta*
2. アリメンタ制度の運用の監督
Superviser la mise en œuvre du système des *alimenta*

* 街道監督官がアリメンタ長官を兼務するケースが多い
Dans de nombreux cas, les *curatores viarum* ont également fait office de *praefectus alimentorum*.

11

アリメンタ制度に関する近年の研究 (1)
Recherches récentes sur les *alimenta* (1)

1. Bossu はアリメンタ制度に何らかの合理性や実利性を求めようとする研究者を批判する。
Bossu a critiqué ceux qui ont cherché à attribuer une quelconque rationalité ou pragmatisme aux *alimenta*.
2. Woolf は、(1)アリメンタ制度の受給者は貧困家庭の子弟ではない、(2)アリメンタ制度で皇帝は気前のよさをアピールした、と指摘する。
Woolf a remarqué que (1) les bénéficiaires des *alimenta* n'étaient pas des enfants de familles pauvres, et (2) le système était un moyen pour l'empereur de montrer sa générosité.

12

アリメンタ制度に関する近年の研究 (2)
Recherches récentes sur les *alimenta* (2)

1. Wierschowski はアリメンタの受給者はやはり経済的弱者であったと主張する。
Wierschowski a fait valoir que les bénéficiaires des *alimenta* étaient toujours économiquement vulnérables.
2. Jongman と Seelentag はアリメンタ制度を皇帝のイデオロギーの側面から理解する。
Jongman et Seelentag ont essayé de comprendre le système des *alimenta* en terme d'idéologie impériale.

13

アリメンタ制度を描いたレリーフ
(ベネヴェント、トラヤヌスの凱旋門)
Un relief sur l'arc de Trajan à Bénévènt représentant les *alimenta*



14

Voies et administration dans l'Empire romain.

— L'administration du système des *alimenta* par le *curator viarum* —

IISAKA Koji (Université de Beppu)

Introduction

La structure de gouvernance de l'Empire romain peut être décrite en général comme suit. L'Empire romain était un immense empire, couvrant l'ensemble de la Méditerranée, mais durant le Principat, la bureaucratie n'était pas développée pour gouverner son vaste territoire. Le nombre de bureaucrates impériaux, élus parmi les sénateurs et les chevaliers, ne dépassait pas 300, et seuls quelques-uns étaient envoyés dans chaque province. À la place de cette bureaucratie, les cités étaient responsables de l'administration de l'Empire romain. Dans les cités, l'autonomie était centrée sur le conseil municipal, et ses membres (*decuriones*) étaient chargés de diverses tâches de gouvernance telles que la collecte des impôts.

Ainsi, lorsque nous pensons à l'administration de l'Empire romain, la question se pose de savoir comment l'empereur et les cités communiquaient entre eux et à ce sujet, c'est le réseau de voies romaines qui a joué un rôle important. À l'époque républicaine, les voies romaines étaient construites pour le déplacement des troupes, mais après l'instauration de l'Empire par Auguste, les voies ont commencé à jouer le rôle de liaison entre le centre et les provinces. Les empereurs du Haut-Empire se sont donc consacrés à l'entretien des voies existantes et à la construction de nouvelles voies. L'Empire romain a également développé un système de transport public (*vehiculatio / cursus publicus*) pour la transmission des informations en provenance des provinces, le déplacement des fonctionnaires et le transport des fournitures à l'armée, qui était également basé sur le réseau de voies romaines.

L'objectif de cet article est d'analyser comment l'administration de l'Empire romain était assurée par les voies, et de discuter de leur importance historique. L'accent est mis sur le curateur des voies (*curator viarum*), qui était responsable de l'entretien et de la construction des voies. Une analyse des tâches de cette bureaucratie impériale à leurs postes permettra de clarifier le rôle des voies dans l'administration de l'Empire romain. Dans cet article, j'accorderai une attention particulière à l'administration du système des *alimenta* par les curateurs des voies, mais je limiterai ma discussion à l'Italie, où le système a été mis en œuvre à grande échelle.

I. Administration par les *curatores viarum*

En 20 avant J.-C., Auguste a pris en charge la curatelle des voies par sénatus-consulte et a nommé des curateurs des voies (*curatores viarum*). Les premiers curateurs formaient un *collegium* (nous ne savons pas combien ils étaient, mais Eck pense qu'ils étaient entre deux et

huit), qui semble avoir été en charge de l'ensemble des voies italiennes. Cependant, cette collégialité a probablement été abolie sous le règne de l'empereur Claude, lorsque chaque curateur des voies était affecté à une voie particulière. Au plus tard à partir du règne des empereurs Néron et Vespasien, sept ou huit curateurs ont été nommés pour chaque voie. Ils étaient nommés par l'empereur [Eck (1992/1995)].

Selon Cassius Dio, déjà à l'époque d'Auguste, les curateurs des voies étaient nommés parmi des sénateurs de rang prétorien (Cass. Dio, 54, 8, 4). Les sources épigraphiques sur les curateurs des voies, dont la plupart datent de l'époque flavienne, montrent que la majorité des curateurs des voies étaient des sénateurs de rang prétorien, comme le décrit Cassius Dio [Eck (1979/1999), p. 50].

Examinons maintenant les devoirs des curateurs des voies sur la base des sources historiques. Tout d'abord, ils étaient responsables de l'entretien des voies. En cas de catastrophe naturelle telle qu'une inondation ou l'effondrement d'un pont, le curateur des voies devait être le premier à s'informer afin de savoir si la voie dont il avait la charge était praticable ou non. Cela a pu impliquer une coopération avec le préfet des transports publics (*praefectus vehiculorum*), qui était responsable de l'exploitation du système des transports publics [Eck (1979/1999), 57f.]. Les coûts d'entretien n'étaient pas seulement supportés par l'empereur et l'*aerarium Saturni*, mais aussi par les cités situées le long de la voie. Il a été supposé que, lorsque les cités étaient responsables de la réparation des voies, le curateur des voies participait à la décision sur les sections à couvrir [Eck (1979/1999), p. 62].

Ensuite, la construction de nouvelles voies. Lors de la construction de nouvelles voies, l'empereur décidait de la longueur approximative de la route, tandis que le curateur des voies était chargé de décider des détails et de négocier avec les cités et les propriétaires fonciers. Si la voie devait être construite sur un terrain public de la cité ou sur un terrain privé, le curateur des voies pouvait avoir le pouvoir d'exproprier le terrain [Eck (1979/1999), p. 59].

Ainsi, les curateurs des voies étaient chargés de l'entretien et de la construction des voies. Cependant, ils étaient également impliqués dans d'autres tâches administratives.

La biographie de Marc Aurèle dans l'*Historia Augusta* mentionne que les curateurs des voies avaient certains pouvoirs judiciaires et de police dans le cadre de leurs fonctions.

“And besides this, he (Mark Aurel) gave the commissioners of districts and streets power either themselves to punish those who fleeced anyone of money beyond his due assessment, or to bring them to the prefect of the city for punishment.” (SHA Marc. 11. 9. trans. D. Magie)

La comparaison des rôles du curateur des eaux (*curator aquarum*) avec ceux du curateur des voies permet de constater que ce dernier disposait d'un certain pouvoir juridictionnel. Selon Eck, il est possible que les “those who fleeced anyone of money” en

question soient des magistrats locaux des *alimenta*, puisque le mot “*vectigal*” (money) est utilisé dans la lettre de Pline le Jeune pour désigner les intérêts perçus dans le système des *alimenta* (Plin. *Ep.* 7, 18, 3) [Eck (1979/1999), p. 64].

Il existe également des cas connus de curateurs des voies impliqués dans la conscription. Voconius Saxa, *curator viae Valeriae Tiburtinae*, était chargé de la conscription dans sa région (AE 1986, 686. “*qui et per eundem tractum dilectu[m e]git*”). Cette conscription semble avoir eu lieu dans le contexte de la révolte de Bar Kokhba (132–136) [Eck (1979/1999), p. 67]. Une inscription datant du règne de l’empereur Caracalla suggère également que la conscription était effectuée par un *curator viae Labicanae* (CIL X, 1259).

Le curateur des voies était parfois aussi le curateur de la cité (*curator rei publicae*). [---]cus Modestus Paulinus occupait la fonction de *curator viae Valeriae Tiburtinae et alimentorum* (voir ci-dessous), tout en étant nommé *curator rei publicae Marsorum Marruvii* (CIL IX, 3667). Les curateurs de cité étaient des bureaucrates impériaux qui supervisaient les finances des cités locales, et leur nombre a augmenté à partir du deuxième siècle. Ils étaient souvent nommés patrons par les cités dans lesquelles ils servaient, et contribuaient à l’autonomie de ces dernières [Iisaka (2014), pp. 43–89].

Le sénatus-consulte de 176, émis à la fin du règne de Marc Aurèle, sur la réduction ou l’exonération des frais d’organisation des combats de gladiateurs, mentionne les curateurs des voies comme superviseurs des frais d’organisation des combats de gladiateurs (FIRA I, no. 49 = CIL II, 6278). Dans les cités locales de l’Empire romain, l’élite locale entreprenait d’organiser à ses frais des combats de gladiateurs lors d’occasions festives, mais à l’époque, les commissions versées aux entrepreneurs (*lanista*) qui entraînaient des gladiateurs et les envoyaient au combat étaient élevées. Ce sénatus-consulte avait pour but de plafonner le coût des combats de gladiateurs dans l’ensemble de l’Empire et de réduire la charge pesant sur l’élite locale qui les organisait.

Les lignes 42 à 44 du sénatus-consulte en question se lisent comme suit :

“Across the Po, however, and throughout all regions of Italy competence must be given to *praefecti alimentis*, who should be assigned if present, or, ‘if they are not present’, to a *curator viae*, or if not even he is present, to a *iuridicus*, or if he too is unavailable, then to a prefect of a praetorian fleet.” (trans. J. H. Oliver and R. E. A. Palmer)

Dans ce document, le préfet des *alimenta* et le curateur des voies sont mentionnés comme étant des fonctionnaires qui supervisaient les limites de prix des jeux de gladiateurs en Italie. Dans ce document, le juge local (*iuridicus*) et le préfet de flotte sont également mentionnés comme superviseurs, mais le fait que le préfet des *alimenta* et le curateur des voies aient été nommés en premier suggère que ces fonctionnaires étaient prioritaires dans la supervision [Iisaka (2014), pp. 110–111].

Comme nous l'avons vu, outre l'entretien et la gestion des voies, les curateurs des voies étaient impliqués dans diverses tâches liées à l'administration de l'Empire. Au moins jusqu'à la première moitié du deuxième siècle, la seule bureaucratie impériale en Italie qui pouvait être impliquée dans l'administration locale était les curateurs des voies. En Italie, l'administration était donc basée sur les voies. Cela montre l'importance des voies et des curateurs des voies dans l'administration de l'Empire romain. La plus importante de toutes les tâches administratives des curateurs des voies était celle liée au système des *alimenta* (le système de parrainage des enfants). Nous allons maintenant nous pencher sur ce système des *alimenta*.

II. Les *curatores viarum* et le système des *alimenta*

Le système des *alimenta* était un système de dons pour le parrainage des enfants. Les personnes riches comme les empereurs ou les élites locales ont créé des fonds dans les cités italiennes, qui étaient ensuite prêtés aux propriétaires des terres des cités. Les intérêts qu'ils versaient chaque année étaient ensuite utilisés pour fournir des prestations (dons) aux garçons et aux filles vivant dans les cités.

C'est le système des *alimenta*, financé par les empereurs, qui fait l'objet de cet article. La mise en œuvre du système des *alimenta* remonte au règne de Nerva [Pagé, (2012), pp. 11–49], mais il faut attendre le règne de Trajan pour qu'il se généralise (d'où le grand nombre d'études sur la mise en œuvre du système des *alimenta* par cet empereur). Nous savons également, grâce à des documents et des inscriptions, que le système des *alimenta* a été généralisé sous les empereurs du deuxième siècle après Trajan. Les inscriptions confirment que plus de 50 cités italiennes disposaient d'un système des *alimenta*, mais nous ne savons pas dans quelle mesure les empereurs ont cherché à promouvoir ce système, ni selon quels critères ils ont sélectionné les cités concernées.

Probablement dès le début de la mise en place du système des *alimenta*, un préfet des *alimenta* (*praefectus alimentorum*) était nommé parmi les sénateurs pour superviser la bonne mise en œuvre du système dans chaque cité. Les inscriptions confirment également l'existence d'un chevalier procureur des *alimenta* (*procurator alimentorum*). Dans les régions où il y avait déjà un préfet sénatorial des *alimenta*, le procureur le soutenait dans l'exercice de ses fonctions, et dans les régions où l'existence d'un préfet des *alimenta* n'est pas connue, comme au nord du Pô, il semble avoir exercé les mêmes fonctions que le préfet des *alimenta* [Eck (1979/1999), p. 176–180].

La première tâche du préfet des *alimenta* (et procureur des *alimenta*) était de créer le fonds des *alimenta*. Ensuite, après la création du fonds, la tâche normale était de superviser la mise en œuvre du système des *alimenta*. Il supervisait la collecte par le magistrat local des *alimenta* (*quaestor alimentorum*) des intérêts des propriétaires fonciers qui avaient reçu des prêts du fonds, et le versement de ces intérêts à leurs enfants éligibles. Aux vues de ces tâches de surveillance, on suppose que le préfet des *alimenta* avait un pouvoir judiciaire d'un certain

degré, tout comme les curateurs des voies [Eck (1979/1999), pp. 180–185].

Il convient de noter que, dans de nombreux cas, les curateurs de voies mentionnés ci-dessus ont également fait office de préfets des *alimenta*. Par exemple, T. Caecernius Statius Quinctius Macedo Quinctianus (vers 138), dans deux inscriptions, fait référence au “curator viae Appiae, p[raefectus alimentorum]” et “curator viae Appiae et alimentorum” (ILS, 1069 ; AE 1957, 135). Cette pratique du double emploi du curateur des voies et du préfet des *alimenta* s’est poursuivie jusqu’au milieu du troisième siècle. Il en ressort que la fonction de curateur des voies était souvent associée à celle de préfet des *alimenta*, et que le district du système des *alimenta* correspondait à celui du réseau de voies [Eck (1979/1999), pp. 169–176].

Ainsi, le fonctionnement du système des *alimenta* dans les cités locales était souvent supervisé par des curateurs des voies responsables des zones correspondantes. La raison en est que (au moins jusqu’à la première moitié du deuxième siècle) la seule bureaucratie impériale impliquée dans l’administration locale en Italie était le curateur des voies [Faoro, D. (a cura di) (2018), p. 122]. Dans l’exercice de ses fonctions, le curateur des voies aurait eu beaucoup à faire avec des terrains (publics et privés), et étant donné que le système des *alimenta* fonctionnait grâce à des prêts garantis par des terrains, il devait être un superviseur approprié du système.

L’un des sujets de discussion dans l’étude du système des *alimenta* est la finalité du système. Dans le passé, on a supposé que la finalité du système des *alimenta* était principalement d’enrayer le déclin de la population italienne par le parrainage des enfants. Certains chercheurs ont également suggéré que le fonds des *alimenta* était destiné à fournir une aide financière aux paysans, car l’argent était prêté à un faible taux d’intérêt contre la garantie de la terre [pour un historique de la recherche, voir Duncan-Jones (1974/1982), pp. 294–300].

Cependant, l’étude de Bossu en 1989 a réexaminé la vision considérant le système des *alimenta* comme une politique démographique ou comme une mesure de promotion agricole, et a critiqué ceux qui ont cherché à attribuer une quelconque rationalité ou pragmatisme au système. Il a souligné que le système des *alimenta* était une scène de la “générosité” de l’empereur [Bossu (1989)]. L’étude de Woolf (1990) a mis en évidence deux choses : (1) les bénéficiaires du système des *alimenta* n’étaient pas des enfants de familles pauvres, et (2) le système était un moyen pour l’empereur de montrer sa richesse et sa générosité, et le système des *alimenta* était présenté comme une bonne action de l’empereur [Woolf (1990)].

Des deux points soulevés par Woolf, le premier a été réfuté par Wierschowski. Il a fait valoir que dans le système des *alimenta*, les emprunteurs du fonds n’étaient pas des bénéficiaires et que les bénéficiaires étaient toujours économiquement vulnérables. Cependant, même si les bénéficiaires étaient économiquement vulnérables, il est généralement admis qu’ils étaient au moins détenteurs de la citoyenneté, et il reconnaît qu’il s’agit là d’une limite du système des *alimenta* [Wierschowski (1998)].

Le deuxième point soulevé par Woolf a été examiné plus en détail par Jongman et

Seelentag. Jongman a fait valoir que l'empereur Trajan, en particulier, utilisait le système des *alimenta* pour promouvoir son image de "père" généreux et bienveillant de ses citoyens [Jongman (2002)]. Seelentag a examiné la relation entre les différentes représentations du pouvoir de Trajan et le système des *alimenta*, en notant en particulier l'importance de l'expression "*cura Italiae*" (soin de l'Italie) [Seelentag (2008)]. Dans ces études et d'autres plus récentes, il semble y avoir une forte tendance à comprendre le système des *alimenta* en terme d'idéologie impériale.

Il est certainement vrai que le système des *alimenta* était une excroissance de l'idéologie de l'empereur. Ce qui est important ici, c'est que le système des *alimenta* fonctionnait dans le cadre d'un système de gouvernance basé sur les voies, qui permettait à l'empereur de se promouvoir.

Conclusion

Sous le Haut-Empire, l'Italie disposait d'un réseau de voies, et les curateurs des voies étaient chargés de les entretenir. Cependant, en plus de leurs fonctions initiales, les curateurs des voies étaient également engagés dans diverses tâches administratives. Ainsi, en Italie, l'administration était basée sur les voies. La plus importante des tâches secondaires des curateurs était l'administration du système des *alimenta*. À travers ce système, l'empereur se présentait comme un "père" généreux et bienveillant pour ses citoyens, une image qui reposait sur un système de gouvernance basé sur les voies.

Bibliographie

- Bossu, C. (1989), L'objectif de l'institution alimentaire: essai d'évaluation, *Latomus* 48, 372–382.
- Cao, I. (2010), *Alimenta, Il racconto delle fonti*, Padova.
- Duncan-Jones R. (1974/1982), *The Economy of the Roman Empire. Quantitative Studies*, Cambridge (2nd ed. 1982).
- Eck, W. (1979/1999), *L'Italia nell'impero romano: Stato e amministrazione in epoca imperiale*, Bari 1999 (=id., *Die staatliche Organisation Italiens in der Hohen Kaiserzeit*, München 1979).
- Eck, W. (1992/1995), Cura viarum und cura operum publicorum als collegiale Ämter im frühen Prinzipat, *Klio* 74, 1992, 237–245 (= id., *Die Verwaltung des Römischen Reiches in der Hohen Kaiserzeit*, Bd. 1, Basel / Berlin 1995, 281–293).
- Faoro, D. (a cura di) (2018), *L'amministrazione dell'Italia romana. Dal I secolo a. C. al III secolo D. C. Fondamenti*, Milano.
- Jongman, W. (2002), Beneficial Symbols. Alimenta and the Infantilization of Roman Citizen, in: W. Jongman / M. Kleijwegt (eds.), *After the Past. Essays in Ancient History in Honour of*

- H. W. Pleket*, Leiden, 47–80.
- Lo Cascio, E. (1980/2000), *Curatores viarum, praefectie procuratores alimentorum*: a proposito dei distretti alimentari, *Studi di Antichità. Quaderni dell'Ist. di Archeologia e Storia antica dell'Univ. di Lecce* 1, 1980, 237–245 (= id., *Il princeps e il suo impero. Studi di storia amministrativa e finanziaria romana*, Bari 2000, 285–291).
- Pagé, M.-M. (2012), *Empereurs et aristocrates bienfaiteurs. Autour de l'inauguration des alimenta dans le monde municipal italien. Fin I^{er} siècle - début IV^e siècle*, Laval.
- Seelentag, G. (2008), Der Kaiser als Fürsorger — die italische Alimenterinstitution, *Historia* 57, 208–241.
- Wierschowski, L. (1998), Die Alimenterinstitution Nervas und Trajans. Ein Programm für die Armen?, in: Kneißl, P. / Losemann, V. (hrsg.), *Imperium Romanum. Studien zu Geschichte und Rezeption — Festschrift für Karl Christ zum 75. Geburtstag*, Stuttgart, 756–783.
- Woolf, G. (1990), Food, Poverty and Patronage. The Significance of the Epigraphy of the Roman Alimentary Schemes in Early Imperial Italy, *PBSR* 58, 197–228.
- Iisaka, K. (2014), *La struttura governativa dell'Impero romano. Il potere imperiale e le città italiane*, Sapporo (en japonais).
- Sakaguchi, A. (1979), Some Problems of the Roman Alimentary Institution, *The Study of Occidental history* 8, 32–56 (en japonais).
- Shimada, M. (2010), Imperial Power and Local Cities in the Roman Empire: The case of Early Imperial Italy, *Journal of Historical Studies* 872, 149–157 (en japonais).
- * Ce travail a été soutenu par JSPS KAKENHI (Grant-in-Aid for Scientific Research (C), Grant Number 20K01050).
- * Je suis vraiment reconnaissant à M. Antoine Pérez, le Maître de conférences à l'Université Paul Valéry de Montpellier III, d'avoir corrigé mon texte français.

Rapport sur la communication de M. Ogano

Antoine PÉREZ (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

Je me permets de saluer M. Ogano. Je suis à mon tour enchanté de faire sa connaissance et le remercie beaucoup pour cet exposé tout à fait passionnant.

Dans le court temps qui m'est imparti, je vais faire quelques remarques d'ordre général, méthodologique et historique.

- Tout d'abord, je suis frappé par les progrès de la recherche concernant le réseau et la typologie des voies au Japon, qui me paraissent beaucoup plus avancés qu'en Europe : il n'existe pas en France d'organisme ou de programme correspondant au *la Société pour l'étude des voies de circulation anciennes* de Tokyo et les diverses disciplines intéressées par l'étude de la voirie antique ne collaborent qu'exceptionnellement : il est ainsi très rare qu'historiens, archéologues, géographes, historiens de l'art et de la littérature ou encore toponymistes mettent en commun leurs compétences respectives alors que vous montrez fort justement que c'est là une nécessité absolue. Le monde académique européen compartimenté en sections, les universités, le CNRS et les musées, aux origines et traditions différentes, enfin la division presque hermétique entre le secteur public et le secteur privé : tout cela nuit évidemment à une action commune et à l'approche pluridisciplinaire que vous mettez en œuvre au Japon.

- Sur le plan de la méthode mise en œuvre pour étudier les voies anciennes, il existe évidemment bien des points communs entre le Japon et l'Europe : ainsi les méthodes de l'archéologie, sur lesquelles je ne m'attarderai pas ou l'interprétation des documents planimétriques (plans anciens, photographies aériennes ou images satellitaires). Mais il y a aussi des différences qui tiennent moins à la technique ou aux chercheurs, qu'à la nature même des sources à leur disposition.

C'est ainsi qu'en Europe, nous disposons d'une tradition littéraire essentiellement monastique qui a conservé, depuis deux mille ans, le texte des grands Itinéraires romains. Cela est dû à la centralisation de l'Église catholique, dont les abbayes et monastères ont recopié les textes de l'antiquité et notamment les itinéraires utilisés par l'administration impériale, la poste publique, les armées et les voyageurs, selon la typologie que vous établissez dans votre communication, car c'est évidemment la même au Japon. Ainsi la Table de Peutinger, un parchemin médiéval dont l'archétype remonte à l'époque de Constantin le Grand (IV^e siècle), décrit l'ensemble des voies romaines qui, partant de Rome traversaient l'Empire depuis les provinces de l'extrême-Occident (Portugal, Espagne) jusqu'à l'extrême-Orient de l'Empire, c'est-à-dire la frontière avec l'Iran avec même des routes jusqu'en Inde. Les distances séparant les étapes sur ces voies sont précisées, et des éléments de la topographie sont figurés. La plupart

de ces routes et de ces étapes sont donc identifiées en Europe : elles reliaient les actuelles villes - grandes ou moyennes - qui sont à peu près toutes d'origine romaine. Or, comme c'est le cas du système *Jobo* à Heijo-Kyo, Heian-Kyo ou encore Dazaifu, l'axe principal de ces villes romaines se confondait avec la Voie Impériale, de sorte qu'il n'est pas difficile de relier entre elles les cités romaines et d'identifier, sur le terrain, la voie, qui existe parfois encore, et qui, comme c'est souvent le cas au Japon avec la voie impériale, constituait l'axe génétique de la centuriation.

En outre, on a pu retrouver en l'Europe et au Proche-Orient des dizaines de bornes milliaires en pierre gravée qui jalonnaient la route et précisaient parfois les distances entre les capitales provinciales : elles sont consignées dans un tome entier du *Corpus Inscriptionum Latinarum*, le Corpus des Inscriptions Latines. Ainsi, en France, on a retrouvé le milliaire de Cneius Domitius Ahenobarbus, le long de la Via Domitia qui traversait la province de Gaule Narbonnaise (que le Professeur Yamamoto connaît bien !) : c'est la plus ancienne inscription antique de notre pays (118 avant J.-C). Cela permet évidemment de restituer la voie avec une grande précision.

- Malheureusement, on ne dispose pas de ce type de documentation pour les routes secondaires. C'est là une autre grande différence avec le Japon, où, d'une part, on dispose de cartes souvent précises établies par les temples, mais surtout où la toponymie a conservé remarquablement le souvenir des anciennes routes, comme vous nous l'avez montré au début de votre communication. Ce n'est pas le cas de l'Europe, qui a connu de multiples strates linguistiques dues aux invasions nombreuses, cela ayant influé sur la désignation des lieux. Il en est de même de l'organisation des paysages : le *Jôri* peut être restitué au Japon en tant que système toponymique d'indexation territoriale, comme l'ont montré A. Kinda ou K. Inuma par l'observation des *aza* dans le Jôri d'Okidai, à Nakatsu. Cette démarche est impossible en Europe avec la centuriation.

En revanche, et j'en terminerai là, il est un point commun entre le Japon et le monde romain, c'est la fonction idéologique, politique et religieuse de la Voie que vous avez soulignée. Le lien entre le *Kando* reliant Buzen au Sanctuaire d'Hachiman à Usa nous parle en effet de la nature même du pouvoir du *tenno*, de son autorité, de la même manière que la voie romaine nous parle de l'*auctoritas* d'Auguste et de ses successeurs. C'est là une piste de recherche qui me paraît vraiment prometteuse, à la fois pour le Japon antique et Rome : comme vous l'écrivez, cher Monsieur Ogano, « *L'importance historique de ces routes impériales réside dans le fait qu'elles servaient au-delà de leur fonction essentielle de voies de circulation* ».

Je vous remercie infiniment.

小鹿野報告へのコメント

アントワヌ・ペレス（モンペリエ第三大学）
廣岡 恵美子（別府大学）、坂井 利佐子（別府大学） 訳

小鹿野氏にご挨拶申し上げます。彼に出会えたことを嬉しく思うとともに、このとても興味深い報告に大変感謝しています。

短い時間ではありますが、一般的、方法的、歴史的な観点から、いくつかの考察を述べたいと思います。

まず、日本の道の交通網や類型学に関する研究が、ヨーロッパよりはるかに進んでいることに驚かされます。フランスには、東京の古代交通研究会に相当する組織やプログラムはなく、古代道路研究に興味を持つ様々な分野が例外的に協力しているに過ぎません。歴史学者、考古学者、地理学者、美術史家、文学史家、地名学者などが、それぞれのスキルを結集することは非常に稀ですが、それが絶対必要であることは、至極もつともなことです。ヨーロッパの学术界は、大学、CNRS（国立科学研究センター）、博物館など、それぞれ異なる起源と伝統を持つセクションに分かれ、公的部門と民間部門はほとんど交流のない状態にあります。これらはすべて、あなたが日本で実践しているような共同作業や学際的アプローチには明らかに不利なものです。

古代の道を研究する方法という点では、日本とヨーロッパには明らかに多くの類似点があります。つまり、ここでは触れませんが、考古学的方法、または、平面図資料（古地図、空中写真、衛星画像）の解釈による方法です。とはいえ違いもあります。それは技術や研究者の違いというよりも、自由に使える原資料の性質による違いです。

すなわち、ヨーロッパでは、何よりも修道院の文料的伝統があり、偉大なローマ街道の文献が2千年にわたり保存されてきました。これは、カトリック教会の中央集権化によって、修道院が古代の文献を書き写したためであり、小鹿野氏が発表で証明した類型論に従えば、とりわけ、帝国行政や公共の宿駅、軍隊、旅人によって利用された道程を書き写したものです。日本でも同様であることは明らかです。（古代の世界地図）「ポイティンガー図」は、中世の羊皮紙に描かれ、その原型はコンスタンティヌス大帝の時代（4世紀）に遡ります。ローマを起点に西の果て（ポルトガル、スペイン）から東の果て、すなわちイランとの国境まで帝国を横断し、インドにまで達するすべてのローマ街道を記しています。これらの街道では宿駅間の距離が明示され、地形情報も示されています。このように、ヨーロッパではほとんどの街道と宿駅が確認されています。これらの道は、現在の大小の都市を繋ぎ、そのほとんどがローマ時代に起源があります。そして、平城京や平安京、大宰府の条坊制のように、これらのローマ都市の主軸は官道と合流していたので、ローマ時代起源の諸都市を結びつけることや、時に現存し、日本の官道の場合と同様、ケントゥリア地割を起源とする幹線を構成していた道を地上で確認することは難しくありません。

また、ヨーロッパや近東では、道沿いに並び、時には地方都市間の距離を示したりした、古代ローマのマイルストーンが何十個も見つかっています。それらは、ラテン語の碑文集である『ラテン碑文集成』の1巻に記録されています。フランスでは、(ローマ帝国の地方都市)ガリア・ナルボネンシスを横切っていたドミティア街道沿いに、執政官グナエウス・ドミティウス・アヘノバルブスのマイルストーンが発見されました(山本氏がよくご存知です)。これは、わが国最古の古代碑文(紀元前118年)であり、それにより、街道を正確に再現することができるのは明らかです。

残念ながら、付随する道路については、そのような資料はありません。この点も日本との大きな違いで、一方では寺院が作成した精密な地図が存在することが多く、しかし、とりわけ、小鹿野氏が発表の冒頭で示しているように、地名が旧街道の記憶を顕著に残しているという点です。ヨーロッパではこのようなことはなく、数々の侵略により複数の言語層が存在し、それが地名の呼称に影響を与えてきました。景観の構成についても同様です。条里は、金田氏や飯沼氏が、中津の沖代条里の字(あざ)の調査により示したように、土地の指標となる地名体系として日本で復元することができます。これは、ヨーロッパのケントゥリア地割では不可能です。

ここで終わりにしますが、日本と古代ローマの共通点としては、小鹿野氏が浮き彫りにした、「道」の思想的、政治的、宗教的な機能があります。ローマ街道がアウグストゥスとその後継者の権威を物語るように、豊前と宇佐八幡宮を結ぶ官道は、天皇の権力の本質、彼の権威を物語るものです。これは、小鹿野氏が「通行帯としての『道路』の本質的な機能を超越した点に、官道の歴史的な意義があると考えられる」と書いておられるように、古代日本に関しても、ローマに関しても、非常に有望な研究分野だと思います。

心より感謝いたします。

Rapport sur la communication de M. Akamatsu et M. Saitoh

Martine ASSÉNAT (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

Je voudrais en premier lieu remercier les organisateurs de ce symposium et dire aux rédacteurs des textes à quel point ils m'ont intéressée. Nous avons avec Antoine discuté des trois textes et avons ensuite choisi, pour éviter les répétitions, d'intervenir chacun sur des textes différents.

Il me revient donc d'intervenir au sujet de texte de Monsieur Hideaki AKAMATSU et Monsieur Kei SAITOH.

L'exposé sur l'histoire du *Shôen*, son rôle dans l'histoire du Japon et l'historiographie du thème est fort intéressant. L'effort entrepris par les chercheurs de l'université de Beppu depuis les années 80 comme WATANABE Sumio et maintenant AKAMATSU Hideaki et SAITOH kei est remarquable. L'enquête présentée au sujet d'Itonaga-Myo montre bien à quel point il est important de travailler sur des cas particuliers pour comprendre l'évolution générale de l'occupation et de la gestion des terres et des territoires sans perdre de vue, c'est essentiel, et tous les travaux présentés dans ce symposium le rappellent, que ces mêmes études s'inscrivent dans une approche générale des cadres communs de l'apparition des *Shôen*.

De la même façon que, dans les années 80, les historiens et conservateurs du patrimoine ont compris l'urgence qu'il y avait à enregistrer les données historiques, archéologiques, toponymiques⁽¹⁾..., on comprend aujourd'hui l'urgence qu'il y a à rappeler que l'homme évolue dans un environnement dont il dépend quel qu'en soit le degré de maîtrise qu'il exerce sur lui. « Renaturer la culture, reculturer la nature », c'est par ces mots qu'Augustin Berque commence son livre « *Écoumène. Introduction à l'étude des milieux humains* »⁽²⁾ et il me plait de citer cet auteur dont l'œuvre entière nous rappelle qu'il est impérieux de penser aussi les *milieux*.

La communication de M. Akamatsu et M. Saitoh montre justement le degré de finesse d'analyse que l'on peut atteindre en organisant une approche pluridisciplinaire, avec des outils tels que les SIG, pour l'étude des *Shôen*, de leur environnement, et des milieux qu'ils contribuent à former.

A Diyarbakır/Amida nous nous sommes également demandé comment aborder et développer par le numérique une conception holistique et innovante des patrimoines culturels et naturels.

⁽¹⁾ Assénat M., « Toponymie, Histoire et archéologie : quels termes pour quel dialogue ? », *Nouvelle Revue d'Onomastique*, 21-22, 1993, p. 115-138.

⁽²⁾ Berque A., *Écoumène: Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris, Belin, 1987.

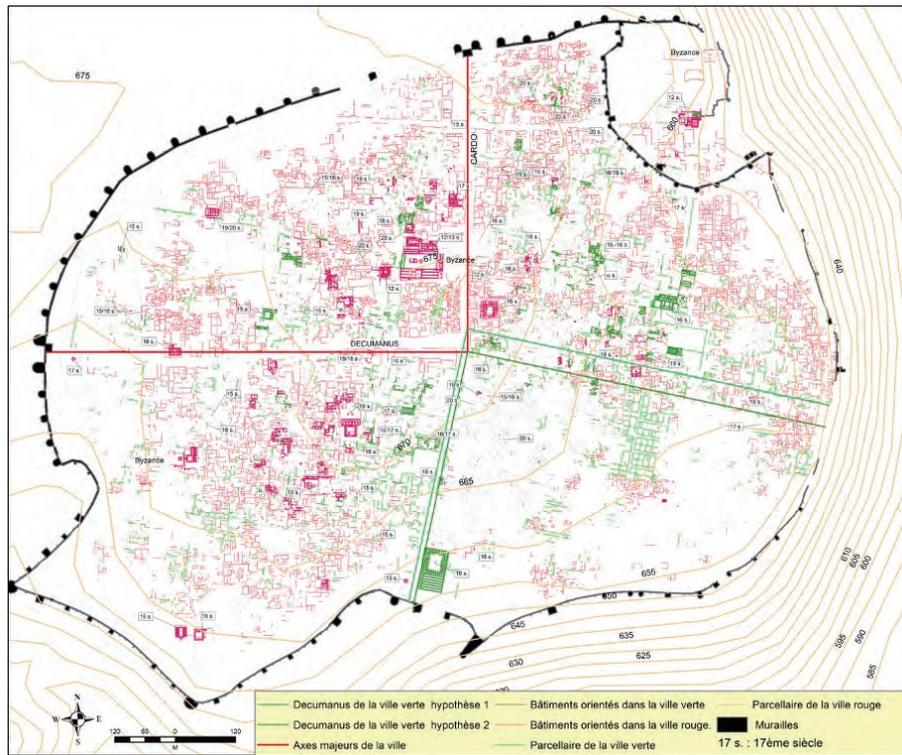
A titre d'exemple nous présentons ici deux cartes qui montrent comment les données disciplinaires sont corrélées pour répondre à des questionnements interdisciplinaires environnementaux et/ou historiques et/ou sociétaux⁽³⁾.

Carte 1 : sont corrélées des données relatives à la pérennisation dans le parcellaire contemporain de deux plans d'urbanisme hérités de l'Antiquité. Les orientations sont ici automatiquement extraites par une application. La visualisation des monuments de même orientation inscrit ce processus dans la profondeur historique et en précise les étapes. (Requête : sélection des orientations antiques/ monuments inscrits dans ces mêmes orientations/ datation). De même les processus à l'œuvre dans la pérennisation des trames urbaines, ou dans leur transformation, peuvent être appréhendés de points de vue multiples et trans-chronologiques aidant à appréhender les processus à l'œuvre dans la perdurance des éléments urbains.

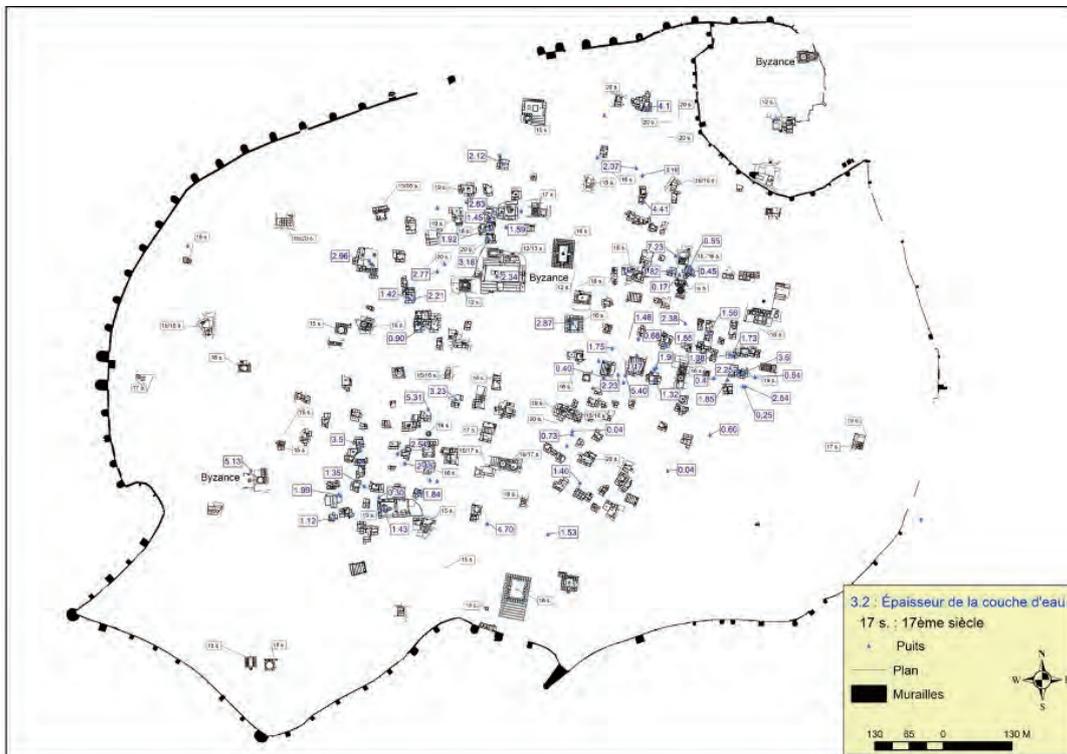
Carte 2 : sont corrélées les données hydrogéologiques, paléoclimatiques et historiques ou archéologiques pour évaluer les évolutions de la nappe phréatique au cours des 1500- 2000 années (requête bâtiments – datation – puits – profondeur).

Dans le temps qui nous est imparti, il me semblait important de montrer que nous travaillons aussi sur ces problématiques pluridisciplinaires et d'envisager des échanges sur ces sujets. J'ai hâte que nous nous retrouvions, en présentiel, pour discuter de tout cela.

⁽³⁾ Assénat M., Boucly J., Malit V, AMIDA-ATLAS : environnement, exploration, interdisciplinarité et société, colloque Interdisciplinariété(s)- 9 et 10 septembre 2021- MMSH - Aix-en Provence.



Carte 1. Réalisation M. Assénat (CRISES-IFEA), J.-F. Girres (UMR-GRED), V. Malt (Université de Harran - Turquie), A. Özsaşci, A. Pérez (CRISES)



Carte 2. Réalisation M. Assénat (CRISES-IFEA), C. Leduc (IRD), V. Malt (Université de Harran - Turquie)

赤松・齋藤報告へのコメント

マルティーン・アセナ（モンペリエ第三大学）

廣岡 恵美子（別府大学）、坂井 利佐子（別府大学） 訳

初めに、このシンポジウムの主催者の皆様に感謝の意を申し上げるとともに、これらの報告書を執筆してくださった研究者の方々に、私がどれほど関心を持ったかをお伝えしたいと思います。ペレス氏と私はこれら3本の論文について話し合い、その後、繰り返しを避けるために、それぞれが別の論文についてコメントすることにしました。

そこで私は、赤松秀亮・齋藤圭両氏による報告について、考えを述べたいと思います。

荘園の歴史、日本の歴史におけるその役割、本テーマに関する文献史料についての報告は非常に興味深いものです。1980年代の渡辺澄夫、現代の赤松秀亮氏と齋藤圭氏によってもたらされた、別府大学の研究成果には目を見張るものがあります。本文で紹介された糸永名についての調査は、土地の利用と管理の全体的な変遷を理解するために、視点を見失うことなく、特定のケースに取り組むことがいかに重要であることを示しています。これは肝心なことです。このシンポジウムで紹介されたすべての業績は、これらの研究が、荘園の登場という共通の枠組みにおける総括的なアプローチの一環をなすものであることを教えてくれます。

1980年代の歴史家や文化財学芸員が歴史的、考古学的、地名学的なデータを記録することの緊急性を理解したように、今日私たちは、人間が環境をコントロールできている程度がどうであろうと人間が環境に依存して進化していることを覚えておくことの緊急性を理解しています。「文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に」という言葉は、オーギュスタン・ベルクが著書『風土学序説』の冒頭に記しているものです。この作家を引用したのは、この本の全体を通して、「環境」についても考えることが差し迫っていることを再認識させられるからです。

GISなどのツールを用いた学際的なアプローチによって、荘園とその周囲、そしてそれらが形成する環境に関する研究がどの程度精緻なものになるかは、今回の報告が示しています。

ディヤルバク（アミダ）でも、文化遺産や自然遺産に関する包括的かつ革新的な見解について、デジタル技術によってどのようにアプローチし、発展させていくかを検討しました。

その一例として、学際的な環境問題や歴史問題、社会問題を解決するために、各分野のデータをどのように関連付けるかを示す2つの地図を紹介します。

地図1（Carte 1, p. 73）は、古代より受け継がれてきた2つの都市計画が、現代の土地区画においてどのように永続しているかというデータを相関させています。方位はアプリケーションによって自動的に抽出されます。同じ方位の歴史建造物を可視化することで、このプロセスを歴史的に深く位置づけ、その段階を明らかにしています。（リクエストは、古代の方位選択、同じ方位に位置する歴史建造物、年代測定）。同様に、都市の骨組みの永続性、あるいはその変容に作用するプロセスを、時系列を超えた複数の視点から把握することで、都市の

構成要素の永続性に作用するプロセスを理解することができます。

地図2 (Carte 2, p. 73) は、水文地質学 (または水理地質学)、古気候学、歴史・考古学のデータを関連付け、1500 年から 2000 年にかけての地下水の水位変化を評価します (リクエストは、建物、年代、井戸、深さ)。

時間の許す限り、私たちがこうした学際的な問題にも取り組んでいることを示し、これらのテーマでの交流を構想することが重要だと思いました。是非直接お会いして話し合いたいと思います。

Rapport sur la communication de M. Iisaka

Antoine PÉREZ (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

Notre Collègue livre ici une très pertinente analyse sur les prérogatives et l'action des *curatores viarum* dans l'Italie des trois premiers siècles de notre ère. Il montre de façon convaincante que ces fonctionnaires impériaux, initialement chargés de la construction et de l'entretien des grandes routes, furent particulièrement associés à l'organisation de l'expression la plus claire de la générosité impériale dispensée dans le cadre des *civitates* : l'institution des *alimenta*. Il s'agissait en effet de fournir aux enfants des cités – les futurs citoyens – des subventions alimentaires, puisqu'aussi bien le Prince était le « Père de la Patrie = « *Pater* ou *Parens Patriae* » » (Rome) et par extension, le « père » symbolique des enfants des cités, les « petites patries » de tous les citoyens romains. Car le citoyen de la *Respublica*, rappelait Cicéron, avait deux patries : sa cité et Rome. Cela explique, nous dit Iisaka, que ces représentants du Prince, les *curatores*, aient souvent, dans les inscriptions été qualifiés et honorés du titre de patrons (*patronus*) des cités : les *patroni*, c'est-à-dire les quasi-patres, les quasi-pères : le mot a la même origine.

Au terme d'un examen très clair des principales hypothèses avancées par la recherche récente, M. Iisaka met en évidence la relation privilégiée que ces personnages, directement mandatés par le Prince (*pro-curare* signifie en quelque sorte « agir à la place de... », ou « représenter ») entretiennent avec le Prince lui-même, dont ils dispensent la générosité dans les cités de l'Italie par l'institution des *alimenta*. S'ils peuvent le faire, nous explique notre Collègue, c'est d'abord pour des raisons techniques : en effet, ces distributions de nourriture sont liées à la mise en place par l'Empereur et les notables locaux d'un système de prêts aux propriétaires des terres, prêts qui produisaient des intérêts utilisés ensuite pour financer les distributions alimentaires gratuites. C'était une organisation très ingénieuse qui finançait tout à la fois la production agricole et la subsistance des enfants des citoyens les plus pauvres, tout en resserrant les liens entre le César et les Cités. Cela supposait que le responsable qui supervisait ces opérations disposait de compétences juridiques sur le statut des terres (privées ou publiques), qui étaient celles du *curator viarum*.

Nous touchons là à une question capitale qu'Iisaka a bien identifiée, et qui nous rapproche de nos recherches communes. Pourquoi ?

- Très récemment, Anne Kolb⁽¹⁾ a rappelé comment Auguste, le fondateur du régime

⁽¹⁾ KOLB, Anne (2018), «Die Curae in Rom – Aufgaben, Kommunikation, Vernetzung innerhalb der Stadtverwaltung und das Beispiel des Adrastus, procurator columnae Divi Marci », in : Wojciech, Katharina ; Eich, Peter. *Die Verwaltung der Stadt Rom in der Hohen Kaiserzeit. Formen der Kommunikation, Interaktion und Vernetzung*, Paderborn: Schöningh, p. 197–221.

impérial, avait créé, à Rome, l'institution de la cura annonae (c'est-à-dire l'approvisionnement en blé de la Ville) : après avoir assumé seul cette charge, il avait créé ensuite un responsable de la distribution de ce blé au peuple : le *praefectus frumenti dandi* (celui qui distribue le blé). Selon le même modèle, en tant que premier responsable de la création des routes (*viae*), il avait ensuite (en 20 avant J.-C.) délégué cette charge à un collège de *curatores viarum*. L'importance de ces personnages, nous dit Iisaka, est prouvée par leur statut proprétorien ou proconsulaire (c'est-à-dire les plus prestigieux magistrats de la République, anciens préteurs ou anciens consuls). Plus tard, même lorsque ces *curatores* furent choisis parmi les chevaliers (le deuxième ordre de la société, après les sénateurs), ils héritèrent de fait de la compétence juridique de Praetor, et politique du Consul, c'est-à-dire de prérogatives que le Princeps, l'Empereur, possédait désormais à un degré supérieur après la fin de la République. Ses représentant en direction des cités de l'Empire était donc particulièrement qualifiés pour agir au nom du Prince.

- Mais pourquoi les routes ?

C'est très clair : la *via*, qui organise la cohésion territoriale de l'Empire, est toujours créée par un geste religieux, comme les limites de la centuriation (*Jôri*) qui structure le territoire des cités partout dans l'Empire. Les textes nous disent qu'une voie dispose d'une *dignitas* éminente : elle est sacrée. Celui qui fonde une route ou une centuriation, celui qui fonde une cité, le fait après la prise des auspices (*auspicia*), le vol des oiseaux qui dévoile la volonté des Dieux. Il est un *augur*, un prêtre, il dispose de l'*auctoritas*, l'autorité religieuse qui donne son titre à l'Empereur, Augustus, celui qui dispose de l'*auctoritas* suprême (tous ces mots appartiennent à la même sphère sémantique).

Il me semble donc, et c'est ce que suggère clairement la communication de notre Collègue, que celui qui construit et entretient la *via*, le *curator viarum*, est d'évidence le plus qualifié pour représenter, partout sur le territoire des cités de l'Italie et le l'Empire romain, la place symbolique et réelle du Premier détenteur de l'*Auctoritas*, Auguste, le Père et le Patron suprême de la Patrie. Sa générosité, sa fonction de bienfaiteur suprême (*evergetes* en grec), passe, entre autres, par l'institution des *alimenta*, et il n'est pas innocent que, comme le démontre clairement le Professeur Iisaka, ce soient les responsables des grandes voies romaines qui aient assumé cette responsabilité devant les cités, c'est-à-dire les unités de base de la société et de l'État Romain. Ils étaient tout à la fois des artisans majeurs de la gestion du territoire... et de la propagande impériale.

Il n'est pas utile alors que je souligne l'importance de ce sujet dans la perspective de l'étude de la nature de la Voie Impériale dans l'Antiquité Japonaise. Bien sûr, Nara n'est pas Rome ; Auguste n'est pas le Tenno. Et la cité n'existait pas dans le Japon de Nara. Mais le pouvoir sacré des deux souverains s'est exprimé en quelque manière par la Voie : notre travail commun l'a montré au grand Sanctuaire d'Hachiman, à Usa.

飯坂報告へのコメント

アントワーン・ペレス（モンペリエ第三大学）

飯坂 晃治（別府大学）訳

我々の同僚は、後1世紀から3世紀にかけてのイタリアにおける街道監督官（*curatores viarum*）の特権と活動に関する非常に的確な分析をここでおこなっています。彼は、当初街道の建設と維持を担当していたこれらの帝国官僚がとりわけ、キウィタスの枠組みでおこなわれた、皇帝の寛大さを最も明確に表現する制度、すなわちアリメンタ制度に参与していたことを説得的に示しています。その目的は実際、都市の子供たち——将来の市民——に養育のための補助金を支給することでした。というのも、元首は「祖国（ローマ）の父（ないしは親）」であり、ひいてはすべてのローマ市民の「小さな祖国」である都市の子供たちの象徴的な「父」であったからです。キケロが言うように、共和国の市民はふたつの祖国、すなわち、自分の都市とローマを持っていました。このことは、飯坂氏がいうように、元首の代理人である監督官が、碑文のなかでしばしば都市のパトロヌス（*patronus*）という称号を与えられて顕彰されたことを説明しますし、パトロヌスとはすなわち、父（*patres*）に準ずる者の意で、両者は語源を同じくしているのです。

飯坂氏は、近年の研究によって提示された主要な仮説を非常に明快に検討した後に、元首から直接委任を受けた官僚（*pro-curare* とは、いわば「代わりに行動する」、「代表する」という意味）が元首自身との間に持ち続けていた特権的な関係を明らかにし、彼らがイタリア都市においてアリメンタ制度をとおして、元首の恩恵を施したことを強調しています。彼らがそのようにできたのは、我々の同僚がいうように、技術的な理由によるものでした。実際、この食糧配給は、皇帝と地方名望家により土地所有者への融資をおこなう制度が確立されたことと結びついていました。融資が利子を生み、その利子は無償の食糧配給の資金として利用されたのです。農業生産と非常に貧しい市民の子供たちの生活の両方に資金を提供し、同時に皇帝と都市の結びつきを強めたのは、非常に巧妙につくられた制度でした。この制度は、その業務を監督する責任者が、土地（私有地ないしは公有地）に対して法的権限を行使することを想定していましたが、その権限は街道監督官（*curator viarum*）のものでした。

ここでは、飯坂氏が確認した、我々の共同研究に関わる重要な問題に触れます。なぜそうなったのでしょうか。

——近年、アンネ・コルプは、帝政の創始者であるアウグストゥスがいかにして、ローマに首都への穀物供給（*cura annonae*）の制度を創設し、その責務を一人で果たした後、穀物を人々に分配する責任者として穀物分配長官（*praefectus frumenti dandi*）を新たにおいたのかを説明しました。同様のかたちで、街道（*viae*）を建設する最初の責任者として、彼はその後（前20年）、その責務を街道監督官（*curatores viarum*）の同僚団に委任しました。飯坂氏によれば、これらの官僚の重要性は、プラエトル級やコンスル級（すなわち、共和政期の最も権

威ある政務官であるプラエトルの経験者やコンスルの経験者) という地位によって証明されるといいます。その後、騎士身分(社会において元老院議員につぐ第二の身分) から選ばれたとしても、街道監督官は事実、プラエトルの法的権限とコンスルの政治的権限を継承しており、それらの特権は、元首、すなわち皇帝が共和政の終焉後に高次のレベルで保持していました。そのため、帝国の諸都市に対して元首の代理を務める官僚は、特別に元首の名のもとで活動する権限を帯びていました。——しかし、なぜ街道なのでしょう？

それは明らかです。帝国の領土に統一性をもたらす街道は、帝国各地において都市の領土をなすセントゥリア(条里制)の境界線として、常に宗教的な行為によって建設されます。街道は卓越した威厳を具えており、また神聖であることを、史料は伝えています。街道の建設ないしはセントゥリア地割をおこなう者、すなわち都市を建設する者は、神々の意志を示す鳥の飛翔を見る鳥占い(auspicia)をおこなった後に事にあたるのです。その者はアウグル(鳥占官 augur)、すなわち司祭であり、アウクトリタス(auctoritas)という宗教的権威を持ち、その権威は至高のアウクトリタスを持つ皇帝アウグトゥス(Augustus)に尊称を与えています(これらの言葉はすべて同じ意味の範疇に属している)。

したがって私には、——我々の同僚の報告が明確に示していることでもあります、——街道を建設し維持する街道監督官は明らかに、イタリアとローマ帝国の都市のあらゆる領域において、権威(Auctoritas)の最初の保持者で、祖国の父にして至高のパトロンであるアウグストゥスの象徴的かつ現実的なポジションを代表するのに、最も適格な存在であると思われるのです。その寛大さ、すなわち至高の善行者(ギリシア語でエウエルゲテス euergetes)としての役割は、とりわけアリメンタ制度をつうじて表現されます。そして、飯坂氏が明確に示しているように、ローマの国家と社会の基本単位である都市に対してその責務を負ったのがローマの主要な街道の管理者であったのは、偶然ではありません。彼らは同時に、土地の管理と...そして帝国のプロパガンダの中心人物でもありました。

古代の日本における官道の特徴を研究する観点からすれば、私がこのテーマの重要性を強調しても意味はありません。当然、奈良はローマではありません：アウグストゥスは天皇ではありません。そして、奈良時代の日本には都市は存在しませんでした。しかし、両支配者の神聖な力は、街道をとおして何らかのかたちで表現されました。我々の共同研究は、宇佐八幡宮の広大な聖域においてこのことを示したのです。

報告へのコメント

山本 晴樹（別府大学名誉教授）

(I) 小鹿野報告へのコメント

小鹿野報告で関心をもったのは、やはり古代街道の「直進性」の指摘である。とりわけ、実際に街道が直進していなくとも、「直進性」を意識していたという指摘は大変興味深い。

図1は中津の沖代条里南限線と宇佐大路の方位が一致することから推定した古代官道推定線であるが、宇佐の飛松から宇佐大路の間は、古代官道は、実際はこの推定線よりすこし南の方を通過していた。



勅使街道と古代官道推定線（『宇佐大路』1991年）

図1 勅使街道と古代官道推定線

Fig. 1 Chokusi Kaido (la route impériale) et la ligne supposée de l'ancienne route impériale

しかし、宇佐大路の方位と飛松以西の勅使街道の方位が一致しているということはまさに小鹿野先生が指摘されている「直進性」が意識されているといわざるをえない。

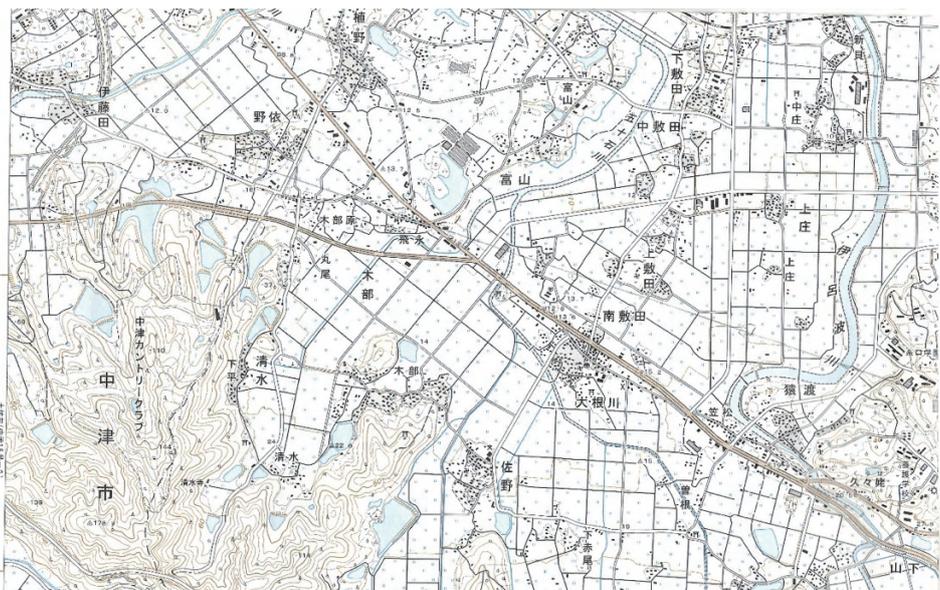
それに関してこの宇佐大路～飛松間を地図上で結んでみると、この直線上に神社（貴船社：水の神）が点在することである（地形図2，3）。実際にこれらの貴船社を訪れてみると、本殿の方位は南ではなく東南東方向の宇佐神宮に向いていた。



地形図 2 (1:25,000) 国土地理院

右端から西南西方向 (宇佐神宮～宇佐市上高) 斜線

Fig. 2 L'ancienne route impériale supposée vers l'ouest-nord-ouest du Temple de Usa



地形図 3 (同)

地形図 2 の斜線の延長 (伊呂波川～伊藤田)

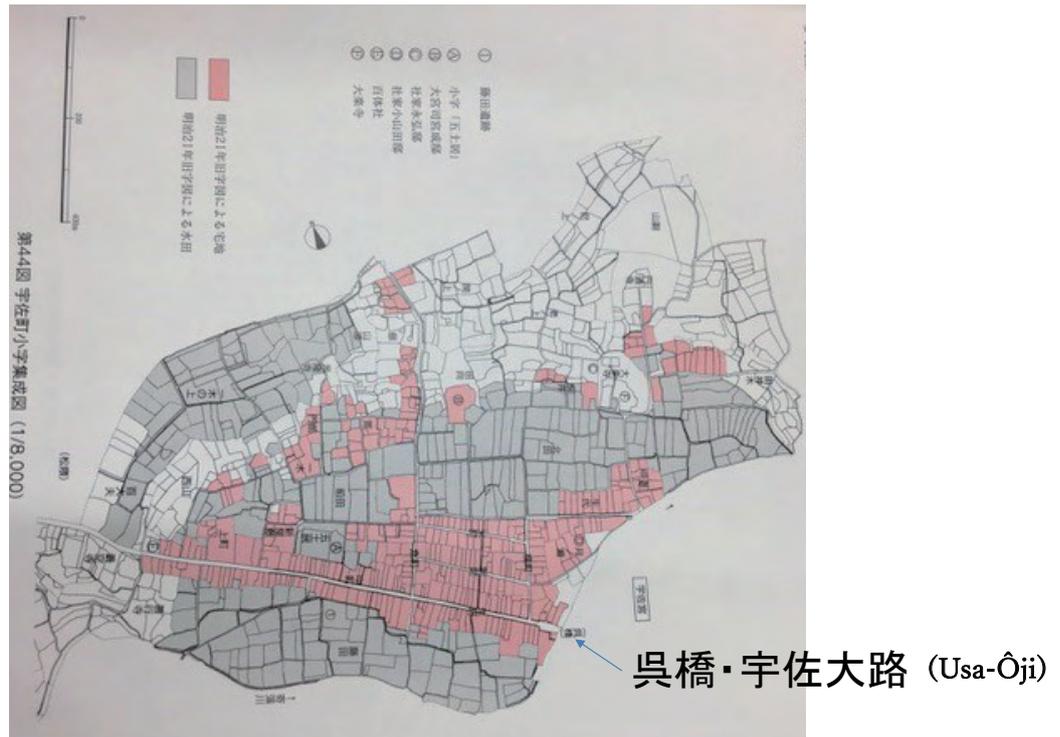
Fig. 3 La prolongation de la route supposée de Fig. 1 (entre Itoda et la rivière Iroha)

貴船社が推定線上に並ぶというのは、単なる偶然なのか、あるいは何らかの意味があるものなのか。小鹿野先生からなにかご意見をいただければさいわいである。

(II) 赤松報告へのコメント

赤松報告は大変興味深いものであり、とりわけ末尾（28～29 ページ）で展開されている、小字名の分析から井堰の中心の移動を推論されているところは大変参考になった。

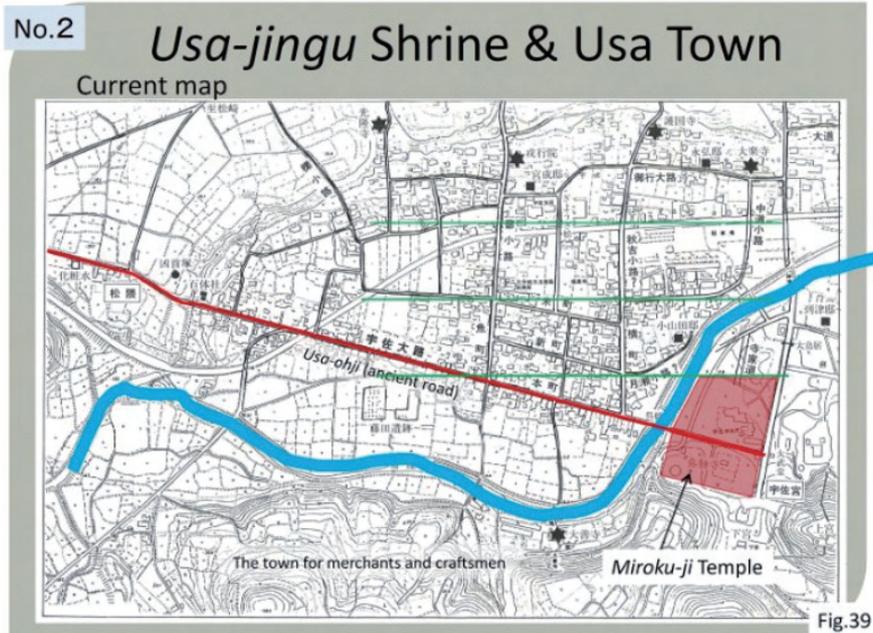
ところで、宇佐神宮から中津までいたるいわゆる「勅使街道」について、これまでの日仏シンポジウムでその生成・展開・変容を取り上げてきた。そのなかで、宇佐大路の部分と中津の福島地域については小柳和弘氏（元大分県立博物館長）が以下の小字集成図（図1、図2）を作成されている。



宇佐町小字集成図(小柳2004年)

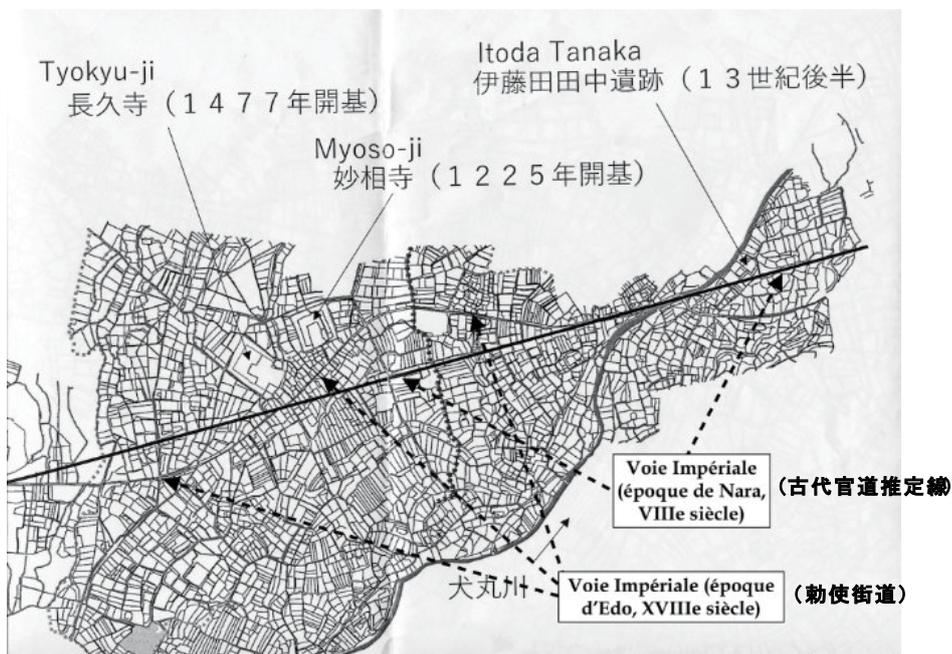
図1 宇佐町小字集成図（小柳氏作成、2004年）

Fig.1 la carte des noms recueillis de la localité dans la commune de Usa (rédigée par M. Koyanagi en 2004)



(参考図) 現在の宇佐神宮の西参道と宇佐大路 (小柳氏作成、『聖域・街道・地割』2018年)

La carte actuelle de Usa-Ôji et Nishi-sando



中津市福島周辺小字集成図(小柳和宏氏作成)

第2図 中津市福島周辺小字集成図 (小柳氏作成)

Fig. 2 La carte des noms recueillis autour de la région de Fukushima (Nakatsu) (rédigée par M. Koyanagi)



(参考図：現在の中津市福島周辺) 国土地理院 (1 : 25,000)

La carte actuelle de la région autour de Fukushima (Nakatsu)



(拡大図)

La carte élargie

一つ目の小字集積図に関して、この小字名を分析することによって、赤松先生が田染荘で小字名の分析から井堰の移動を類推したことを参考にして、宇佐町で勅使街道が敷設される

以前の宇佐町の土地所有状況が復元可能になるのではなからうか。すなわち勅使街道の生成の問題である。

もう一つの図に関して。小柳氏はこの小字集成図において、福島の一つの寺である長久寺と妙相寺の参道が現在の勅使街道に対して、妙相寺のそれは不自然であることを指摘している。これは、妙相寺の参道は現在の勅使街道ではなく、かつての古代官道に対していたものではなかったかと推測している。小柳氏はつまり勅使街道は長久寺が建立されるときまでには直線の街道から曲線の街道へと変化していたと考えているわけである。すなわち勅使街道の変容の問題である。これを解明するのに、これまた小字名の分析が有効なのではなからうか。

以上が赤松報告に対するコメントである。

(III) 飯坂報告へのコメント

飯坂先生は自著の中で、街道監督官がアリメンタ長官を兼ねる史料上の初出の人物としてハドリアヌス帝期の元老院議員ルキウス・ミヌキウス・ナタリス・クアドロニウス・ウェルス (CIL XIV, 3599=ILS 1061) を挙げている。街道管理とアリメンタ制度との関連を考える場合、この人物の人名学的研究 (プロソポグラフィー) が重要ではないかと考えている。

それに関して、実は私はこの人物について別の観点から関心をもっていた。彼については以前書いたものがある (添付資料参照)。その内容はエクスとナルボンヌの皇帝礼拝委員 (アウグスタレス) *Quadronius Fidelis* (CIL XII, 4414) にかかわるものである。彼の保護者 (パトロヌス) がヒスパニア属州のローカルエリート (地方名望家) *L. Licinius Natalis Quadoronius Verus* であった。彼の一族はヒスパニア東北部で製造されたワインの交易商人であり、その交易先はガリアやイタリアであった。それでこの一族の解放奴隷である *Quadronius Fidelis* はガリアのエクスとナルボンヌの支店をまかされていて、そのことによって財力を得て、これらの都市の皇帝礼拝委員になったというわけであった。

こういう背景をもつ元老院議員 *L. Minicius Natalis Quadronius Verus* がどのようにしてハドリアヌス帝と関わり、街道監督官やアリメンタ長官になっていくのかは私自身も関心があり、飯坂先生の研究の成果が期待される。

À propos des communications

YAMAMOTO Haruki (Université de Beppu)

(I) À propos de la communication de M. Ogano

Dans sa communication, M. Ogano signale la rectitude de l'ancienne route impériale. Ça m'intéresse beaucoup. Surtout que selon ses dires, l'on était conscient de la rectitude de la route, bien que la route réelle n'était pas droite.

Fig. 1 (voir p. 83) montre la ligne supposée de l'ancienne route impériale conjecturée parce que l'orientation de la ligne limite sud de Jôri de Nakatsu est identique à celle de Usa Ôji. Mais en réalité la route entre Tobimatsu (Usa) et Usa Ôji passait un peu plus au sud de la ligne supposée.

Le fait que l'orientation de Usa Ôji est identique à celle de Chokushi Kaido (la route impériale) à l'ouest de Tobimatsu, cela signifie que l'on est conscient de la rectitude de la route, comme le signale M. Ogano.

À propos de cela, on voit que quelques temples shintoïstes de Kifune (dieu de l'eau) se trouvent sur la ligne supposée de l'ancienne route impériale entre Tobimatsu et Usa Ôji (Fig. 2, 3). Les bâtiments principaux de ces temples ne font pas face au sud, mais à l'est-sud-est, qui est la direction du temple de Usa.

Des temples de Kifune se trouvent sur la ligne supposée, est-ce le hasard ou cela signifie quelques choses ? Je voudrais demander l'avis de M. Ogano sur cette question

(II) À propos de la communication de M. Akamatsu

La communication de M. Akamatsu est aussi très intéressante. Surtout qu'il est très utile que M. Akamatsu conjecture le déplacement du centre de déversoir en analysant des noms de la localité (*koaza*) dans sa communication (pp. 28–29).

Or nous relevons le problème sur la genèse, le déroulement et la transformation de la route impériale (*Chokushi-kaido*) dans le colloque franco-japonais. M. Koyanagi a rédigé les cartes des noms recueillis de localité (*koaza*) à propos de la région de la commune de Usa et de la région de Fukushima (Nakatsu).

À propos de la première carte. On pourrait restaurer la situation foncière avant l'aménagement de la route impériale (*Chokushi-kaido*) dans la commune de Usa, en se référant à la façon que M. Akamatsu essayait pour analyser des noms de la localité (*koaza*) dans le domaine de Tashibu. Parce qu'il pouvait conjecturer le déplacement du centre de déversoir en analysant des noms de la localité (*koaza*). C'est à dire le problème de la genèse de la route impériale.

À propos de la deuxième carte. M. Koyanagi signale que l'allée d'accès (*sandô*) du temple de Myosô-ji est irrégulière à Chokushi-kaidô actuel, au contraire de celle du temple de Chôkyu-ji. Il suppose que l'allée d'accès de Myosô-ji s'est dirigé vers Chokush-kaidô ancien (la route impériale), mais pas vers l'actuel route. Donc M. Koyanagi considère que le parcours de Chokushi-kaidô a changé et a cessé d'être droit devant la construction de Chôkyu-ji. C'est-à-dire le problème de la transformation de Chokushi-kaidô. On pourrait éclairer ce problème aussi en analysant des noms de localité (*koaza*), comme M. Akamatsu a fait. C'est mon avis sur la communication de M. Akamatsu.

(III) À propos de la communication de M. Iisaka,

Selon M. Iisaka, au point du documentation épigraphique sur le préfet des *alimenta* son premier personnage est *L. Minicius Natalis Quadronius Verus* (CIL XIV, 3599 = ILS 1061). Il était un sénateur au temps de l'Empereur Hadrien. Je considère comme importante la prosopographie de ce personnage, en envisageant la relation d'administration de la route avec l'institution des *alimenta*.

À propos de *L. Minicius Natalis Quadronius Verus*, il m'intéresse beaucoup au point du vue différent de celui de M. Iisaka. En fait j'ai déjà rédigé un article sur cette personnage (voir Appendice). Il a une liaison avec un sévir augustal *Quadronius Fidelis* (CIL XII, 4414), qui était celui de Aix et de Narbonne.

Natalis était local élite(notable) en Tarraconaise (Hispanie romaine). Sa famille était un grand négociant en vin. Elle exportait beaucoup de vin vers la Gaule et l'Italie. En fait *Fidelis* était responsable de son comptoir de Aix et de Narbonne. Grâce à ça, *Fidelis* a devenu sévir augustal de ces villes. C'est-à-dire la famille de *Natalis* était ancien patron de *Fidelis*.

Voilà pourquoi la carrière de *L. Minicius Natalis Quadronius Verus* m'intéresse beaucoup. Je voudrais savoir comment il a connu l'Empereur Hadrien et pourquoi celui-ci l'a nommé en tant que curateur des voies et le préfet des *alimenta*. J'attends les résultats de recherches de M. Iisaka.

Appendice

Autour des Quadronii en Narbonnaise et en Tarraconaise *

YAMAMOTO Haruki

Dans son livre sur la mobilité sociale en Gaule romaine⁽¹⁾, L. Wierschowski cite une inscription latine de Quadronius Fidelis (CIL XII, 4414):

[.] Qu[a]dr[o]ni[o] / Fide[li] VIvir(o) A[ug(ustali)] / C(olonia) I(ulia) P(aterna) C(laudia) N(arbone) M(artio) e[t] / C(olonia) I(ulia) Aq(uis) Sext(is) / Chrysogonus / [I(ibertus)] fecit in a(gro) p(edes) XV.

D'après cette inscription, Chrysogonus, un affranchi de Quadronius Fidelis a élevé ce tombeau dans le cimetière de Narbonne pour son patron qui était sévir augustal à Narbonne et à Aix.

L. Wierschowski indique que Quadronius Fidelis était originaire d'Aix d'après une inscription celte-grecque (RIG I 106) et qu'il ou son ancêtre a immigré à Narbonne. Selon Wierschowski, quelq'un des *Quadronii* narbonnais a immigré à Barcelone et des *Quadronii* à Barcelone ont adopté un fils de la famille sénatoriale des Minicii Natalis. Ce fils s'appelait L. Minicius L. f. Natalis Quadronius Verus.

Selon Wierschowski il y a un autre personnage qui a un nom *Quadronius* en Narbonnaise. C'est T. Iulius Sex. f. Volt. Maximus Ma[---] Brocchus Servilia(us) A(ulus) *Quadron[ius ---]*L(ucius) Servilius Vatia Cassius Cam[---] (CIL XII 3167). Il indique que cette personnage était un fils adoptif d'un A. *Quadronius* de l'Hispanie.

Mais curieusement Wierschowski ne mentionne rien de Q. Licinius Silvanus Granianus *Quadronius* Proculus (CIL II 4609) qui était sénateur d'origine de Tarragone. Des *Quadronii* à Barcelone ont adopté aussi un fils de la famille sénatoriale des Licinii Silvani à Tarragone.

Finalement Wierschowski conclure que des *Quadronii* narbonnais étaient un ancêtre directe des *Quadronii* à Barcelone qui ont adopté des fils de la famille sénatoriale et que des *Quadronii* à Barcelone ont devenu riche grâce au commerce des huiles et des vins (S.213f.).

M. Christol aussi pense que des *Quadronii* sont originaires de Narbonnaise. Il dit : “ que le gentilice *Quadronius*, très rare, renvoie à Narbonne. Néanmoins, pour l'instant, aucun des *Quadronii* narbonnais ne porte le prénom A(ulus). Peut-être, en définitive, aurions-nous ici un niveau provincial ?”⁽²⁾

Cependant Th. Franke⁽³⁾ indique qu'il y avait une famille des *Quadronii, equites Romani*, qui habitaient à Barcelone et à Tarragone dans la région nord-este de l'Hispanie. Ils étaient ancien patron de *Quadronius* Fidelis qui était sévir augustal à Narbonne et à Aix. Franke explique que des *Quadronii*, grands négociants en vins dans la région de Laeétanie en Tarraconaise, et qu'ils exportaient beaucoup de vin vers Gaule du sud, Ligurie et Italie. Selon Franke, *Quadronius* Fidelis était représentant de commerce à Narbonne. Et des *Quadronii* ont

acqueri de la fortune et de la réputation grâce à ce commerce et ont devenu *equites Romani* à la fin du 1er siècle ap. J.-Ch.

A. Kriekhaus⁽⁴⁾ indique que L. Minicius Natalis *Quadronius Verus* à Barcelone, Q. Licinius Silavanus *Quadronius Proculus* à Tarragone et Sex. Iulius Maximus Manlianus à Nîmes sont parents par ses mères ou par l'adoption, parce qu'il ont très rare *nomen gentile Quadronius*. Selon Kriekhaus, des *Quadronii* à Narbonne sont clairement affranchis des *Quadronii* en Tarraconaise.

L. Wierschowski et M. Christol pensent que des *Quadronii* sont originaires de Narbonnaise. Cependant Th. Franke et A. Kriekhaus pensent qu'ils sont originaires de Tarraconaise. Pour le moment nous ne pouvons pas déterminer d'où des *Quadronii* sont venus.

Or selon A. Tchernia⁽⁵⁾, des amphores sigillées de 《M. PORC》 sont fabriquées dans la région de Laeétanie et sont exportées vers Gaule cotière et interne pendant la fin de 1er siècle avant J.- Ch. et le milieu de 1er siècle après J.-Ch.⁽⁶⁾ Si, comme Franke dit, des *Quadronii* à Barcelone ont remporté un grand succès en tant que grand négociant en vins et grâce à ça, ils ont devenu *equites Romani* à la fin de 1er siècle après J.-Ch, ce serait vraiment dans la région de Laeétanie que des *Quadronii* habitaient et faisaient le commerce des vins. Donc il me semble que des *Quadronii* étaient originaires de Tarraconaise.

(1) Cf. L. Wierschowski, *Fremde in Gallien - „Gallier“ in der Fremde: Die epigraphisch bezeugte Mobilität in, von und nach Gallien vom 1. bis 3. Jh. n. Chr.*, Stuttgart 2001, 212.

(2) M. Christol, De la notabilité locale à l'ordre sénatorial: les Iulii de Nîmes, *Latomus*, 60, 2001, 613–630, spéc. 629.

(3) Th. Franke, *Quadronius - sozilaer Aufstieg in 250 Jahren?*, *LAVERNA* IV(1993), 69–80.

(4) A. Kriekhaus, *Senatorische Familien un ihre patriae (1./2/ Jahrhundert n. Chr.)*, Hamburg, 2006, 97.

(5) A. Tchernia, *Le vin de l'Italie romaine : essai d'histoire économique d'après les amphores*, Rome 1986, 142–145.

(6) Mais à propos des terres sigillées de 《L · HER · OPT》, selon Chr. Rico il y a la direction contraire à laquel des amphores sigillées de 《M · PORC》. Et I. Rodà indique la possibilité de l'existence des ateliers des terres sigillées de 《L · HER · OPT》 dans la territoire de Barcelone. Cf. Chr. Rico, Production et diffusion des matériaux dec construction en terre cuite dans le monde romain : l'exemple de la Tarraconaise d'après l'épigraphie, dans *MCV*, XXIX, 1993, 71–77; I. Rodà, Un episodi dintre de les humanitats: l'epigrafia. *Epigraphia “major” i “menor” : l'exemple de fabricant de teules Herenni Optat*, Barcelona 2015, 57–70.

* 『史学論叢』第46号(2016年)73~75頁(l'article du *Shigaku-ronso (Review of Historical Studies)* XLVI, 2016, pp. 73–75) から転載

別府大学学長裁量経費事業

発行日 2023年1月31日
発行 別府大学
大分県別府市北石垣82
編集 飯坂 晃治
研究代表 飯沼 賢司
印刷 株式会社クリエイツ.
大分県別府市亀川東町4番20号

ISBN978-4-88770-067-3C1021

ISBN978-4-88770-067-3C1021

